

---

# ミュールニアー戦記

ダン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ミュールニア―戦記

### 【Nコード】

N9075F

### 【作者名】

ダン

### 【あらすじ】

ここは名もなき世界・・・辺境で聖ヴァルミアニア神国の小隊長をしていた青年、心はいきなり本国に呼ばれて反乱軍の討伐を任される。しかし配属されたのは軍のゴミの集まりと噂される第10軍団だった・・・

## プロローグ

それははるか昔……

まだ世界がそこまで発達していなかった頃……

人は文化を作り……群れを作り……国を作った。

そしてそれぞれの国で、人々は荒れた土地を耕しながら幸せな生活を送っていた。

しかし人は欲に弱い。

やがて幾人かの国のリーダーが富を求め、他の国を攻撃して争いを始めた。

攻撃された他の国も自分たちの富と民を守るためにやむなく争いに参加した。

これが世にいう血地戦争である。

長い戦い…人と人・国と国とが争う中で一つの国がその争いに終止符を打った。

その国の名は「聖ヴァルミニア神国」。

その国は教皇、アエル一世をリーダーとして神という絶対的な名の下に次々と他の国を侵略していった。

紀元前785年 聖ヴァルミニア神国世界統一。

アエル一世は世界を統一した後もその天才的な智略と圧倒的な武力を使って国を豊かにしていった。

ヴァルミニア時代の始まりである。

時代が流れる数字の単位を暦とし、この時代をアエル暦と呼ばれ始めたのもこの時代である。

そして時は流れ、神の絶対的な支配の下で聖ヴァルミニアが世界を統一してから200年が経った……

著書、ミュールニアー戦記からプロローグより。

## プロローグ（後書き）

お久しぶりです！ダンです！いやゝ2作目も出せたと言うことで今回は戦記モノです。

まだまだ未熟者で行き当たりばったりですがよろしくお願いします！

戦乱に巻き込まれる青年の戦いを心行くまで楽しみください・・・

## 序の章 第一記 始まり

カシツキンツガンツ！

金属と金属がぶつかり合う音が聞こえる。

ここは木こりと狩人以外近づかない深い森の中。

その入り口付近で二人の人が対峙していた。

一人は左手に盾、右手に長剣を持った黒髪の若い男。

そしてその男に対峙しているもう一人の男は先ほどの男の様に盾は持っていないがその代わり、両手に大きな三つ又み槍またやりを持っていた。

透き通る様な青髪が風になびいて揺れる。

二人は武器を構えたまま一步も動かない。

「……………」

「……ハアツ！」

このまま永遠に時が流れるのではないかと思ったその時、先に動いたのは槍を持った青髪の男だった。

青髪の男は三つ又槍をしつかり持ち直すと、素早い踏み込みで黒髪の男に向かって突く。

「フッ！」

ガキーン！

黒髪の男は軽く息を吐くと手にある長剣で槍を横に払ってそのまま切り掛かる。

「クツ・・・ダア！」

青髪の男はそれをぎりぎり槍の柄の部分で防ぐと黒髪の男は青髪の男の腹を蹴り飛ばした。

「アゲツ！？」

青髪の男はいきなり蹴り飛ばされて思わず尻もちをつく。

慌てて立とうとするとすでに青髪の男の首には剣の切っ先が向けられていた。

後は黒髪の男が腕を少し振るだけで青髪の男の命を奪うだろう。

「まだまだ甘いな。アイル。」

黒髪の男はそう言つと剣を鞘に戻した。

「今回はいけると思つたんですけどね・・・心隊長はやっぱり強すぎですよ・・・」

青髪の男は尻をさすりながら黒髪の男に返事を返した。

どつやら黒髪の男の名は心、青髪の男の名はアイルというようだ。

「よせよ。オレはまだまだ弱いよ。さてそろそろ帰らないと村の皆が心配するぞ。」

「そうですね。最近はこの辺も山賊が出るそうですから……」

「全く物騒な世の中になったもんだ。」

二人はそんなことを話しながら近くに止めていた馬に乗り、村へ走らせた。

心達がいた森から数キロ離れた山あいの村ルスナ。

そこに二人は馬を止めた。

入口に歩いていくと体格のいい男が籠にたくさんの野菜を持って村に入って行くこうとしている。

アイルはその男を見ると大きな声で呼びとめた。

「あ、ベイルさんだ。おい！」

するとベイルと呼ばれた体格のいい男はこっちを向くとアイルに負けないくらい大きな声で返事を返した。

「おう。アイルじゃねえか！また心さんに負けたのか？」

「なっ!?!?・・・負けたけど・・・次は勝ちますよ!?!」

「ハハハツアイルも懲りないな。」

「くそー・・・今に見てるよ!?!」

「ほらほらそれくらいにしてさっさと村の中に入るぞ。」

心は言い合う二人の間に割って入って村に入ることを促す。

「ガハハツそうだな。早く家に帰らないとかあちゃんに怒られっちまう。」

「ベイルさんの奥さん怖いもんね。」

三人はしゃべりながら村に入っていった。

「やあ心さん。調子はどうだい?」

「心さんお疲れ様!?!」

「心さん取れたてのトマトがあるから持っていきなよ!」

村に入るとすれ違いたくさんの村人たちが心に声を掛けてきた。

心はそれに返事を返しながら道を進んでいく。

「相変わらず心隊長はみんなから人気ですね。」

アイルが両手に村人から貰った野菜をいっぱい抱える心を見て、  
うらやましそうに言った。

「そりやそうだろう。心さんが行政官としてこの地に赴任してから  
この村は見違えるほど豊かになったもんな。」

「オレはそんな高い評価をうける人間じゃないですよ。ただ村のみ  
んなの助けになればと動いただけですから。」

ベイルの褒め言葉に心は謙虚に返す。

「そんな謙虚になるなよ。心さんの悪い所はその謙虚さだな。もっ  
と自意識過剰になってもいいと思うぜ？」

「これが自分の性格ですから・・・」

心は自分がそんな大層な器ではないと思っている。だからもっと自  
意識過剰になれと言ってもそんなこと出来そうにない。

「全く心さんはほんとにクールだな。あ、そろそろ行かねえと・・・  
心さん、アイル。また明日な！」

そう言うとベイルさんは慌てて帰っていった。

「ほらアイル。オレ達も宿舎に帰るぞ。」

「はい心隊長！」

心達が住んでいる屋敷は村の端っこの高台にあった。

屋敷といつても村人達と同じ、木で出来た貧相で今にも壊れてしま  
いそうな家である。

本来ならば、地方の行政官は高級なレンガと岩で出来た豪華な屋敷  
に住むのだが心は居心地悪いからと断つたのだ。

こんな性格の心だからこそ村人に好かれるのだろう。

「あれ？誰かいますよ？珍しいな。」

心達が帰ると、その貧相な屋敷に人が立っていた。

その姿は騎士の様に甲冑を着て、腰には剣をぶら下げて横には馬ま  
でもいる。

「あれは首都の騎士だな。こんな村に何の用だろう？」

心は疑問に思いながらもその騎士に話しかける。

「あの・・・この屋敷のものですが何か用でしょうか？」

「あなたが桐生 心隊長ですか？あなたに教皇様から直々に勅命を  
たずさまわっております。」

騎士はこちらを向くと手紙を差し出してきた。

ちなみに桐生きしゅうとは自分の名字だ。

というか今この騎士は何て言った？

「教皇様からの直々の勅命!？」

アイルが今の自分の気持ちを代弁するかのように大きな声で叫ぶ。

教皇様から直々だと?それも勅命?

こんな一介の・・・それも辺境の地にいる小隊長に一体何を頼もうというのだろうか?

心は騎士から手紙を貰い、それを開ける。

「桐生 心隊長を将軍に任命し、なお反乱軍討伐隊の総司令官とする。教皇 アエル三世」

自分を将軍に任命するだ?!いや問題はその次の言葉だ・・・

「反乱軍討伐隊の総司令官をする・・・か。」

「そうです。直ちに心隊長・・・いえ失礼しました。桐生将軍は首都に出勤してもらいます。」

「いますぐじゃなきゃあだめか?」

「はい。教皇様には早く来させるようにと通達が入っていますので申し訳ありませんが・・・」

「いや分かった。こちらこそ無理なお願いを失礼します。ではすぐ準備をしますので。」

「そうしてくださると助かります。」

心は屋敷の中に入るとすぐさま出かける準備をする。

「心隊長・・・ほんとうに行くんですか？村のみんなはどうすんです？」

アイルが不安そうな顔で心に尋ねる。

「ああ。教皇様からの直々の勅命なら仕方が無い。村のみんなにはお前からよろしく言っておいてくれ。」

「そうですか・・・あ、オレちょっと用事があるので出かけてきます。」

そう言うとアイルは外に飛び出していった。

「おいアイル！？たくっ・・・仕方ないやつだな・・・」

心は飛び出したアイルに構わず、一人で黙々と荷物をまとめた。

「すみません待たせてしまって・・・荷物は準備できましたから」

「大丈夫です。それでは行きましょう。」

「道中じちゆうよろしくお願いします。」

「いえ、こちらこそ。」

軽めの挨拶を済ませ、二人は馬に乗って村の入り口まで行く。

とここで伝令役の騎士が突然立ち止まった。

「余計な気遣いかもしれませんが・・・村の人たちと別れを交わさなくていいんですか？」

「いいんですよ。それに今会つと別れが辛くなりますから・・・それに一生会えないわけではありません。」

「そうですか。あなたは強いですね。では・・・待ってくださいー！ー！」

騎士の声は遠くからくる大声にかき消された。

心が後ろを振り向くとアイルが息を切らしながら走ってくる。

そしてその後ろには・・・

「おい心さん！黙って出て行くなんて水臭いじゃないか！！」

「そうだよ！別れぐらい交わさせてくれよ！！」

「心さん！帰ったらうちの野菜をたんと食ってもらうからね！？」

入り口にはベイルさんなど村のみんなが集まっていた。恐らくアイルが呼んだのだろう。

「みんな・・・」

「隊長。留守は僕らに任せて首都でがんばってください！それまで心隊長に勝てるように鍛錬しますから！！」

「アイル……」

心はアイルの心遣いと村のみんなが集まってくれたことに素直に感動していた。

心は片腕を上げてみんなの声援に答える。

「みんな……行ってくる！！」

そして馬を走らせた。

「いい人達ですね……」

「ああ。オレは幸せ者だ。」

後ろではまだ村のみんなが手を振っている。

今、心の胸は幸福でいっぱいだった。

だが彼はまだ知らない……

これから起こる厳しく、辛い現実を……

戦いのページは今、開かれた……



## 第二記 首都ヴァルハラ

そこは辺り一面岩だらけの山道。

パカッ・・・パカッ・・・パカッ・・・

申し訳のない程度の整備されていない道を二頭の馬の足音だけが木<sup>こ</sup>霊<sup>たま</sup>する。

パカッ・・・パカッ・・・パカッ・・・

そしてその二頭の馬の足音が止まった。

先頭を歩いている馬に乗っている騎士が後ろを振り向く。

「ここを真っ直ぐ通ればすぐに中央が見えてきます。將軍殿。」

「ありがとう。しかしかなり遠い所まで来たな・・・」

後方の馬に乗っている先頭の騎士が將軍と呼んだ青年、桐生 心は  
そう言いながら腕を上に向けて体を伸ばす。

「すみません。馬車など用意できればよかったです。時間が無かつたもので・・・」

騎士がすまなさそうに頭を下げると心も慌てて弁解する。

「い・いや気にしないでくれっ！ただこんな長旅久しぶりだからちよっと疲れただけだよー！！」

普段、心は上からの立場というものに慣れていなかったなので騎士が頭を下げると途端に相手に対して申し訳なく覚えてしまう。

「それは・・・疲れさせて申し訳ありません。」

騎士は再び頭を下げる。

「ああつ！だからそういう意味じゃ・・・!?!?」

「以後、気を付けますので・・・」

どンドン墓穴を掘っていく心。

「あつ！ほら首都が見えてきたぞ!?!?」

心は話題を変えようとわざと大きな声で前を指差した。

心が指差した方向には何百メートルもあるつかという巨大な城壁が見えていた。

聖ヴァルミニア神国首都　ヴァルハラ

今の世界の中心であり、現在のヴァルミニア教皇であるアエル三世が住んでいる場所でもある。

「では行きましょう。大分遅くなってしまったので教皇様もお待ちのハズです。」

騎士は馬を走らせて城門へと向かう。

心も遅れずに騎士を追って城門へと馬を走らせた。

「いらっしやい！今日は野菜が安いよ！！」

「このメロン、もう少しまけてくれないかな？」

「さあ新商品が出たよ！買った買ったあ！！」

都市の中は街の人と商人が行き交い、かなり賑わっていた。

「久しぶりにきたが相変わらず活気に満ちてるな。」

「そりゃ世界の中心ですからね！教皇様のおかげで街の人も豊かに暮らしていますし。」

「豊かに暮らしている・・・か・・・」

確かにこの街の人々は豊かに暮らしている。だが心は知っていた。

今の教皇、アエル三世は自分と関わりの深い都市や媚びを売っている都市などには援助を出すがそのほかの都市に関しては完全に都市の行政官任せでロクな政治を取っていない。

しかも辺境の街や村からは高い税を取って民を苦しめている。

現に今いる反乱軍はそんな街や村が重い税に耐えかね、団結して起こったものだ。

おそらくこの騎士は辺境の街のことなど詳しくは知らないのだろう。

「まあそんなことが発覚はっかくすれば都市の中心部ほんぶで暴動ぼうどうが起こりかねないからな・・・」

「どうしたんですか？」

騎士がポーっとしていた心に話しかける。

「いや何でもない。行こうか。」

だが自分には関係がない。オレは自分の周りが平和ならそれでいい・

そして心と騎士は宮殿へ向かった。

「止まれ！」

宮殿の前では屈強くつかうそうな二人組みの兵士が心達の前に立ちはだかった。

「貴公は何者だ？」

「アエル三世からの勅命を受けて桐生將軍を連れてきました。」

「おおっ！お待ちしておりました。どうぞお通り下さい。」

騎士と兵士はそんなやり取りをすると兵士は素直に道を開けてくれた。

「では行きましょう。」

心と騎士は宮殿の中へ入っていった。

「ここで少々お待ち下さい。」

騎士はそう言うところかへ言ってしまった。

宮殿内は全体がきらびやかな金や宝石に囲まれ、いかにもお金がかかってますよという風な感じだった。そして前には一つの椅子がある。

「教皇様のおな——り!!!!!!」

突如大きな音が聞こえてそこから四十代位だろうか弱弱しい体の法衣をきた男が出てきた。

男は偉そうに目の前にある椅子に座った。

この男が今の聖ヴァルミニア神国教皇、アエル三世である。

「桐生 心將軍だな？まずは長い旅路をご苦労だった。」

アエル三世は低い声でそう言うと心も腰を低くして頭を下げる。

「勿体無いお言葉です。」

「それより今回の勅命を聞いたな？」

「はい。反乱軍討伐の総司令官とは真まことに光栄です。」

「うむ。最近の反乱軍は次第に規模を増して調子に乗っておる。そなたの働き、期待しているぞ？しかし……」

アエル三世はニタニタと笑みを浮かべながらこっちを見た。

「ずいぶん田舎くさいのお……さすが辺境の村から来たと言っべきか？」

それを聞いて思わず心は怒鳴りそうになった。

その思いを間一髪で押しとどめる。

「申し訳ありません……以後気をつけます……」

「そうしてくれ。」

謝る心の手は怒りで震えていた。

その後、退室を許された心は宮殿の外に出てしばらく離れてからおもいつきり悪態をついた。

「あのクソ教皇……人をバカにするところと言い、昔と何一つ変わってねえな。」

「まあそう言っな。あれでもオレ達が忠誠を尽くす主君だ。」

不意に後ろから声が聞こえた。

「ウィルター上級將軍……」

「よお。久しぶりだな。あと上級將軍てのヤメ口。そして昔のよう  
に呼べ。」

心が後ろを向くと純白の鎧をまとった心と同じくらいの青年が立っ  
ていた。

青年の名前はクレス・ウィルター。

聖ヴァルミアニア神国に仕える上級將軍で中央でも有名な貴族出身の  
いわゆるエリート軍人だ。

そして心の一番の心の友である。

上級將軍とはヴァルミアニア神国にある軍を指揮する者の位のこと  
その位は四つに分かれている。

まず一番下で軍の部隊を指揮する位の事を小隊長「ナイツ」、次は  
軍の副司令官や一部の軍を指揮する將軍「ゼネラル」、ゼネラルを  
指揮し、全体の軍を指揮するのが上級將軍「ネメシス」、そして一  
番上が全ての軍を指揮し、統括する元師「ヴァルキューレ」。

この四つで成り立っている。ちなみに心はゼネラル、クレスはネメ  
シスの地位にいる。

「分かったよ。クレス。しかし本来ならお前が行くべきなんじゃない  
のか？」

將軍は普通なら上級將軍の下で軍を指揮する。ならば反乱軍を指揮するのは心ではなくクレスのハズだ。

「教皇様はオレ達が出るまでもなく將軍で十分だと考えているらしいな。ちなみにお前を推薦したのはオレだ。」

「余計なことしてくれたよ・・・」

心は苦笑いをする。

「いいか心？これはチャンスだ。反乱軍を討伐すれば教皇の目に止まる。そうなればお前はまた首都に戻るかもしれないんだぞ!？」

クレスは真剣な顔で心に言う。

「クレス・・・オレはもう首都に戻る気はないよ。オレは静かに暮らしていればそれでいい。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

クレスは真剣な顔のまま何も言わずにオレの話を聞いていた。

「・・・・・・・・分かった。悪かった。全くお前は相変わらず出世欲つてのがねえよな?」

クレスは笑顔で心を見る。

「フッ、お前も世話焼きなのは相変わらずだな。」

心も口の端を吊り上げて笑って返す。

「ハハツ！ちがいねえ！！」

そのまま二人はしばらく笑いあった。

「ハハハツ！ところでせっかく首都に来たんだからどこかで食事でもしないか？」

「いや上からすぐに軍を整えて出陣しろと通達がきてるからこのまま部隊を見に行こうと思う。」

「大変だな。じゃ帰ったら付き合えよ？もちろんお前の奢りで。」

「分かった。じゃまたな。」

「死ぬんじゃねえぞ！！」

そしてクレスと別れた後、心は自分の軍を見る為に兵公舎に向かった……



### 第三記 第10軍団

「ここが兵公舎か……」

心は思わず絶句した。

心が見たものは巨大な家だった。

ただし、ボロボロの……

壁は塗装がかなり剥げてあちこちからツタが這っていた。

しかも周りにはゴミが散乱し辺り一面すごい臭いが立ち込めている。

「え〜と……場所は確かにココだよな？」

心は自分の持っている紙と軍の名前らしき看板を照らし合わせてみた。

紙には聖ヴァルミニア軍第10軍団と書かれていた。

目の前にある看板を見る。

聖ヴァルミニア軍第10軍団

看板には確かにそう書かれていた。

「……とりあえず入ってみるか。」

心は扉ドアに手をかける。

ギイツ・・・

ドスッ！

心が扉を開けた瞬間、何か飛んで来た。

それは心の横を掠めて壁に刺さる。

心はそれを見てサッと血の気が引いた。

あっ・・・あぶねえ〜!?!?!?!?

壁に刺さったのは小型のナイフだったのだ。

「ウワッ！外しちゃった!?!」

「ギャハハハッ！下手くそが〜!?!」

「うるせえ!?!」

兵公舎の中は、外とは比較できないくらいの大量のゴミで埋め尽くされていた。

そしてその真ん中で酒瓶さかびん片手に大騒ぎする男達。

「お前ら！いきなり何をするんだ!?!」

「何って新しい将軍が来るっていうから歓迎かんげいの練習をしてんだよ。」

「歓迎つてこれがか!？」

「つたりめえだろ?今度の將軍様はどんなのかねえ?」

「多分、ヒヨロヒヨロのモヤシみたいなやつだろっぜ!」

「違いねえ!ハハハハハッ!」

そしてまた馬鹿笑ばかわらいいする男達。

そろそろ心も我慢がまんの限界げんかいが近づいてきていた。

「静かにしろ!」

失礼もうきていた。

心の怒鳴どなり声こゑで公舎の中がシントと静かになる。

「本日付けでこの10軍団の將軍に任命にんめいされた桐生 心だ。みんな  
よろしく頼む。」

そう言う心は軽く礼をした。

そのまま男達はしばらく黙っていたが男達の中で一際大柄ひとまわな男が喋り始めた。

「アンタみたいなモヤシが將軍「ゼネラル」だと?世も末だな。」

すると公舎からドツと一斉に大爆笑が起こった。

「何が可笑しい？」

「クククツ！いや若いのに可笑想だなど思ってよ。こんな落ちこぼれの軍団に配属されちまって。」

「落ちこぼれ？」

心の頭に疑問詞ぎんしが浮かぶ。

「知らないのかよ？」

次に発言したのは体は細いが背がかなり高い男だった。

「この第10軍団はほかの軍団でいらなくなったりした奴らを集めた軍団なんだよ。ようするにオレ達は用済みになって捨てられたいわゆる落ちこぼれってワケ。」

そして持っている酒瓶を一気に飲み干す。

なるほど……だからこんなに荒れているのか。

しかし……

「なぜお前らは這い上がろうとしない？」

心はその男の顔を見て真剣に言った。

男は心のその言葉に驚いたようだったがすぐに呆おきれたような顔になって反論する。

「アンタバカだろ？この軍団に入った時点でオレらはもう昇進しょうしんできないことが決まってるだっつーの。」

「そんなこと誰が決めた？」

「あっ？」

心の言葉に男の言葉が止まる。

「だから誰がそんなこと決めたんだ？」

心はもう一度同じ事を男に言った。

「誰が決めたとかじゃねえよ。これは運命なの。分かれよ。」

「それはただ逃げてるだけだ。」

男の言葉に心は間髪かんぱつ入れずに言い返す。

「……なんだと？」

「運命だから仕方ない。なぜ運命だと決めつける？そんなこといつ、誰が決めた？それはお前がもうダメだからと運命を理由にして逃げているだけに過ぎない。」

「……調子こいてんじゃねえぞガキがあー！！」

男はついにキレて心に殴りかかっていった。

「やめるキース!!」

その行動を止めたのは最初に言葉を発したあの大柄の男だった。

「バ・バーンさん・・・」

すると背の高いキースと呼ばれた男は殴りかかるのをやめる。

「おい。そこの將軍さんよ。そうちゅーとあれかい？アンタの下につけばオレ達はまた上に昇れるってことかい？」

「昇れるんじゃない。昇るんだ。」

「・・・・・・・・・・」

バーンと呼ばれた男は黙る。

そして・・・？

「ククク・・・ガハハハハハッ!!」

男は大声で笑い出した。

その様子に周りにいた男達とキースは呆然とした。

心でさえいきなり笑い出した男に驚いて言葉を発せなかった。

「アンタ、おもしろいな！いいぜ。その話乗った！！オレの名前はバーン・ドーンだ。ちなみに歩兵隊ナイツだ。これから頼むぜ。我らが將軍「ゼネラル」さんよお!!」

そう言ってバーンは心に手を差し出してきた。

「ああ。よろしく。バーン。」

心はバーンの手を堅く握る。

「ワイは弓兵部隊ナイツ、ヘテロ・オオサカヤ。まっ、よろしゅー。」

「・・・ネウロ・シャインだ。・・・工作隊のナイツをしている。・  
・・・・よろしく。」

他の第10軍団のメンバー達もバーンが握手したのを見て、次々に握手を求めてきた。

どうやらこのバーンという男は第10軍団の中心的メンバーだったらしい。

その時、目の前に10代後半くらいの女の子が握手を求めてきた。

「私はリリヌ・ヘテカーリーナよ。槍兵のナイツをしているわ。これからよろしくね?」

そう言ってリリヌという少女はウィンクをしてきた。

自然に顔が赤くなる。

「ほら！最後はアンタよー!」

最後にリリヌに引つ張られながら渋々とあのキースと呼ばれた男が出てきた。

「・・・キース・デカルトだ。騎馬隊のナイツをしている。一言言っておく。オレはアンタをまだ認めちゃあいない。それだけは覚えとけ・・・」

キースはそういい捨てるど公舎から出て行った。

「將軍さんよ。気を悪くしないでおくれよ。あいつはちょっと事情があつて將軍とか貴族とかが大嫌いなんだよ。だからよ、代わりにオレが謝るから許してやつてくれ。」

バーンがそばにきて謝罪をする。

「別に気にしてないよ。バーンはいいやつだな。」

「よしてくれ。ただお節介なだけだよ。」

心の言葉にバーンは頬をポリポリとかいて照れているのを誤魔化す。

最初はどうなるかと思つたが・・・なんとかやっていけそうだな。

心は照れ隠しをしているバーンを見て、そう思つた。

ここに桐生 心將軍 貴下の第10軍団は正式に発足した。



## 第四記 最高の出陣

あの兵公舎での騒動から丸一日が経った。

今、心率いる聖ヴァルミア第10軍団は必死で出陣の用意をしている。

「…てかまだこの軍団に配属されてから一日しか経っていないのにいきなり出陣っておかしかねえか？ 將軍さんよ。」

その出陣の準備の様子を見ながら大柄の男、バーンがぼやいた。

「仕方ないだろう。元々オレが来た理由は反乱軍の討伐だ。出陣の準備をするのは当たり前だろう。まさかいきなりナイフが飛んでくるとは思わなかったが・・・あ、その物資はアッチだぞ。」

その横で準備の指揮を執りながら同じくぼやくのはこの第10軍団の將軍である桐生 心だった。

「あれは悪かったって！ ほんの出来心だったんだよ。」

それに手の平を重ねて謝るバーン。

「まあそれは良しとして…いよいよ出陣だな。」

「ああ。たくつ出陣なんて何年ぶりだろうな。」

「まあ死なない程度に戦ったらいいさ。」

それを聞いて隣にいたバーンは目を丸くした。

「・・・アンタ、変ってるな・・・この將軍なんてみんな死んでもいいから突撃しろ！って言うやつばっかなのに・・・」

「死んだら名誉もクソもないだろう？なら死なない程度に戦うのが一番いいのだ。」

そう言って自分の黒髪をうっとおしそくに後ろに払う心。

「やっぱりアンタはおもしろいな。オレのいつ無くなってもいいこの命。アンタに預けるぜ。」

「縁起えんぎでもないこと言うなよ。ほら準備が終わったみたいだ。さっさと行くぞ。」

「ハイハイ。將軍様。」

バーンの嫌味を心はサラリと聞き流して馬に乗る。

心の目の前にはすでに出陣の準備を終えた第10軍団のメンバーが心の号令を今か今かと待ちわびるように一斉に並んでいた。

「桐生將軍。第10軍団出陣準備、ただ今整いました。」

「君はあの時の・・・」

準備の終了を報告してきたのは心と共に首都に来た、あの伝令役でんれいやくの騎士だった。

「その節はお世話になりました。自分は今回クレス將軍の命で桐生將軍の副司令官に任じられましたロイ・アルベルトです。階級はゼネラルです。」

クレスめ・・・やってくれる。ま、全く知らないやつがくるよりはマシか。

「君が副官か。顔見知りの方が何かと話しやすい。これからよろしく頼む。」

「はい！！こちらこそよろしくお願いします！」

「それより出陣はまだか？そろそろダルくなってきたんだが・・・」  
見ると少しずつだが兵士達の隊列もずれてきている。

「將軍になんと云う言葉遣いを！今すぐ謝罪しろ！！」

となりではロイがバーンに向かって怒鳴っている。

「ロイ、別に構わないよ。」

「しかしそれでは兵士達に示しが！？・・・いえ分かりました。」

「助かるよ。」

そして心は出陣の号令の為に兵士の前に出る。

「おら静かにしろ！將軍からのお言葉があるぞ！！」



その声量の大きさに地面と空気が震える。

よかった・・・

心はまだ続く兵士達の雄たけびを聞いてホツとした。

そしてさらに号令をかける。

「第10軍団出陣!!」

そして心の号令で兵士達は皆、首都ヴァルハラを旅立っていった。

「よお將軍さん。さっきは見事な演説だったぜ。」

心が馬に乗って進んでいると横からバーンが話しかけてきた。

「ただ思った事を口にしただけさ。かなり緊張したがな。」

「それでもアンタはたったあれだけの言葉でこの軍団をまとめた。たいしたもんだ。」

「そりゃどうも・・・」

「さっきから何なんですかアナタは!!」

バーンとの会話の中、横で心に従軍していたロイが口を挟んだ。

「階級が上の桐生將軍に敬語も無しに偉そうに・・・身の程をわきまえなさい!!」

「あ？オレは階級なんてどうでもいいんだよ。必要なのはソイツが仕えるべきやつなのか違うのかだ。」

「そんな言い訳が「いいんだよロイ。」しかし將軍！？」

ロイの怒声を心がやんわりと止めにかかる。しかしロイの怒声は終わらない。

「このままでは兵士や他の軍団に示しがつきません！！」

「大丈夫だよ。いざという時はオレが注意するからここは許してくれないか？」

心はロイに頭を下げた。

「き・桐生將軍！？頭をお上げ下さい！？・・・分かりました。しかしあまりにも目に余るようでしたら私がある場で切捨てますから。」

「ああ。ありがとう。というワケであまり目立つことはしないでくれよ？バーン將軍。」

「ハイハイ分かりましたよ。」

「報告！！」

心とロイ、そしてバーンが話していると兵士が大声を張り上げて心のそばで膝をついた。

「どうした？」

「はっ！先ほど偵察隊から連絡が届き反乱軍の先見と思われる部隊が発見されたそうです！」

それを聞いて第10軍団の中に緊張が走る。

「やっとお出ましか・・・待ちくたびれたぜ。」

バーンがニヤリと笑うがその目つきは戦う者のそれになっていた。

「敵の数と兵種は？」

「はっ！数はおよそ1千。兵種は全て歩兵という報告です。」

ロイの質問に報告の兵士がはきはきと答える。

「將軍さんよう。アンタの腕の見せ所だぜ？」

「將軍。指示を。」

バーンとロイが心を見る。

心も二人を見て頷いた後、後ろの兵士たちに叫ぶ。

「全軍戦闘準備！！」

「ハッ！！」「ハッ！！」

心の号令に第10軍団の兵士全員が声を揃えて準備にかかる。

今、心達の戦いの幕が開つつとじていた・・・

## 第五記 初陣

「全員早く戦闘態勢になれ!!」

「オレらの初陣だぞ! 気合入れろ!!」

ロイとバーンの声と迫力に押されて兵士達が慌ただしげに動く。

敵が現れたことで10軍団は戦闘準備に入っているがこの軍団が戦いをするのは久しぶりなので皆準備に手間取っていた。

それをロイやバーンなど各隊長達が声を張り上げて戦闘態勢を急がせている。

この辺は改善しなくてはならないな……

心はそんな第10軍団の様子を見て考えを巡らせていた。

いくら数が多くても奇襲などを受けるなどして戦闘準備が出来ていなくて、戦う時に武器を持っていなくて死にましたでは話にならない。

「スマネエな。何しろ戦場に出るのが久しぶりだからみんな鈍っちゃまってんだよ……」

そんな心の考えが分かっているのかこの軍団の一番の古株であるバーンは申し訳なさそうに謝ってくる。

「気にする必要はないさ。こんなことは経験を積みばいくらでも早

く出来るしな。」

心はバーンに軽く返す。

「しかし將軍さんよお。ほんとに勝てるのかい？作戦も何も全く聞  
いていないんだが……」

バーンが顔をしかめて心に聞く。

「心配するな、ちゃんと作戦はあるさ。といっても戦場では何が起  
きるか分からないからな。」

「何が起こるか分からないっておいおい……しっかりしてくれよ。  
」

「將軍、戦闘準備が整いました。」

心とバーンが話していると、ロイから準備完了の報告がきた。

「さて始めるか……全軍進撃！！」

心の号令で戦闘態勢に入った全員が動き出した。

一方、こちらは反乱軍の陣地。

「ナードル隊長、我が軍の目の前に敵を発見しました！数はおよそ  
2000、兵種は歩兵と弓兵だそうです！」

「とうとう来たか……ヴァルミアの犬共が……」

報告の兵の声によって馬に乗っていた先見部隊の隊長、ナーデルは  
呟く。

「確か数は2千といったな？」

「はい！」

ナーデルは反乱軍を率いる將軍の中でも若くてマジメな人望の厚い  
将だった。

ナーデルが頭の中で戦略を考える。

いくらなんでも少なすぎる・・・伏兵か？いやこんな少数の部隊に  
それをする意味がない。となると・・・

「敵も先見部隊か先発隊だろう。勝機はある。全軍戦闘準備！！」

ナーデルは後ろの兵士に向かって叫んだ。

そしてヴァルミア軍と反乱軍の両軍が対峙して数分後、両軍は激  
突した。

まず動いたのは心率いる第10軍団だった。

「全軍鶴翼の陣を取れ！」

鶴翼の陣とは軍を鶴の翼のように広げて囲み、敵を殲滅する陣であ  
る。本来は味方が敵より圧倒的に多い時に短期で戦いを終わらせる

為の攻撃陣だが心はかまわずそう叫んだ。

心の号令で第10軍団の兵士達が真横に広がる。

「鶴翼の陣だと？敵の作戦か？ここはセオリー通りにいくか・・・  
追突の陣を取れ！」

ナーデルは敵が防御の陣を取った事に少し驚いたが的確に味方に指示を出した。

反乱軍の兵士達が真っ直ぐに陣形を作り、第10軍団の真ん中に突撃する。

追突の陣は鶴翼の陣に対抗する為の攻撃陣であり、広がった為に兵士達の層が薄くなった中央を一気に攻撃して突破する突撃用の陣形だ。

反乱軍の攻撃に中央の兵士達が段々と押されていく。

「將軍さんよお、そろそろ中央がやばいぜ。」

歩兵隊ナイツのバーンが心に言う。その口調には少しの不安も混ざっていた。

突破されそうなのが自分の隊なのもあるだろうがやはりバーンも心の事を完全に信用できてはいないのだろう。

そろそろか・・・

「バーン、中央の歩兵隊を左右に後退させてくれ。」

「後退！？なにいつてやがる。そんなことしたら敵が本陣までくるじゃねえか！！」

「早くしろ！犠牲者を増やしたいのか！？」

「チツ・・・分かったよ。中央の歩兵隊は左右に後退しろ！！」

バーンが洪々ながらも中央の歩兵隊に後退命令を出す。

中央の歩兵隊がバーンの命令で左右に下がり、敵に道を開けた。

「敵が後退するぞ！今の内に押し込んでしまえ！」

ナーデルの声で突撃していた兵士達が一斉に本陣へと迫る。

「今だ・・・ヘテロ弓隊、攻撃開始！！」

「よっしゃーやっとワイらの出番やで！弓隊放てー！！！！！！！！」

いつの間にか本陣の後ろにいたヘテロ率いる弓隊が心の号令で一斉に矢を放った。

突撃していた反乱軍に矢の雨が降り注ぐ。

「くっ！？全軍後退しろ！！」

「リリ又槍兵隊とネウロ工作隊攻撃開始！」

後退をしようとしていた所に今度は近くの林に隠れていたリリ又と

ネウロの隊が横から攻撃を始めた。

「リリ又隊攻撃開始！敵を逃がしちゃダメよ！！」

「・・・ネウロ工作隊・・・攻撃開始・・・」

その間に左右に後退していた歩兵隊が退路を塞ぐ。

「ナーデル將軍伏兵です！さらに退路も塞がれましたあ！？」

「何だと！？」

戦いは完全に心率いる第10軍団のペースとなっていた。

「よし、オレらも行くぞ！」

「待ちくたびれたぜ。さあ暴れるか！」

「心將軍一人で行かないで下さい！？」

心とバーン、ロイも戦闘に参加するために戦場へと向かった。

「・・・私の負けか。」

ナーデルは混乱している陣の中で一人冷静にそう呟いた。

自軍の陣形は完全に崩れさり、退路も絶たれた。最早自分に残されている道は味方を捨てて逃亡するかここで潔く死ぬかの二択のみ。

「將軍退路を塞がれ・・・ギャアツ!？」

目の前の伝令役の兵士が叫び声と共に口から血を流しながら崩れ去る。

その後ろから心が現れた。その手には刀が握られている。

「反乱軍のゼネラルとお見受けします。」

「・・・そうだ。お前がこの軍団のゼネラルか？」

「そうです。命が惜しければ投降してください。こちらが悪いようにはしません。」

「断る。我が軍団の兵士達の命、その命を持って償え!!」

ナーデルはそう即答すると、腰の剣を抜き放って心に切りかかった。

ザグッ!

何かを突き刺すような鈍い音。そして血を流して倒れるナーデル。

「グプツ・・・強い・・・な・・・」

倒れたまま途切れ途切れの言葉を吐くナーデル。

「アンタ、最初から死ぬ気で・・・」

「・・・自らの失態が・・・原因で・・・兵士が死んでるのに・・・おめおめと自分・・・だけ生き・・・残るこ・・・は私に・・・できない・・・」

「……………」

心は何も喋らなかった。

「敵に…頼むのも…変な話…だが…頼み…聞いてくれ…  
ないか？」

「何だ？」

「クリスという少女に会ったら…私に…構わず…自分の道を歩け…と伝えて…ほしい…」

「分かった。必ず伝えるよ。」

「すま…ない…君の未来に…栄光…あれ…」

そのままナーデルの瞳が光を無くす。

「…伝えるよ。必ず…」

心はナーデルのまぶたを閉じると、自分の陣地へと戻っていった。

この勝利は、反乱軍・聖ヴァルミア国共に衝撃的な出来事となった。

人々はこの戦いを、ジハード・スタート「聖戦の始まり」と呼んで後の世まで語り継いだという。

かくして、心率いる第10軍団の初戦は大勝利に終わった。



## 第六記 襲撃

「疲れた〜！將軍さんよお、ちよいと休憩しないか？」

周りの兵士達が静かに歩いている中、背中に大剣を背負った大柄な男が疲れた顔で馬に乗った男にそう言った。

「ダメだ。今ここで休憩したら街に着くのが遅れてしまう。さすがに夜の森で野営をするのは避けたいからな。」

馬に乗っている黒髪の男が男の提案を即座に拒否した。

「そうですね。だいたいほんの二時間前に休憩したばかりじゃないですか。」

黒髪の男の傍らにいた同じく馬に乗っている男もその意見に賛同する。

「だってよく歩いても歩いても見えるのは木ばっかだぜ？いい加減飽きてきたぜ。」

大剣の男、ヴァルミア第10軍団の歩兵隊ナイツであるバーンは思わず愚痴をこぼす。

「狭い山道じゃないだけマシだろう。」

「ホントです。山道なんて歩いた日には足が痛いわ太陽が照って暑いわでもう散々ですよ？」

そのバーンの愚痴を聞いている黒髪の男ともう一人、ヴァルミニア第10軍団の將軍と副將軍である心とロイはバーンにそう返した。

「それにもう後30分も歩けば目的の街まで着きますよ。」

「何？よし、野郎共、行軍スピードを上げる！チンタラしてる奴はオレが尻を蹴飛ばすぞ！！」

ロイの言葉を聞いたバーンは即座に周りにいる自分の部隊に声をかけて自分も森の中を走っていく。

「元気な事ですね。」

「ああ、そうだな。」

あの壮絶なる大勝利をおさめた初陣から丸二日が経っていた。

心の作戦がうまくいき、負傷者がほとんど出なかった第10軍団は一日休んだ後にそのまま行軍を再開したのだった。

今は近くの街を目指して森の中を突き進んでいる。

「そういえば目的地のセルドアって街はどんなところなんだ？」

不意に頭の中に浮かんだ疑問を心はロイに聞いてみる。

「セルドアですか？いい街ですよ。一度命令で行ったことがあります。が外はたくさんのお店で賑わっていて住民も常に笑顔でいる活気のある街です。」

「なるほどな。街に着いたらのんびりと観光してみるのもいいかな。」

「それには賛成ですが、最近治安も悪くなって野盗も・・・敵襲う!?」「」

心とロイが街について話していると後ろを行軍していた兵士から叫び声が聞こえた。

「どつやらこの辺の治安も悪いようだな。」

「そんな事より早く行きましょう!」

心とロイは叫び声が聞こえた後方へ急いで馬を走らせた。

心とロイが後方に着くと第10軍団の兵士達は革鎧とショートソードで武装した十数人の男達に襲われていた。

「野盗だな。大方、軍の食料が目的か・・・」

「手の空いてる者は食料庫を守れ!誰か前衛の兵士に状況を知らせるんだ!」

ロイが腰の剣を抜きながら周りに指示を飛ばす。

心の前にも二人の野盗が剣で切りかかってきた。それを心は一人目を一回剣を交えただけで切り伏せ、返し際に二人目も切り捨てた。

「うわああ!?!」

「がふっ!?!」

肉と骨を断つ感触が心の腕から神経へ、そして脳に伝わる。

いつになっても心にとってこの感覚は慣れないものだった。

自分の手で他人の命を終わらせる・・・それが心にとてつもない罪悪感を与えるのだ。

「桐生將軍危ない!?!」

ハッと心が気付いた時には目の前に剣を振りかぶっている野盗がいた。

考え事をしていた心の反応が一瞬遅れる。

まずっ・・・!?!?

ズパッ!!

ドサリと倒れる野盗、その後ろには大剣を振り下ろした格好のバーンがいた。

助かった・・・

「後方が騒がしいから来てみれば・・・何死にそうになってんだよ。」

「悪い。助かったよ。」

「将軍！？大丈夫ですか！？」

顔を真っ青にしたロイが心に駆け寄る。

「大丈夫だ。それより状況と我が軍の被害は？」

「ハッ！我が軍は多少の負傷者は出ましたが幸いな事に死者は出ていません。しかし食料庫を襲われ、兵糧の三割を奪われました。野党の集団は目的を達して森の中へ撤退したようです。」

最後のロイの言葉には悔しさが滲み出ていた。

「とりあえず死者が出なくてよかったよ。」

「よくありません！不意打ちとはいえ、野盗程度に食料を奪われるなんて……」

ロイの拳が怒りに震える。

仮にもキチンとした訓練を受けた兵士が野盗程度に遅れをとってしまったのだ。その屈辱は計り知れないだろう。

「あまり気に病むな。生きていればまた借りを返せるさ。」

「……はい。」

心がそう言つとロイは怒りを隠しきれないが冷静に返事を返した。

「それより早く行かねえと夜になっちまうぜ？」

バーンの言葉に空を見るともう日が落ちかけている。

「マズイな。夜になったらあの野盗共がまた襲いにくるかもしれない。急ぐぞ！」

心の号令で第10軍団は行軍を再開した。

行軍を開始した第10軍団は心が行軍スピードを上げたおかげでなんとか日が暮れる前にセルドアの街に着く事が出来た。安心する心と第10軍団の面々。

しかし街の中に入った心達はその光景を見て啞然とすることになる・  
・  
・  
・  
・

## 第七記 セルドア

「これは……」

「おいおいこれが街か？」

「……」

第10軍団の目に入ってきたのはセルドアの街の変わり果てた姿だった。

土地は荒れ、店は一つも出ていない。街を歩いている人々は全員が疲れ果てた顔をして道に座っていた。

「こりゃ完全に捨てられた村じゃねえか。」

「そんなハズは……私が来た時は活気のある街だったのに……」  
しかし、今現実に見ているセルドアの街にはロイの話に出てきた活気のある街の様子など一欠けらも感じられなかった。

「とりあえず街の人に事情聞いたほうがいいんじゃない？」

バーンの後ろにいた槍兵隊ナイツ、リリヌが心に意見を出す。

「そうだな。すみませんちょっといいですか？」

「えっ？あ、はい何でしょう……？」

心は近くを歩いている女性を引きとめて話しかける。

「自分達はヴァルミア軍の者なんだが・・・この街で何が起きたんだ？よければ話を聞かせてほしい。」

「ヴァルミア軍の方ですか!？」

女性は心達がヴァルミア軍だと分かると目を輝かせて迫ってきた。

「うおっ!？そうですが・・・」

「みんなやつと助けが来ましたよ!これで街は救われます!!」

女性が周りに呼びかけると街の人々が次々と集まってきた。

「ヴァルミア軍が来たって!？」

「今まで何度助けを求めても来てくれなかったのに・・・」

「じゃあオレ達はもう貧しい生活をしなくて住むのか!？」

心達がいる場所が騒がしくなり始める。

「あ・あの・・・オレ達は反乱軍の討伐の途中でこの街に立ち寄りただけなんだが・・・」

状況が読めない心は狼狽しながら声を出した。

「えっ・・・?」

心の言葉を聞いた女性は顔を一瞬硬直させるとすぐその表情は落胆、そして悲しみの顔になった。

それは周りの人々も同じだった。心の言葉を聞いたある者は目を見開いたまま地べたに座り込み、またあるものは涙を流しながら地面に膝をついた。

「助けじゃなかった・・・」

「もうこの街も終わりだ・・・」

街の人は皆が絶望を浮かべ、ふらふらとした足取りで場を去ろうとする。

「待ってください！この人達なら助けて下さるかも・・・」

「うるさい！貴族がオレ達を助けてくれるワケないだろ！？」

「オレ達は国から捨てられたんだ！もうお終いなんだよ！！」

「大体ダメエ無駄な期待をさせやがって！！」

引き止める女性に群衆は罵声を浴びせる。その群衆の雰囲気は今にも女性に暴行を加えそうな勢いだった。

「ちよい待ちーや。」

それを一つの声が呼び止める。

「大の男が大勢で綺麗な女性一人を責めるなんてちよいとアカンのちやうん？」

声は軽いがヘテロの目は笑っていない。

「な・なんだよ・・・お前に何が分かるんだよ！！」

群衆の中から一人の男がへテロに言い返す。

「んなもん何も聞いてないのに分かるか。」

「なら聞いたら助けしてくれるのかよ!？」

「そつや。」

「なっ!?!?・・・」

男の言葉が驚きで止まった。

「おい!?!?何を勝手に・・・」

ロイはへテロを止めようとするがそれを心が手で制す。

「困っている人を見過ごすわけにはいかないからな。」

「心將軍おおきに。」

心は黙ったまま笑顔でへテロに返事を返した。

「本当ですか!?!?ありがとうございます!」

「礼ならへテロに言ってくれ。最初に助けると言ったのはへテロだからな。」

「へテロ様、ありがとうございます!?!」

「いやワイはただ女性が怒鳴られてるのが許せんかっただけで大した事はしてないがな……」

女性がお礼の言葉を言うとヘテロは照れ隠しに頬をポリポリと掻きながら後ろを向いた。

「あつ、ヘテロが照れてる！？可愛い〜！！」

「お前にも青春が来たか？」

リリヌとバーンがそれを見てヘテロを茶化した。

「リリヌ、うるさいわ！バーンさんもからかわないで下さいッス！？」

「それより話を聞かせてもらえるか？え〜と……」

騒いでいるヘテロ達を無視して心は女性に話を聞いた。ヘテロ達を見て笑っていた女性もそれに応じた。

「フッフツ……あ、すいません名前も言わずに……私の名前はサラ・マシリと言います。実は……」

その女性、サラから話を聞くと数年前、突然森からスカル・ホーネットと呼ばれる武装した野盗の集団が現れて食料と金目のモノを差し出せと言ってきたらしい。もちろんそれに応じる街の人達では無く、街の自警団が野盗を追い返そうと交戦状態に入った。

最初は自警団側がスカル・ホーネット側を圧倒的に押ししていたのだ

がそのスカル・ホーネットの頭を名乗った男が現れてから状況が一変し、自警団側が壊滅状態になったというのだ。

「自警団側が押していたのに壊滅した？その男はそんなに強いやつなのか？」

「はい。その男は懐から笛を取り出して吹いたんです。そしたらいきなり自警団の皆がバタバタ倒れだして・・・」

サラはその次の言葉を言わず、拳を握り締めて俯き、口を閉ざした。その拳が微かに震えている。

「辛いなら言わんくてもエエんやで？」

騒ぎ終えたヘテロが女性に気遣いの言葉をかけるがサラは涙目になった顔を上げて首を横に振る。

「いえ、言わせてください。その後、自警団の皆は口から泡を吹いて死んでいきました。そして残された私たちもその野盗に食料やお金を差し出ざるをえなくなっただんです・・・」

サラの話が終わると周りですすり泣く声や顔を腕で覆っている人の姿が見られた。よく見ると街の人のほとんどは女性や子供、それに年寄りだった。

「これはさすがに放っておけないな。ロイ、緊急作戦会議をするぞ。ナイツ全員を集める。」

「心將軍、すでに集まっています。」



「……………」

そのまま両方とも沈黙を保ったまま星を眺める。

「……………ありがとうございます。」

先に沈黙を破ったのはサラだった。サラはへテロに向かってふかぶかと礼をする。

「そんな礼を言われるような事はしてないわ。」

「いいえ。へテロさんがあの時庇ってくれなかったら私は挫けてました。だからありがとうございます。」

「……………別に庇ったわけじゃないがな。ただアイツと似てただけや。」

そう言ったへテロの顔はサラにはすごく辛そうに見えた。

「よろしければ何があったか話してくれませんか？」

この人の事がもっと知りたい…………サラは何故かそう思ってへテロに聞いてみた。

「ワイの過去なんか知ってもなんもおもしろいことなんかないで？」

「それでも聞きたいです。」

へテロはハアツ…………とため息を吐くと小さな声で語り始めた。

「ワイが生まれた関西って村はここよりかなり遠い西の端にあつてな？貧しかったけどオカンやオトン、それに妹と楽しく暮らしてたんや。けどある時ダークサーペントとか名乗る野盗集団に村が襲われた。ワイは森に遊びに行つてたから助かつたんやけど帰つてきたら村が燃えてて家には家族みんなが血まみれになつて死んでた。それからオレは村を出て街で兵士になつたんや。」

おもろなかつたやろ？とヘテロは最後に言つてまた星に視線を戻す。

「妹さんは何才だつたんですか？」

「まだ7才になるかならんか位やつたわ。まだ未来があつたのになあ……」

「兵士になつたのは復讐の為に？」

「……そうや。ワイは必ずアイツを殺す。ワイの家族を殺したあの赤い髪のヤツを……」

その時だけ、ヘテロの目には狂気が宿っていた。

「ヘテロさん。」

サラはヘテロの前に回り、そつと抱きしめた。その目には涙が止めどなく流れている。

「辛い時は泣いた方がいいんですよ。せめて私のそばでは弱いところを見せてください。」

「サラさん……」

その言葉を聞いたヘテロはサラを抱きしめ返した。その目に涙を浮かべながら・・・

その夜、ヘテロとサラは第10軍団の兵士が見つけるまでずっと抱きしめあっていた。

## 第八記 森の中の助者

心達がセルドアの街に着いてから一日が過ぎた。街にはロイとネウロだけが暇を持って余しながら残っていた。

「心將軍は大丈夫ですかねえ。」

「大丈夫。心配無い。」

「でもたつたら5人ですよ？いくらナイト達を連れて行ったとしても相手の力も分かっていないのに・・・」

「桐生將軍は強い。その辺のヤツラには負けない。だがその野盗の頭、気になる。」

ロイとネウロは野盗討伐をしに森の中へ入っていった心達の話をしてきた。ネウロはロイに敬語で話していないがバーンの影響で慣れてしまったロイはあまり気にせず話を進めている。そして次第に話は野盗の頭について変わっていく。

「笛を吹いたら自警団の皆が泡を吹いて死んだ。一体自警団の方に何が起きたんでしょうか？」

「・・・・・・・・・・」

ネウロはロイの話を無視して難しい顔をしていた。

「やっぱり心配って・・・どうしたんですか？」

「……いや何でもない。敵が来ていないか少し偵察に行ってくる。」

ロイの声に意識を戻したネウロはそう言ってその場を離れた。

「……まさかな。」

小さくそう呟いて……

その頃、野盗討伐に向かった心達は思わぬ相手に苦戦を強いられていた。

「あゝ何でこんな目に合うんだよ！」

「お前がイライラして木を蹴ったからだろ!？」

「キースのバカ〜!!」

「ワイらは何もしてないっつーねん!？」

「いいから足を動かせ。」

心・バーン・リリヌ・キース・ヘテロの5人は森の中を追いかけくる敵から必死で逃げていた。

その敵とは……

ブ~~~~~ン!!!!!!!!!!!!

蜂だった。その数は500、いや1000匹はいるかもしれない。

「大体この森は蜂が多すぎなんだよお!!」

当たり前だが大声で叫ぶキースの声にも蜂は耳を貸さない。

こうなった経緯を説明するとセルドアの街の人達から野盗のアジトが森にあると聞いて森に入ったのはいいのだがアジトが中々見つからずイライラしたキースが近くの木を蹴った事が全ての始まりである。

キースの蹴った木から小さくて茶色い塊が落ちてきたかと思うとそこから蜂がたくさん出てきて追いかけてきたのだ。

最初は50匹ほどだったのだが逃げてる内に他の木からも蜂が出てきてあっという間に蜂の軍団が出来上がってしまった。しかもその追いかけるスピードが半端じゃなく早い。少しずつ心達と蜂との距離は縮まっっていく。

「とりあえずこの状況どうしようか?」

「そんな悠長なこと言ってる場合じゃないですよ!」?

「追いついてきたでえ!」

へテロの言葉で後ろを見ると蜂はもう心の目と鼻の先まで迫っている。

「近くの木に隠れて下さい。」

「煙!？」

いよいよ蜂に追いつかれるという所で声が聞こえ、いきなり心の視界は黒い煙幕で一杯になった。たまらず心は横に転がる。

「な・なんだコレ!？」

「真っ暗で何も見えないじゃない!？」

「アカン、目が染みるわ!」

どうやらほかのメンバーも同じのようだ。しかし何でいきなり煙なんか・・・しかもあの声の主は誰なんだ？

心は口を手で塞ぎながら考える。煙も段々と晴れてきていた。そして煙が完全に晴れると一人の青年が心の目の前に立っていた。その青年の姿に思わず心の思考が止まる。

スラリとした体形にあまり筋肉のついていなさそうなボディ。顔は幼いながらも整っていてどこかの皇子ではないかと疑わせる位気品がある。しかし心が最も目を引いたのはその髪の色だった。

それは黄金。青年の髪の色は見事なぐらいの金色だった。それがこのうす暗い森の中でも木々の間から差し込む少しの日の光でも眩しく輝いていた。

「ケガは無いですか？」

青年が心に声をかけると心の頭は正常に戻る。

「ありがとう、助かった」「テムエいきなり何しやがる!」「」

心がお礼を言おうとすると、ようやく視界が回復したキースが青年に詰め寄る。

「何しやがるとは?」

「ふざけんな!いきなり煙を焚きやがって一体どういう了見だ!」

「僕は君たちを助けただけですよ?」

「嘘つけ!」

「本当ですよ。現に蜂がいなくなっているでしょう?」

青年がそう言ってキースの後ろを指で指す。後ろを見るとさっきまで心達を追いかけていた蜂の大群は影も形も無くなっていた。

「それに僕が通ったからよかったものものもしあの蜂達に追いつかれていたら即死ですよ?あの蜂は1匹でも人を殺せるような猛毒を持った蜂なんですから。」

青年の言葉にキースの顔が青くなる。それは心も一緒だった。蜂に刺されて殺されるなんて冗談でもたまったものではない。

「わ・悪かったよ。怒鳴ったりして・・・」

キースが青年に謝る。自分の非を素直に認めるのはキースのいい所だ。

「別に気にしてませんよ。それより貴方達は見たところ軍の方の様ですが何故こんな物騒な森に？」

「ん？ああ、オレ達はセルドアの街から街を襲う野盗を討伐する為に来たんだ。けどその野盗のアジトが分からなくて迷った結果蜂に追われることになったんだ。」

「・・・なるほど。じゃあ僕を連れて行ってくれませんか？」

「えっ？」

青年の疑問に心は答えると青年は少し考えてからそんな事を言い出した。

「だ・ダメに決まってるだろ！？民間人がこんな危険な事に協力するなんて・・・」

「でもこの辺はさっきの猛毒を持った蜂がウヨウヨしてますし夜盗のアジトの場所も知ってます。でもその道は複雑ですから聞いただけではたどりつけません。なら道案内が必要でしょう？それに僕も少しは戦えますから。」

それから青年は袋から細身の長剣を出してキースに見せる。

「うぐっ・・・」

キースが反論するもすぐに青年に言い負かされる。・・・なんといつかりリヌとの会話でもそうだがキースは口喧嘩弱いな。

だが確かにキースの言うことも一理あった。軍人にもプライドと言

うものがある。そのプライドを捨ててまで民間人に協力をお願いする軍人は数少ないだろう。

「よし連れて行こう。」

しかし心はその数少ない將軍の一人だった。

「おい何言ってるんだよ!？」

その言葉に即座に食いつくキース。だがこれは心が考えた結果の答えだ。

「理由はある。オレ達は反乱軍を討伐する為に先を急がなくてはならない。だがアジトの場所は分からないし、オレとしてもまたあの蜂に襲われたくない。お前はまたあの蜂の大群に追いかけられるのか?」

「うっ・・・分かりましたよ。従えばいいんでしょう!」

「へえっ・・・?アンタも少しは物分かり良くなったんだ?」

「うおっ!?!脅かすな!」

いつの間にかリリヌ・バーン・ヘテロがキースの後ろに来ていた。

「お前らはどう思う?」

「私は賛成です。アジトが見つければ何らかの対策も取れるでしょうし。」

「ワイも賛成や。それに早く野盗を壊滅さして森を出たいしな。」

「オレはアンタについていくだけだ。」

三人共、心の提案に賛成の意を示す。

「決定だな。オレは聖ヴァルミア第10軍団の將軍で桐生 心だ。道案内よろしく頼む。」

「私はリリヌよ。よろしくね。」

「ワイはヘテロや。よろしゅう。」

「しゃーねえ・・・キースだ。下手な真似したらぶつ刺すからな！」

「僕の名前はカイ。怒龍どりゅう カイです皆さん短い間ですがよろしくお願ひします。」

皆が紹介する中で一人、バーンだけ紹介をせずに怪訝な顔をしている。それをみてキースが声をかける。

「バーンさん？どうしたんだ？」

「ん？いや何でもなし。バーンだ。よろしく頼む。」

そう言って自己紹介をした。いつものバーンらしくない自己紹介に心は軽く疑うがあまり気にせずにかいへと向き直った。

「では行きましょう。こっちです。」

カイが歩く方向へ心が歩き始めると、その場にいる全員が歩き始める。バーンも歩き始めるのだがその顔はいまだ消えることは無かった……

## 第九記 疑問・・・そして復讐

——ピーー！ピーー！

外は燃えるような暑さの中、木の影で涼しささえ感じる森で鳥が勢い良く鳴いて飛び出す。それに応じて近くの長い草むらが動き始めた。

ザザザザッ！

「すごい草むらだな。本当にこんな所にあるのか？」

その草むらから長いスピアを持ったキースが出てくる。

「はい。もうすぐ着くはずですよ。」

「アンタはもうちょっと我慢というものを覚えなさい！」

「イテッ！分かったから殴るな！？」

「悪いな。騒がしくて。」

「楽しいので構いませんよ。」

心達はそんな日常会話をしながら森の中を進んでいく。それはこれから戦いに行くという雰囲気では無く、さながらピクニックにでも行っているかのような雰囲気だった。

「それより怒龍・・・さん。その野盗の頭について何か情報はない

か？」

心は新たに加わった仲間、怒龍カイに情報を求める。

「カイでいいですよ。そうですね・・・詳しい事は分かりませんがその頭が持っていたという笛が怪しいんじゃないでしょうか？」

「オレもそう思っている。だがそれだけではまだ断定できない。」

「はい。その笛が本当に原因なのかあるいは何かを隠すカモフラージュの可能性もあります。」

心はカイのその言葉を聞いて驚いた。普通に話を聞けば笛が怪しい事は誰でも分かるがその笛さえもカモフラージュかもしれないというのには簡単に思いつくものではない。心でもこれを思いつくのに少し掛かったのだ。それを話を聞いた途端に思いつくということはこのカイという男、頭は相当回るらしい。

「でもだいじょう・・・!？」

カイは途中で会話をやめ、歩みを止める。

「どうかしたのか？」

「誰か来ます。隠れましょう。」

「お・おい!？」

カイはいきなりそう言い放つと近くの草むらに隠れた。慌てて心達も各々に散らばって隠れる。

心が隠れてすぐに目に映ったのは皮鎧とショートソードで武装した二人の野盗だった。何か話している様で声が聞こえてくる。

「おい、本当にヴァルミアの奴等がこんな所に来るのか？」

「ああ、軍の輸送部隊襲って食料奪ったんだ。間違いねえだろ。それにお頭も言ってたじゃねえか。ヴァルミアのクズ共はプライドだけは無駄にあるから必ず討伐に来るってよ！」

「そうか・・・やっとあいつらに復讐できるんだな。」

「オレ達の故郷を滅ぼしたあいつらをぶっ殺してやるうぜ！」

その言葉にもう一人の野盗が頷く。

「復讐？滅ぼした？」

野盗達を通り過ぎるのを待ちながら心は先ほど出てきた言葉の事を考えていた。

だがその言葉も心の目に映った次の光景に吹き飛ばされた。

「キースの奴何をしてるんだ!？」

なんと野盗二人の後ろからキースがソロソロと着いていつているのだ。横にいるカイも驚きの表情でそれを見ている。多分、他の所に隠れてそれを見ているバーン達もそして今隠れているカイもこう思っているだろう・・・

「「「あのバカッ!?!?!」」」

「んっ?・・・な・何だお前は!?!」

とうとう野盗の一人が後ろにいるキースに気がついてしまった。

「ちっ、見つかったか!?!」

キースは素早くスピアを捨てて腰にさしていた剣を抜き放つと野盗の一人に向かって切りかかった。

「うおっ!?!」

ギンッ!

金属と金属とがぶつかり合う音が響く。キースの剣は野盗のショートソードにギリギリ受け止められていた。そのまま二人は己の武器を押し合いあつ。

「クッ!」

「てめえヴァルミニアのやろう共だな!?!死ねえ!」

野盗のもう一人の仲間がキースに向かってショートソードを振り上げる。

「オレを舐めるなよ!」

キースは剣を押し合っていた野盗を蹴飛ばすと素早く距離を取ってそれを避けた。

「一人で来るなんてバカな奴だな。」

「残念。一人じゃねえよ。」

「なっ・・・グフツ!？」

野盗の後ろから現れたバーンが野盗に鳩尾を食らわした。それを受けた野盗は一撃で意識を昏倒させる。

「クソツまだいたのか!」

さすがに二対一は無理と判断したのか野盗はそのまま逃走を図る。

「逃がさへんでえ。」

「観念しなさい。」

しかしその前をリリヌとヘテロが塞ぐ。

「全く。焦らせてくれますよ。」

そして横からカイと心が現れた。

「もう逃げ場は無い。おとなしくしろ。」

最後に心がそう宣言をする。野盗は三方から囲まれる形となった。

「グツ・・・畜生・・・」

野盗は少しの間、屈辱の為か震えるとフツとおとなしくなった。

心はそれを諦めたものと思い、捕縛しようと縄を出して近づいていく。だがそこで気を抜いたのがまずかった。

「ウオオオオオオ!!!」

「!?!」

それは一瞬だった。

野盗はいきなり大声で叫ぶと一直線に走り出した。その手にはショートソードが突き刺すように掲げられている。その勢いはまるで何かにとり憑かれたかのようにだった。

野盗の走る先には……

「カイさん危ない!」

リリヌの叫びが森の中で木霊する。そう……野盗の走る先にはカイがいたのだ。

「避ける!」

心もカイに向かって叫んだ。しかしカイはそんな危機的状況にも関わらず表情は変わっていなかった。

「やれやれ……」

カイは一度ため息を吐くと剣を抜かずにその前の抜き身の姿勢で止



「あなたに言いたいことはかなりありますが・・・少し騒ぎすぎた  
ようです。」

「えっ?」

周りの空気が一気に重くなる。心達は反射的に集まって背中を向かい合わせた。

「どうやらアジトに行く前に向こうから来てくれたみたいですよ?」

「そうみたいだな。」

「オレ達の森でよくも好き勝手してくれたな。」

どこからか声が聞こえたかと思うと目の前の草むらが激しく動いた。

そしてその重い空気の持ち主がようやく姿を現した。

## 第十記 偽りと逆転

「よくもオレ達の森で好き勝手してくれたな。」

草むらからは背中に巨大な斧を背負ったひげ面の男が出てきた。

「お前がスカルホーネットの頭か？」

「そうだ。それよりテムエヴァルミア軍の奴らだな？」

「そうだとしたら？」

「ここに見回りに来させていたオレの部下はどうした？」

「殺した。」

心ははつきりと告げる。そこで一気に心と頭との緊張が高まった。後ろのバーン達もいつ戦闘が起きてもいいように武器を構えている。

「そうか、殺した……か。」

「それより降参しろ。お前一人では勝ち目は無い。」

「……一人ね……じゃこれならどうか？お前ら、殺れ!!」

頭の声と共に草むらや木の陰から野盗が何人も現れて心達に襲い掛かった。

「將軍!？」

「やっぱり素直に降参してくれないか。いくぞ！」

「おう！」

そして心達とスカルホーネットの戦闘が始まった。

心はざつと周りを見渡す。野盗達の人数は約二十人といった所か。バーン達もすでに野盗達相手に戦闘に入っている。

「どこ見てやがる！」

心に野盗がショートソードを振り上げて襲い掛かるが心はそれを軽くかわすと野盗を一刀のもとに切り捨てる。

「やるうっ！」

倒された仲間をみて違う野盗が切りかかるが一回だけ刃を交わすと二回目には素早く切り倒した。

いくら武装しているといっても所詮は一般人。訓練された兵士、それも將軍や隊長級を相手に勝てるハズもなく野盗達はなすすべもなく倒されていく。

気がつけば野盗達はもう残り十人程になっていた。その残り十人程もすでに逃げ腰になっている。

「騒ぐんじゃねえ！！！」

その時スカルホーネットの頭が雷が落ちてきたような大きな声で怒

鳴った。その声で戦っている心達と野盗は共に動きが止まる。

「テメエら何押されてやがる。こいつらがオレ達になにをしたのか忘れたのか!」

頭の怒鳴り声を聞いた野盗達の目に光が宿る。心はその目を見て思わず身震いをした。

「こいつら・・・」

その目に宿っているのは狂気。そして怨みや自分達に対する強い憎しみが現れていたからだ。

そうだこいつらは・・・オレ達の故郷を・・・

野盗達は口々に小さく呟くと次々と心達に襲い掛かってきた。

心は襲い掛かってきた一人の野盗と剣を交わす。

ガギンッ!

「何だと!?!」

心と野盗が剣を交わした瞬間心の腕に今まで感じなかった強烈な負荷がかかる。さらに・・・

「押されている!?!」

心の剣が野盗の剣に段々と押されていつているのだ。これは不味いと心は野盗を振り払って一時距離をとる。そして周りを見回すと信

じられない出来事が起きていた。

「みんな押されている!？」

ほかの野盗と剣を交えていた全員が押されていたのだ。あのバーンでさえ野盗二人を相手に苦戦を強いられている。

さっきも言った通りいくら落ちこぼれを集めた軍隊だといつても一応は兵士なのだ。それも皆兵士を指揮する隊長級ばかり、なのに押されている。

それほど野盗達の殺気と迫力は凄まじかった。唯一、優勢を保っているのは頭を相手にしているカイだったがそれでも気を抜くとあの大きな斧でバツサリやられてしまいそんな感じがある。

さらに悪い事というのはつくづく続くものだ。

ブウウ~~~~ン!!

「何だこの音？」

「こんな時に・・・」

野盗と闘いを繰り広げていた心は最初にその音を聞いて一度相手と距離を取ってから周りを見渡し、次に反応したりリリ又はその音の正体が分かっているのか苦虫を噛み潰したような顔になる。

音はどんどん大きくなって心達に近づいてくる。心はその音の正体をようやく目で捉えることができた。そしてその目で捉えた見たことがあるものを自分の記憶と照らし合わせると少し前に出会った今

一番会いたくないモノと一致する。

まさか・・・

「最悪だな。」

バーンが小さく声を漏らす。森の奥から心達を襲撃したあの毒蜂の大群が押し寄せてきていたのだ。しかも数は襲撃した数の倍はいた。その毒蜂の大群が背中に付いている大きな羽を震わせて心がいる場所に一直線に向かってきていた。

「こりゃアカン、將軍いつぺん退散しよや。！？」

「うらあ！！」

戦闘を続けていたヘテロが毒蜂をみて心にそう言うってから野盗との距離を離そうとすると野盗は逆にヘテロとの距離を縮めて短剣を振り払ってきた。毒蜂がこちらに迫っていて自分も襲われるかもしれないのに、だ。

「何してんねんあのデカ蜂が見えへんのか。はよ逃げな前も襲われるかもしれんのやぞ！」

「それは無いわね。」

ヘテロの言葉を目の前の野盗ではなく別の声が答えた。その声は風のように漉き取った美しい声だった。

「そう。」

不意に頭と戦闘を行っていたカイがキースが放り投げてそのままになつていたスピアを拾ってバインが昏倒させて倒れていた野盗に向かつて投げた。しかし昏倒していたハズの野盗は素早く立ち上がるゝと軽やかなバックステップでそれを避けた。

「昏倒してた人にいきなりスピア投げつけるなんてひどい人ね。」

「昏倒してた振りのくせに何を言ってるんですか。それよりあなたがスカルホーネットの頭ですね?」

その野盗は少し考える素振りを見るといきなり自分の顔の皮を剥いだ。そのグロテスクな光景に思わず心は目を背ける。しばらく皮を剥いだ野盗は最後に頭にしていたバンドナのようなものを取るとまるで夜を思わせるようなきれいな髪が背中を伝って姿を現した。

あつという間にその野盗は普通の男からきれいな女性に様変わりした。

「そうよ。私がスカルホーネットの頭、蛇骨 灰蜂」だこつ はいは「よ。」

「んじゃあこいつは何なんだよ!??」

キースはさつきまで頭を名乗っていた大男を指差す。心が男と会つた時、確かに頭を名乗っていた。なぜ偽る必要性があつたのか?

「その男は私の代わりよ。まさか女が野盗を率いているとは思わないでしょ?」

「なるほどな。」

カイが納得したように頷く。心もなんとなく分かった。恐らく頭を大男だと偽ったのは顔を見せると笛を吹きにくいいため、さらに今まで出なかったのは自分達のほかにまだ仲間がいないか確かめる為だったのだろう。

おそらくサラが言っていた大男が持っていた笛は偽者で本物の頭は隠れた所で毒蜂と一緒に隠れて大男が笛を吹くと同時に後ろから毒蜂に自警団を襲わせたのだ。

「あの時は村娘になって隠れてたの。まさか自警団も村の娘に頭がいるとは思わないでしょうしね。」

そう言つて灰蜂はクスクスツと笑う。その妖絶な笑みに心は少し足らず恐怖を覚えた。

「そんな事を自分からバラしていいのですか？」

「構わないわ。どうせあなた達はここで死ぬのだから。」

灰蜂はそこで足の袖から8センチくらいの小さな長笛を取り出した。さらにそれを口に当てて吹くと毒蜂が一斉に灰蜂の後ろに集まった。

「うわゝ気持ち悪いわね。何とかしなさいよキース。」

「無茶言つな。あんなのに突っ込んでいったら確実に死ぬだろ!!」

「大丈夫。アンタ早々死なないから。」

「いや簡単に死ぬから!？」

「いい加減にしろ。ちゃんと前を向け。」

キースとリリヌの言い合いをバーンが諫める。その光景を見て危機的状况にも関わらず心の心に安心が生まれた。

「随分余裕じゃない。この光景を見て気でも狂った？」

「いや狂ってはいないな。むしろ今でも恐怖を感じているよ。」

心の言葉は本当だった。灰蜂が笛を一吹きすれば灰蜂の後ろにいる大勢の毒蜂が心達に群がって一瞬で刺されて殺されるだろう。蜂の羽音がさらに心の恐怖心を掻き立てる。

「諦めかい？そんな男はすぐ飽きられるよ。」

「頭、さっさと殺っちまいますよっぜ。」

さっきまで頭を名乗っていた男が灰蜂を急かす。

「まあ待ちなよ。そんな簡単に復讐を終わらせたらつまらないじゃないか。私達の恨みをもっと味あわせてやんなきゃ。」

その言葉に心は疑問を持った。さっきから復讐やら怨みやらこいつらにいったい何があったんだ？

「お前らいったい何があったんだ？見れば相当オレ達に恨みを持っているよっだが・・・」

「お前らに話す義理は無い。」

心がその話を切り出した瞬間に一気に野盗達から殺意が湧き出した。

「気が変わった。あんた等今すぐ私があのだに送ってやる。」

どうやらこの話はタブーだったらしい。今にも灰蜂は笛を持って吹きそうになっている。だがこちらも準備は整った。

「苦しみながら死にな！」

灰蜂は笛を思い切り吹く。しかしその途端に心達の目の前が黒い煙で覆われた。心の視界が黒く染まっていく。心はその煙が舞った一瞬の隙をついて灰蜂に体当たりを食らわせた。灰蜂はその勢いで後ろの木に叩きつけられ、その手から笛が転がる。

「ぐっ!?!」

「よし、全員捕らえる！」

「しゃあっ、やっと動けるぜ。」

「今までの恨みを返してやりましょ。」

「久しぶりに暴れるか！」

心の掛け声に今まで動かなかったキース達が煙が晴れたのを気に一斉に野盗達を叩き伏せにかかる。

「ぐあっ!」

「がふっ!」

「ぎゃっ！」

野盗達はさつき戦ったのを見た限りでは闘いの練度はそこまで高くない。事実、野盗達は抵抗する間も無くバーンやキースに気絶させられていった。毒蜂も煙のおかげでどこかに逃げたようだ。

「ばかな・・・いつの間に煙なんかを・・・」

木に叩きつけられた灰蜂が立ち上がるがその足取りはすでにフラフラでおぼつかなくなっていた。

「それはアレだよ。」

心が横の草むらを指差す。灰蜂がその指を追うとカイがスピアを持って手を振っていた。そのスピアから黒い煙が吹き出ている。

「なんだあれは・・・」

「簡単に言つとだな。発炎筒みたいなものだな。」

「発炎筒？」

「そうだ。スピアの先に石と草を巻きつけて木に投げてその木とスピアが当たった摩擦で火を起こす。まあ火薬がないせいで火を点けるのに時間がかかったがな。」

「・・・私達の負けね。」

灰蜂が降参しようとした時、心の前を戦斧が掠める。そして心と灰蜂の前に頭の代わりをしていたあの男が滑り込んできた。

「オレ達はまだ負けてねえ。負けられねえんだ!!」

大男は心に向かつて斧を振り回す。心はそれをギリギリの所でかわしていた。

「やめなさいベン。私達は負けたの。もう余計な犠牲者を増やす必要はないわ。」

「・・・ちくしょう・・・ちくしょう・・・」

ベンと呼ばれた大男は灰蜂の声を聞いて涙を流しながら崩れ落ちた。手に持っていた斧が鈍い音を立てて地面に落ちる。

「・・・とりあえずお前らの身柄は拘束させてもらう。処分は街に帰ってからだ。」

「好きにしな。敗者に選択権は無いさ。」

「將軍、野盗の身柄を全員拘束しました。」

「そうか、ありがとう。じゃ街に帰るか。」

「やっと街に帰れるぜ!!」

その頃、セルドアの街の郊外ではヘテロが街の周りの偵察に来ていた。

「まずいな。」

丘に登って辺りを見ていたヘテロが呟く。彼の見ている先には緑が素晴らしい草原が広がっている。

「まずいな。」

ヘテロはもう一度呟いた。この何も無い平和な草原でいったい何がマズイのか？

「とりあえず報告しなければ。」

ヘテロが丘から姿を消す。彼の瞳は捉えていた。何も無いさわやかな草原、その奥に何か黒い塊が近づいてくるのを……。そしてそれが……

何万もの反乱軍の人だったことを……

## 第十一記 罪と不安

「早く隊列を整えろ！」

「斥候を出してもう一度敵の場所と数を確認しろ！」

「オレの武器はどこだ!？」

心達一行が帰ると、街の中は大騒ぎとなっていた。街のどこをみても第10軍団の兵士達が武器を持って戦闘準備をしている。

「歩兵部隊は門の外で待機しておけ。」

その時、心は近くで部隊に支持を出しているロイを発見した。

「おいロイ、これはどういうことだ。何で部隊が戦闘準備をしている?」

「あ、心將軍。戻ってきたんですね。よかった……野盗の件は解決したんですか?」

「とりあえず解決したよ。それより何で戦闘準備をしているんだ?」

心の姿をみて心底安心した様子のロイを見て心はもう一度同じ質問をロイにした。

「はい……実は反乱軍の大部隊がこの街に向かって進軍していることが斥候の報告で分かったんです。」

「何だと、それで数は?」

「斥候にでていたネウロの報告によると数はおよそ二万、兵種は主に歩兵隊と弓隊、槍隊で構成され、騎馬隊は少ないですが後方に配置されているようです。」

「二万だと！反乱軍はそこまで勢力を拡大しているのか！？」

「二万といえばヴァルミアの一軍団とまともにやり合える数だぞ！」

「はい。ネウロの見た感じでは兵のほとんどが皮鎧に長剣と軽装備なのでおそらく民兵かと思えます。」

民兵か・・・

「將軍。これは戦争です。」

「分かっている。」

ロイは考えが顔に出ていたのか心の顔を見て辛そうに言った。これは戦争だ。殺らなければこっちが殺られる。そう頭の中では思っている。でも何の罪もない民を殺すことに心の心は罪悪感でいっぱいになった。

「伝令！」

心が自分の役割と心との間で葛藤していると前から伝令役の兵士が走ってきた。

「何だ。」

「ハッ、偵察隊からの報告で敵は街のもう100キロ地点までです」

に迫ってるということです。」

「時間がありませんね。将軍、指示をお願いします。」

「分かった、全軍戦闘準備が終わり次第敵を迎え撃つぞ！」

心の声で周りの兵士が一齐に雄たけびを上げる。民兵の事は後でゆつくり考えよう。今はこの危機を乗り越える事が先だ。そう思い直して心は闘いの事を考え始めた。

その頃、バーンとヘテロは灰蜂達を街に監禁する為にサラの家に来ていた。何故サラの家なのかと言うと単純にそこしか知らなかったからだ。そこでバーンと灰蜂が話していた。

「あの妙な喋り方の男は一緒じゃないのかい？」

「ヘテロは今頃彼女とイチヤイチヤしてるだろうよ。」

「そうなの。で、私達の処罰はもう出たの？」

「まだだが多分・・・アンタ達は軽い罪で済むと思っせ。」

「そりゃ無いさ。私達は人を殺してる。その事は変わらない。」

「あの将軍さんは甘いからな。」

バーンが苦笑しながら灰蜂に言う。その顔を見て笑えば中々のイケ面だと灰蜂は思った。

「そんな将軍はこの世の中生き残れないよ。」

「わあつてるよ。だがオレは軍人だ。上の命令には従う。それに・  
・あんな將軍は嫌いじゃねえ。」

「まあ確かに変わった將軍ではあるね。」

「だろう?」

「それよりあなた私と話していいの? 仮にも私、罪人よ?」

「別に構わねえだろ。逃げるわけじゃあるまいし。だがひとつ聞か  
せてくれ。お前は何であんなに軍を怨んでんだ? 何があった?」

「・・・ごめんなさい。それは言いたくないわ。」

バーンが質問をすると床に顔を向けてそう言った。その表情には明  
らかな悲しみが写っていた。

「まあ言いたくないなら無理に聞かねえよ。」

「フフツ…あなたも十分変わってるわね。」

「そうか? なら変わってしまった原因は間違いなくあの將軍さんだ  
ろうな。」

「人のせいにしたらモテないわよ。」

「いいんだよ。オレは一人の方が合ってる。」

その時、外から部隊のナイトを召集する声が聞こえた。その声を聞

いてバーンが家のドアへと歩き出す。

「じゃ、オレは行ってくるわ。」

「死んだらダメよ。話し相手がいなくなるから。」

「努力はしとく。後、話し相手くらい自分で探せ。じゃな。」

バーンは後ろ向きそのまま手を振りながらサラの家を出て行った。灰蜂はバーンの出て行ったドアを静かに見つめる。

「死ぬんじゃないよ……。」

「あの〜頭、非常に言いにくいんですが…オレ達のこと忘れてません?」

「ぎゃっ!?!?」

灰蜂がそう呟くとベンとその手下達が居心地悪そうに灰蜂を見ていた。思わず灰蜂は女の子のような可愛らしい悲鳴を上げてしまう。というかいたのね……。

「しかしお頭がそんなこと言うなんてあいつに惚れへブツ!?!?」

「ベン、あなた相当死にたいみたいね。」

「お頭ちよっブツ、落ち着いゲブツ! 蹴るのを止めてくださいえ!?!?」

「お仕置きが必要ね。」

「いりま・・・ぎやぁー！？！？」

ベンがお仕置きされている間、心はバーンやリリヌら他の主要メンバーに作戦の説明をしていた。

「いいか、敵はかなりの大軍だ。だがオレ達にも勝機がある。今回の作戦は統率力とタイミングが重要だ。全員気を抜くな。」

「。。。おお！」「」

説明が終わってから心がその場にいる皆に激を飛ばすと全員がそれに答える。それを機にロイヤバーンなど次々と自分の部隊の準備の為に出て行った。

「ふっっ」

最後の一人が出て行ってから心はグツタリと近くの箱に腰を下ろした。二万か・・・本当に勝てるのか？

心は作戦を啓示したもののこれが成功するか不安だった。なぜなら今の第10軍団の数は約8000、普通の軍団はもっと多いのだが軍のはみ出し者が集まったこの軍団は他の軍団より兵力が少ないのだ。さらにいえば敵の兵力は民兵とはいえその数は二万、兵力差は実に二倍以上ある。こんな差を見せ付けられれば誰だって不安になる。

「何を悩んでいるんですか？」

「！？？」

心が横を見るといつのまにかカイが座っていた。脅かすなよ・・・

「別に悩んでいませんよ。」

「嘘ですね。」

心の言葉にカイは即座にオレの嘘を見抜いた。この人本当に何者だ？カイは言葉を続ける。

「一応アドバイスしますがね。あなたは甘い。」

「甘い？オレがか？」

「はい。あなたに負けはないんです。負けたらあなたの後ろにあるセルドアの街の皆さんはどうなるのです？」

「あっ・・・」

「恐らく反乱軍はこの街を襲撃するでしょう。そしてさらに死傷者ができます。野盗を討伐して街の人たちを助けた意味は無くなるでしょうね。」

「だが反乱軍なら街の人達を助けて、それが甘いと言ってるんですよ。」

心の反論をカイはピシヤリと跳ね付ける。

「人は自分の事しか考えません。反乱軍が街に入れば民兵は盗賊まがいのことをして街は地獄絵図になるでしょうね。」

人は自分の事しか考えない。それは心自身がよく分かっていた。

「まああなたが負けても僕は逃げるだけです。ではご健闘を祈ります。」

そうしてカイはどこかへ去っていった。一人残される心。だがその顔はさっきの不安そうな顔とは一変し、真剣になっていた。負けられない。街の人たちの為に・・・

心は軍の指揮をする為に軍団の方へと駆けて行く。街の人たちの命を掛けた闘いが今、幕を開けようとしていた。

## 第十二記 それぞれの結束

セルドアの街の周りを広がる広大な草原。その草原の後ろを大きな山がまるで見下ろすかのように立っている。その特異な地形のおかげで春にはそこで吹く爽やかな風が来る人の心を静め、冬でも日差しのごとく暖かい風が吹く。

一年中春が続いているその場所を人はスプール草原と呼び、一時は観光名所としても有名だった。その草原に今は二つの勢力が対峙している。

一つはヴァルミア第10軍団、そしてもう一つは反乱軍だった。本来なら和やかな空気が出るはずのその二つの空間は逆に緊迫した空気が漂っていた。

「本当なら街で休憩してるはずだったんだがなあ・・・」

「仕方ありませんよ。終わってからの楽しみということにしましょう。」

ヴァルミア第10軍団の本陣で一人の男がぼやくように言葉を発する。男の顔には落胆の色が見て伺えた。その男を慰めるように男の傍らにいたもう一人の男が言った。

「相手は二万か・・・キツイな。」

「はい・・・ですが勝たなければ我々に未来はありません。」

話している男達、心とロイは暗い話に二人してため息を吐く。

「そろそろくるな。」

「作戦は成功しますかね？」

「不安か？」

「いえ大丈夫です。自分は心將軍を信じていますから。」

信じているか・・・オレにその言葉は重すぎる。オレはそんな事を言われる人間じゃない。

「オレは「將軍、敵が動き出しました!」」

心がロイの言葉を否定しようとする。と伝令役の兵士が心達の前に飛び込んできた。

「では自分は部隊の指揮に回ります。」

「あ、ああ・・・」

ロイは心に軍特有の敬礼をするとさっさと自分の持ち場に向かってしまった。伝令兵もどこかへ行ってしまい、心の周りは一気に寂しくなる。

「オレも戦いに集中しないと。」

そして心も他と同じように軍の指揮をする為、その場を離れていった。持ち場に着くともう戦いは始まっているらしく怒声と金属がぶつかり合う音、そして悲鳴が心の聴覚を支配していた。

数に任せて押し寄せてくる反乱軍をまず迎え撃ったのはバーン率いる歩兵部隊だった。白銀の鎧と長剣を構えて反乱軍の兵士と真正面からぶつかっている。

軍のゴミ扱いされていた第10軍団の兵士といえどやはり民兵よりかは戦いの練度が高く、数が圧倒的に多い反乱軍に正面からぶつかっても何とか前線を維持していた。しかしやはり多勢に無勢で徐々に戦線が後退してゆく。

「將軍、中央左方面が突破されそうです！」

「リリ又槍部隊に左方面を援護させろ。」

「了解しました！」

「ヘテロ隊長に連絡、リリ又の部隊が行くまで弓部隊で左方面の敵を足止めしてくれ。」

「了解！」

心は次々と入ってくる戦報を伝令兵を通して部隊に的確に指示を与えていく。伝令兵に命令した直後、左方面から大量の弓が放たれた。その弓をまともに受けて何十人かの敵が倒れるが後ろからまた新たな敵が仲間の屍を乗り越えてやってくる。

正直に言えば戦況は芳しくない。中央は始終押され気味で槍隊だけでは戦線のカバーが出来ないので今は弓兵さえも長剣を抜かせて前線に援護に行かせなければならぬほどの猛攻を受けている。このまま行けば壊滅も十分にあり得る。

その時心の横から伝令兵が現れて心に耳打ちをする。その瞬間心の目が鷹の目の如く一気に鋭くなった。

「間に合ったか……。よし、中央の歩兵部隊を後退させるようにバーンに言ってくれ。」

いよいよ本格的な作戦の開始だ。ここからが本当の勝負だぞ……。心が本陣で指揮をしているその時間、バーンは戦いの最前線で獅子奮迅の活躍を見せていた。

「おらあ！」

「ぎゃあ!？」

バーンが大剣を一振りすると周りにいた敵の腹が一斉に切り裂かれ、倒れる。いったい何度この短い時間に同じような事があつただろうか？バーンはそう考えながらも体は次の獲物を探す。

今回の作戦はバーンの部隊がどれぐらい持ちこたえられるかによるのだが周りは見るからに敵・敵・敵。すでにここらが限界だとバーンは感じていた。自分の後ろでもこれまで自分に就いていた味方が戦っているがやはり数が違う。すでにバーンの部隊では何人もがその命を散らし、重傷者も数え切れないほど出ている。左方面も一度は突破されかけたぐらいだ。

しかしここで撤退するわけにはいかない。あの変わり者の將軍は逃げてもいいと言ったが自分は軍人だ。しかも一度は落ち零れた軍人

だがあの将軍はチャンスを与えた。腐っていた自分にもう一度這い上げられる人生をくれたのだ。

だから持ちこたえる。自分を捨てなかつたあの将軍の為に・・・

その時、伝令兵がバーンの後ろから声がかかる。その言葉はバーンが待ち望んでいた声だった。

「中央の部隊を後退。」

「野郎共、後退するぞ。」

バーンが叫ぶと部隊が後退する。相手は向こうが逃げると思い、怒涛の前進を仕掛けてくる。だが半分くらいまで攻めた所で敵の前進が不意に止まった。周りの自分の部隊の兵達は困惑していたが前進が止まった理由は伝令兵の報告ですぐに分かった。今まで也を潜めていたキース率いる騎馬隊が反乱軍の左右から一斉に攻撃を仕掛けたのだ。バーンは思わず口の端を持ち上げて笑った。

「掛かった！！」

バーンは思わず心の中でそう叫ぶ。心達が仕掛けた作戦が見事に成功したのだ。反乱軍の民兵達は左右から来る攻撃にほとんどが右往左往していた。つまり心達が立てた作戦はこうだ。

まずバーン率いる歩兵隊が反乱軍の前線部隊と真正面からぶつかる。そして密かに布陣させていたキース率いる騎馬隊を二つに分けて左右に展開させるのだが相手に移動を悟られない為にどうしてもロースピードとなってしまう為、歩兵隊は騎馬隊が展開する限界まで耐える必要がある。(まあ間に合わなければ逃げるとバーンは心に言



言葉を聞いてその甘さに失望し、今までこの人が戦いに勝てたのもただ運が良いだけだと思っていた。

自分は恐らくこの作戦で死ぬだろうと死まで覚悟していた。だが現実はどうだ。二倍以上の数を持つ敵に作戦は完全に成功し敵は逃げ出してさえいる。あの將軍は運だけではなかった。あの將軍がいれば自分は生き残れる。何故だかそんな気がしてならなかった。クレス上級將軍はこれが分かっっていて自分をここによこしたのだろうか？

「さあ最後の仕上げです。皆さん頑張りましょう！」

自分は心將軍に一生付いていく。そう決意してロイは自分に似合わない大きな声で周りを鼓舞して回った。

### 第十三記 勝利そして帰還

これは夢だ。

反乱軍の司令官を務めていたグダンは目の前で起こっている出来事を見てそう自分に言い聞かせた。

街では喧嘩ばかりを繰り返して自警団に街を追われ、成り行きで傭兵になった。自分はそこで金と生き残る為になんでもやった。盗み・殺人・裏切り、反乱軍に入ったのだから膨大な金で雇われたからなのだ。

何回か戦場で生き残った頃、自分は反乱軍の司令官に選ばれた。これでまた金が入るとウキウキしていたものだ。あの口うるさくて自分がする事にいちいち苦言を言っていたナーデルが戦死したと聞いたとき自分の気分は最好調になっていた。

そして付近の街を占拠という命令をつけて進軍し、ヴァルミア軍と対峙した時グダンは楽勝だと思った。何故ならその相手は自分の軍の数の半分以下しかおらず場所も草原で伏兵などもしようがなかったからだ。

グダンは勝利を確信し、自分の兵を突撃させてから自分も騎馬隊を率いて戦場に出る。相手は中々持っていたがしばらくすると中央が退却を始めた。グダンは何も考えずさらに総攻撃の命令を出し、近づく敵を自慢の槍で突き殺しながら自分は後は街に入ってから女と酒を略奪しようと考えていた。だがそこからグダンの考えは変わった。

今、自分の目の前に広まるのは押ししていた筈の自分の兵が逃げ惑っている姿、さらに逆にその兵を追い回している敵の姿だった。あり得ない。なぜ二倍の兵力差を持っていた自分が負けるんだ？どこで道を間違えた？グダンの頭の中はそれでいっぱいだった。

「リーダー、逃げて下さい！」

傷だらけで走りこんできた元傭兵で自分の側近であり副官が声を張り上げる。当たり前だ。こんな敗戦の状況で逃げない方がおかしい。グダンは即座に馬に走らせる。こんな戦場にもう用は無い。

「ちくしょうが・・・」

グダンは反射的に歯軋りをした。20000の軍勢を失ったとあればもう反乱軍には戻れない。戻れば敗戦の責任を取られ、その場で殺されるだろう。そんなのはごめんだ。

「そんな焦ってどこ行くんだよ？」

グダンが必死で馬を走らせていると目の前に大剣を担いだ大柄な男が血まみれのまま自分の方を見て笑っていた。雑兵がオレを笑いやがって・・・

「邪魔だ!!」

槍を前に立っていた雑兵に向けて思いつきり突き出す。へへっ、これでこいつも死ん・・・あ・・・れ・・・？

槍を突き出す瞬間グダンが想像したあの人を突く感触は来ず、逆に鋭い痛みと共に自分の体が馬から転げ落ちていた。

なん・・・

「あの世でオレに会った事を後悔しな。」

大将を討ち取ったぞ！そんな声を最後にグダンの意識は永遠に闇へと消えていった・・・

「バーン歩兵隊長が敵の司令官を討ち取りました！」

「何とか勝ったか・・・」

伝令兵の報告を聞いて心はその場で力が抜けたようにドサツと座った。この作戦は歩兵隊がどれだけ耐え切れるかも重要だが敵の司令官をどれだけ早く見つけて討ち取れるかも重要だった。グズグズしていれば敵が態勢を立て直した時に今度はこちらが包囲される可能性がある。

たかが半日ほどの戦闘だったが心にはかなり長く感じられた。戦場を見るとあちこちで敵と味方の屍が倒れていた。

作戦が成功して被害を最小限に抑えたとはいえやはり二倍の戦力差は大きかったヴァルミア軍と反乱軍双方に多大なる犠牲者が出ただろう。もしかしたら第10軍団の二割・いや三割がやられたかもしれない。当然その分だけ人が死んでいる事になる。

犠牲者の事を考えると素直に喜べない心であった。その内に戦場に出ていた全員が戻ってきた。

「將軍やりましたね！」

「ホントたまげたわ。さすが心將軍やな！」

「偶然だよ。今度は成功するか分からないしな。」

リリヌとヘテロが興奮した様子で詰め寄ってくる。心はそれをやりわりとした口調で謙遜する。

「何を言ってるんですか。心將軍の策があつたからこそ自分達は生き残ってるんですから。」

「そうだぜ。実際戦ってる時は死ぬかと思つたけどな！」

脇でロイが心の言葉を否定しバーンが大声で笑う。心はその姿をみてやはり仲間はいいなと思つた。

「それよりネウロは？」

「アイツにはセルドアの街の護衛を頼んでたんだ。もしオレ達が負けても街の人達を逃がせるようにな。」

リリヌの疑問に心が平然と答える。その答えを聞いて周りの全員が目を丸くしていた。そりゃそうだろうな。

「負けるつもりだったのかよ!？」

キースが怒鳴りながら心に詰め寄る。もちろんそんなつもりは毛頭ない。

「そんな訳ないだろう。だが負けたときの被害を少しでも少なくしたかっただけだ。」

「全く変わった將軍だぜ……」

「まあ將軍らしいといったららしいですがね。」

バーンとロイは呆れた様子だったがその顔は戦場にいた時とは違い、輝かんばかりの笑顔だった。

「それにしてもかなりの被害が出ましたね。」

「そうだな。恐らく軍団の2、3割がやられただろう。帰ったら死んだ兵士達を弔わなきゃな。」

「はい……」

「それじゃあ帰還するか。」

「……了解！」「……」

心の声にその場の全員が答える。第10軍団はこの戦いで運だけ無いということを確認し、また二倍以上の兵力差で勝った事から人々はこの戦いをスプール平原の大逆転と呼んで語り継ぎ、吟遊詩人などの歌の題材にもなったという。

この戦いは王都ヴァルハラにも届き、第10軍団はその存在を反乱軍とヴァルミア両方に大きくさせた。余談だがこの戦いの詳細を知ったクレス上級將軍が知らせを聞いて飛び跳ねて使用人達をビツクリさせたとか。

かくして心達はセルドアの街に帰還し、犠牲を出しながらもなんとか生きて帰る事が出来た。

#### 第十四記 戦いの後で・・・

心達がセルドアの街に帰還してからが大変だった。野盗集団スカル・ホーネットを討伐し、さらに帰ってから二倍以上の反乱軍を撃退したのもあつて戦死者を弔った後、街は街人全員が総力を挙げてのお祭り騒ぎとなつた。当然今回の主役である心も必然的に巻き込まれるワケで・・・

「ほら將軍さんよお！白けてないで一緒に飲もうぜ。」

「いやオレはいいよ。酒弱いし。」

「遠慮すんなよ。さあ今日はドンチャン騒ぎといこうぜ！」

「全くしょうがないな。」

キースに連れられて心も強制的に酒の輪に加わされた。周りでは酒に弱い人たちがすでに潰れている様も見られる。

「酒に弱いなら飲むなよ・・・」

その光景を見て呆れる心だが自分も酒にはあまり強くないので人の事は言えないと考えを改め直した。

「おお。我らの將軍さんが来なすつたぜ。」

「アンタ最高だよ。」

「將軍さん、ほら飲んだ飲んだ！」

近くにいた兵士達が空のジョッキにドバドバと溢れるぐらいに（いやもう溢れている）ビールを注いで心の前に何個も置く。

「入れすぎだろ。しかもこんなに飲めないしな。」

「気にすんなよ。酒は飲んでも飲まれるなだ。今日はとことん飲むぞ！」

キースの掛け声に周りの兵士が答える。そこにはもう隊長など身分の違いという壁は無かった。心は兵士達を見てからジョッキを持つと一気にノドに流し込んだ。ビール特有の苦味とアルコールの刺激が心の頭を活性化させる。

「オオツ！いい飲みっぷりだな。野郎共、新しい將軍さんに負けんなよ！」

最初はこんな問題軍団を自分が指揮できるのかと不安に思ったが・  
・上手くやっていけそうだ。

「案外こんなのも悪くないかもな……」

ジョッキ片手に叫ぶキースを見て久しぶりに飲み明かそうかと考えながら心は次のジョッキに手をかけた。

心達が飲み比べをしているなか一人、外を眺めながら静かに飲んでいる輩がいた。心の近くにいたロイはその輩を見つけるとビールの入ったジョッキを持って近づく。

「みんなの輪に混ざらないんですか？」

「……騒がしいのはあまり好きではない。」

その話しかけられた輩、ネウロは顔を外に向けたままロイの質問に答える。

「自分もです。まあ二人で静かに飲みましょう。」

そう言つて傍らに座るロイ、二人の間に沈黙が続く。先に喋り始めたのは以外にもネウロのほうだった。

「……あの將軍は生き残つたな。」

「ええ、すごい人です。」

そしてまた沈黙が訪れる。

「……だが甘い。甘すぎる。軍人にとってあの甘さは死に繋がる。」

ネウロが次に出した言葉は心を讃える言葉では無くむしろ否定する言葉だった。

「確かに甘いですが……あんな軍人もいていいのでは？」

「甘さは時に仲間の死を招きそして自分の死を招く。あんな司令官を狙うだけの戦いをしていたら……死ぬぞ。」

ロイには最後の言葉が妙に重く感じられた。だがその顔には笑みが

起る。

「何がおかしい？」

「いえ何も。そうですね、しかしあの將軍なら何かを起こしてくれる。自分はそんな気がしてならないんですよ。」

「それはただの勘だ。」

「ですね。でも……自分の勘はよく当たるんですよ。」

「……ふんつ。」

二人は窓を見上げる。空には綺麗な満月が浮かんでいた。まるで今日の勝利を祝福しているようだった。

「……綺麗な満月だな。」

「……そうですね。」

満月を見続けるネウロ。しかしその瞳に微かな闇が映っていたことをロイのほか誰も知るよしかなかった。

そしてセルドアの街の門の前、そこでも少しのドラマが起こっていた。そこにはフードを深く被った男がたたずんでいた。

「……楽しそうだな。」

男は一言そう呟くと門へと振り向いて街の外へと足を運ぼうとする。その時後ろから声を掛けられた。

「もう行くのかい？」

「!?!?・・・君か。」

男が後ろを見ると大柄な大男が立っていた。その背中に大剣を背負っている。

「確かバーンと言ったかな？お祭り騒ぎに加わらなくていいのかい？」

「いやお祭りより興味のあるものが・・・出来たんでな!!！」

バーンはそう言うなり素早く男に接近すると背中の大剣を振り落とす。

ガギイン!!！」

男はそれを異常ともいえる反応で腰にある長剣を抜き去り受け止める。が大剣によって起きた風圧は被っていたフードを捲くった。そして男の素顔が月に照らされて現れる。

「やっぱりアンタか。」

「静かに立ち去りたかったんだけどねえ。」

フードの下にある顔、それは野盗退治の時に行動を共にした怒龍力伊の顔だった。

「いきなり不意打ちは酷いな。」

「アンタは何者だ。」

「やれやれ少し落ち着こうよ。殺気丸出しだよ？」

それでもバーンの体から殺気は消えない。

「あの野盗での戦い、無駄のないスムーズで戦いに慣れている戦闘の仕方だった。加えてあの一撃を避けた事。並みの奴じゃあれは避けられない。」

「なるほどね。中々の洞察力だ。でも……」

目の前からカイの姿が消える。だがバーンは後ろを振り向くと大剣を横なぎに振りぬいた。

鈍くて高い金属の音が辺りを響かせる。しかし街の騒ぎにかき消され、その音に気づくものはその当事者以外誰もいなかった。

「……驚いたな。まさかオレの動きが読まれてたとは……」

「いや結構危なかったぜ？」

二人は剣を重ねたまま話す。するとカイは一度距離を取ると剣を腰の鞘に戻した。バーンはそれを見て不機嫌そうに顔を歪める。

「何のつもりだ。」

「別にここで殺りあう必要はないだろう。」

「理由はあるさ。アンタは危険な香りがする。」

「それは傭兵としての勘かい？」

「そうかもな。」

二人の間を一吹き風の風が流れる。だが二人共もう殺気は放っていないかった。

「まあ縁があればまた会うさ。特にこんな何が起きるか分からないご時勢ではね。じゃっ、またね。」

カイはそう言うと言を越えて走り去っていった。バーンはその様を厳しく睨んでいた。

心とカイ。この優秀な二人がもう一度会うのはまた別の話。もっともこの二人が再会する時、今度は味方である保障は一つもないのだが・・・

バーンはカイを見送るとゆっくりと大剣を収め、心達がいる場所へと戻っていった。

## 第十五記 影の中で

心達第10軍団がセルドアの街で騒いでいる頃、首都ヴァルハラの小さな部屋で二つの物体が話をしていた。カーテンを全て閉め切つて息苦しい空気が漂つその部屋で中にいる二つの物体のうちの一つ、片手に杖を持っていてしわ交じりの老いた顔、しかし妙な威厳を醸し出しているその男は目の前にいるもう一つの物体に話しかけていた。

「・・・で、教皇様のご容態はどうなっている？」

「はっ、教皇様の容態は日に日に悪化しております。おそらくその命は長くても後2年が限界でしょう。」

宝石が所々散りばめたマントをきてそのいかにも上から目線の話し方からすると男は城の中でも相当の地位が上の者だろう。その男に頭を垂れてその話しかけられた物体・・・いや女が男の質問に答える。

「ふふふっ…そうか。反乱軍の方はどうなっている？」

「はい、反乱軍はその規模を少しづつ大きくさせてはいますが兵士は民兵が中心ですし戦いの練度も低いのでまだ我らと正面切つて戦うまでの力は無い、かと。」

「なら放つておいても大丈夫だな。」

計画は順調、反乱軍も大した力も持っていない。男は思わず女の言葉を聞いて笑みがこぼれそうだったがまだ報告の途中なので顔をキ

リツと元に戻した。

「しかし閣下。反乱軍には優秀な人材がたくさんおります。元第1軍団副官で現反乱軍の中心人物であるウォールベイディザイル。強壁の異名を持つ元地方防衛軍の司令官を務めたムガダ將軍、そして閣下も知つての通り反乱軍の首謀者であり未だ謎の多いドラゴンを名乗る者。近いうちに危険な存在なるに違いありません。あるいは閣下の計画の邪魔者になる可能性もあります。」

現にデカルト砦が反乱軍によつて落とされました、と女は続ける。

「いらぬ心配だ。もしそんな奴らが力をつけてきたとしても私の計画に支障はない。お前は与えられた命令をこなせばいい。」

どうせ反乱軍などもし勝ち続けても国軍との戦いで絶対に疲労する。計画が終わつた後に一気に叩き潰せばよいのだ。

「…はっ、余計な虚言きまげんでした。それともう一つ気になる事が・・・」

そう言つた後、女は言つのを躊躇っているかの様に言葉を濁した。

珍しい。閣下と呼ばれた男は目の前の女の躊躇う様子をみてそう思った。コイツには報告は悪いことでも確実にそしてはつきり言うように日頃から教育している。事実、男はこの女の言い淀む姿など見たことはなかった。

そして女が言つのを躊躇うその気になる事にすごく興味を持つ。

「何だ、言ってみる?」

「はい…実はあの新しく第10軍団の司令官になった者のことです。」

「あの珍しい名前と字をした男の事か？優秀なやつじゃないか。初陣でほとんど被害を受けず敵を壊滅させさらに自軍より2倍以上ある敵に臆せず立ち向かいそれどころか司令官を討って勝っている。中々の勇者だと思うが・・・」

「その字を私は昔、見たことがあります。」

女はハッキリと、しかし妙に緊張した様子で言葉を紡ぐ。

「ほう、お前に文学の知識があるとは驚きだな。」

「いえ知識ではなく戦場で見たことがあるのです。そしてその文字を見た戦場は・・・あの四龍家を滅ぼした時です。」

男はそれを聞いて一瞬眉を上げた。そしてその顔は一気に不機嫌になる。

「ありえない。やつらはあの時一族全て皆殺しにしたハズだ。お前も見ていただろう！」

「はい見ていました。しかし生き残りがいないとも限りません。」

「それがあの男だと？」

「あくまで可能性の話ですが。」

「もしそうだとしてもあんな弱小軍団なら適当に前線に放り込んで

戦死させればいい。そうだ、ちょうどデカルト砦が落ちたと報告されていたな？そのデカルト砦奪還に第10軍団を放り込め。上手くいったら奪還と邪魔者の戦死、両方叶うかもしれんからな。」

それで結果が残せないなら所詮大した奴ではない。もし生き残ってなおかつ結果を出していたなら・・・それはそれでおもしろい。

「分かりました。ではそのように手配します。」

「話はこれで終わりだ。いけつ。」

「閣下の赴くままに。」

女はそう言うつと扉から静かに出て行った。後には閣下と呼ばれた男一人が残る。男はカーテンを開けて外を見たまま先ほどの会話を思い出して口の端が持ち上がった。

「さておもしろい事になりそうだ。どこまであの將軍は勝ち進むのか、頑張つて生き残つてほしいものだな。もつとも、そんな事が起きても我が計画に一片の狂いもないのだが。」

クククククツ・・・・・・

周りに誰もいないその静かな空間で笑いをかみ殺す、低く暗い声が続く。いつまでも響いていた。

## 第十五記 影の中で（後書き）

さてさてこれで最初の章である序の章が終わりました。いつのまにやら1万HITありがとうございます。次の章では心率いる第10軍団がいよいよ本格的に反乱軍と戦いますが首都でも不穏な空気が漂ってるしさてどうなることやら・・・では引き続きミュールニア  
―戦記の次章、武の章をお楽しみ下さい！

## 武の章 第十六記 新たな戦いと新たな想い

「上の奴らは一体何を考えてるんだ！」

時は昼、カラッと晴れて気分が良くなりそうな天気にも関わらずバーンは不機嫌な顔になっていた。

「全くです。自分も納得できません。」

「本当ね。これだから上のバカは・・・」

「そう言うな。命令だから仕方ないさ。」

普段ならバーンに同意しないロイヤやキース以外の悪口をあまり言わないリリヌまで怒っていてそれを心が苦笑しながら眺めている。何故軍団の皆が怒っているかという理由は本国に出していた援軍要請の返答のせいだった。

セルドアの街での祝勝祭が終わった後、心は本国に向かって援軍の要請をしていた。

前の戦いで第10軍団は二倍以上の敵に勝ったといえど味方の損害も予想していた以上に大きかった。全体の三割が死者や重傷者など戦闘続行が不可能な者が多く、これはさすがの心も頭を抱えてしまった。

心の予想では軽症者も入れても三、四割の被害だったのだ。しかし現実には死者・重傷者だけで四割、軽症者を入れれば五割近くに被害

が及んでいたのだ。これでは軍団としては機能できない。仕方なく心は本国に援軍要請をした。

しかし二日経って伝令兵が帰ってきたときの書状を見て心は予想外の答えに目を丸くした。その書状の内容は・・・

「第10軍団はヴァーノ城に向かい、第5・6軍団と共に反乱軍の手に落ちたデカルト砦を奪還せよ。」

要約すれば援軍は送らないが戦いを続けよ。つまり少ない兵力で砦の奪還に向かえということである。いくら第5・6軍団が共にいるとしても激戦が終わったすぐ後にこれはいささか無理がある命令だ。

「そつえば心將軍、あの野盗達は解放してしまつてよかつたんですか？私達を恨んでまた襲つてくるかもしれないませんか？」

リリヌが怪訝な顔して心に聞く。心は祝勝パーティーが終わつた次の日の朝に捕らえたスカル・ホーネットのメンバーを全員解放しろという命令を出した。軍の輸送部隊に手を出したのだから普通ならその場で死罪でもおかしくはないのだが心はそれをしなかつたのだ。

「大丈夫さ。見たところそんなに悪いやつらには見えないし・・・それにバーンがあれば必死に言うんだ。聞かないわけにはいかないだろ？」

実は心がスカル・ホーネットのメンバーを解放した理由の一つにバーンが頭を下げた事があつた。

あの人に意地でも頭を下げなそんな強情な性格のバーンが心や他のナイトがいる前で堂々と土下座をかましたのだ。そんなバーンの気

持ちも汲み取って心は解放の命令を野盗達に出したのだ。(まあ一応形式的にも罰が必要なので出陣の準備を手伝う等の事はしてもらったが・・・)

「そうですね。まさかあのバーンさんが頭を下げるなんて思いませんでしたよ。」

「オレだってたまには頭を下げる時もあるさ。」

バーンはそう言って心達から顔を背ける。だがそのバーンの顔が赤くなっていた事を心は見逃さなかった。不器用なやつだな・・・

「実はそう言ってあの灰蜂とかいう女の人に惚れたんじゃないですかあ？」

「んなワケあるか！ただの情けだよ。」

「バーンさんもついに春がきたんやなあ。ワイはうれしいっすわ。」

そしてヘテロが話に入ってきてリリヌと共にバーンを茶化す。

「ヘテロ・・・てめえ、昨日の夜サラさんとあんな事やこんな事してたのバラすぞ!？」

「もうバラしてるやないですか!？」

「なにっ!?!ヘテロ、お前サラさんとそんな仲になってたのか!？」

「ほう・・・?それは気になる話ですね。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「隊長！女がいたんすかあ！？」「」

話がヘテロとサラの関係についてになった所で他のナイツが話に入り、加えて周りにいた兵士達もバーンの言葉でヘテロに詰め寄る。

「えっ・・・・・・・・？いやそんな事は・・・・・・・・」

「街から出陣する時も「また戻ってきたから・・・・・・・・」とか言いながら隠れて抱き合ってたよなあ？」

「バーンさんもう堪忍してやあ！！！」

軍の進軍のはずがなにやらピクニックにいくような雰囲気になっている。マジメなロイヤ、あのネウロまで表情は変わらないまでも話に聞き入っていた。さっきの不機嫌さはどこへいったのだろう。

まあこれがこの軍団の良いところかな、と心は苦笑いしながら楽しそうに話している仲間達を見てそう思うのだった。そしてまた、はたしてこの中で何人が生き残るのかも。

兵士という職業をしている限り死の危険は避けられない。それでも・・・・・・・・

心は空を見上げる。それでもオレはオレの出来ることをするだけだ。たとえそれが無駄だったとしても・・・・

「ほらヴァーノ城が見えてきたぞ。入城準備しろ。」

「「「「了解!」「」「」

そして心の・・・いや第10軍団の新たな戦いが今、幕を開けよう  
としていた・・・

## 第十七記 ヴァーノ城

「君が第10軍団を率いている將軍かね？」

ヴァーノ城に入ると城の城門のすぐそばで長い髪をした男が心に話しかけてきた。その髪はまるで炎のように赤い。

心はロイに皆に城で休憩をとらせるように言ってからその男のほうを向いて返答を返す。

「はい、私がこの軍団を率いている桐生 心です。失礼ですがアナタは？」

「これはご無礼いたしました。自分はこのヴァーノ城の守備を任されているノルガと申します。階級は將軍です。」

「いえこちらこそご無礼をすみません。わざわざ迎えに来てくれたのですか？」

「すみません?・・・プツ、ハハハハハッ!!」

するとノルガは一瞬目を丸くすると今度は何かが切れたかの様に笑い出した。心は何故笑われているのか分からずその場でキョトンとする。

オレ何か笑わせるような事したか？

「ハハハハッ!いや笑ってすまない。まさかクククツ・・・軍団を任されるほどの人にすみませんなんて言われるとは思ってなかったらね・・・」

ノルガは一通り大笑いすると最後は悲しげな顔になる。

「失礼な事をしたら謝るのが普通じゃないんですか？」

「普通ならね。だが今の国では地位が全てだからな。その地位を傘にかけて偉そうにする輩がほとんどだ。もちろん謝る奴だって少ない。かく言う君も軍団を任されるほどなんだから相当の地位を持つてるんだろ？」

ノルガは少し呆れ気味に心を見る。その瞳には明らかかな諦めが宿っていた。

「そんな事言つて良いんですか？オレが本国にこの事を言つたらあなたは罰せられますよ？」

「オレは人を見る目だけはあつてね。アンタは信用できそうだな。」

根拠も無しにそう断言するノルガ。何というか掴みどころのない男だ。でも・・・  
心は右手をノルガの前に出す。

「改めて、桐生 心です。階級は將軍。」

この人は信用できる。何故だか分からないが心はそう思った。

「！？…こちらこそ改めて。ノルガ・バツカーノだ。階級はさつき言つた通り將軍。ヴァーノ城へようこそ。アンタとは仲良くなれそうなのがするよ。」

ノルガは心の階級を聞いて少しビククリした様子だったものの自分の左手を出して心と固く握手をする。

「それにしても階級が同じだとは驚きだね。てっきりお金持ちのボンボんかと思っていたよ。まあ長旅ご苦労さん。ゆっくり休んでくれ。」

「感謝するよ。そういえば第5・6軍団はまだ来ていないのか？」

「どうせあいつらは明日ぐらいに着くだろう。上のやつらは皆がひとつ落とされても余裕かましてるらしいからな。」

ノルガがは少し自虐気味にそうはき捨てる。恐らくこの言動からノルガは上の連中に嫌われてここに飛ばされてきたのだろう。それを頭に描くとおもわず苦笑してしまう心であった。

「あ、心將軍！どこに行つてたんですか！？早くこいつらを止めてくださいー！！」

「うおおー！？」

城の中に入るとロイが半泣きになりながら心にすがりついてきた。すでにそこではキースなど第10軍団の兵士達がドンチャン騒ぎを繰り広げている。

「お前ら…セルドアの街で酒盛りしたばかりだろう。」

「よお將軍さん。いややっぱり飲み足りなくてさあ。」

「はあ…飲みすぎるなよ。」

その時ノルガが心の肩に手を置いた。そして一言、

「お前さんも大変だな。」

全くその通りです…心はもはや苦笑も出来ずにため息だけを吐いた。

心達がヴァーノ城に来てから時間は経ち、外はすでに暗黒の暗闇に満ちた世界になっていた。その城門の上の物見台で男が欠伸をしながら座っている。

「ン…アアアア〜！ンムツ…。」

「おい！ちゃんと見張りしてるよ。何欠伸なんてしてんだ。敵がきたらどうする気だ？」

その欠伸した男に同じ見張り役の男だろうか…？が注意をする。

「眠いんだからしょうがねえだろ。それにこんな空気みたいな存在の城に敵なんかくるわけねえって。」

「そういうなよ…見張りなんてそんなもんさ。ほら、酒持ってきてやったぞ。」

「おっ！悪いねえ。こつ真つ暗で何にも見えなきゃ気分が下がってしかたねえ。」

「まあ命令だから仕方ねえよ。」

もう一人の男がコップを持って欠伸をした男の横に座る。

「しかしオレ達もホント、ついてないよな。こんなチンケな城で見張りなんざあ実家のオカンに見られたら笑われっちまうぜ。」

「でもこの城は血地戦争時に建てられたすげえ歴史ある城らしいぞ？」

「ホントかよ？それがいまじゃこの扱いねえ…ちと飲みすぎたみたいだ。シヨンベン行ってくる。」

漏らすなよ、という同僚の声を聞きながら欠伸をしていた兵士は席を立つ。そこでふと外に明かりのようなものが物見台から兵士の目に届いた。

「おい、何だあれは？」

「何だよ…酔いすぎてとうとう幻覚が見え始めたか？」

同僚の兵士が彼を茶化すが何かを見つけた兵士の顔は真剣そのものだ。

「いや違う。暗闇でよく見えないな。…まさかあれは…」

ヒュンッ！

そこで風を切るような音と共に兵士の体は後ろに倒れる。同僚はその兵士が倒れたのを見て慌てて駆け寄った。

「おい!どうし・・・!?!?」

同僚は男の体を見て固まった。倒れた仲間は床に赤黒い色の液体を広げ、その首には尖ったあるものが刺さっていた。

「・・・!・・・敵しゅ・・・」

ようやく何が起こったかを悟り、叫ぼうとしたその兵士も次の瞬間には目の前が暗くなる。それと同時に外から怒声と門を打ち砕く音、彼はその音を最後に永遠の眠りについた・・・

## 第十八記 真夜中の防衛戦（前編）

ヴアーノ城が攻撃を受ける数分前、心はノルガと共に夜遅くまで酌を交<sup>まじ</sup>わせていた。今はノルガに最初に第10軍団に配属された時の話をしている。

「ハハハッ！そりゃ災難だったねえ。」

「全くだ。まさか入っていきなりナイフが飛んでくるとは思わなかったからな。」

「しかし心将軍が地方から本国に呼ばれてたなんてな。いや驚きだ。ハハハッ！」

ノルガは心の話の話を聞いてから大爆笑止まらない。どうやらこの男は酒が入ると笑い上戸になるらしい。

「それより外は真つ暗だな。何にも見えないぞ。それになんか静かだ。」

「ここら辺は背の高い樹木が多くて外の光が届きにくいからねえ。ま、その分血地戦争の時なんかは城から夜襲を仕掛けられたりして城を守るには結構環境的に良いんだよ？」

「それが今はただの中継地点か？」

「違うない！ハハハッ！！…？」

心の言葉にまたノルガが笑う。だが次の瞬間ピタッ、と押し黙った。

そして急にマジメな顔になってから心の方に顔を向ける。

「心將軍、今アンタ静かだ、と言ったな。」

「言ったがそれがどうした？」

ノルガの真剣な顔に心の顔が強張る。まだ短い時間しか会っていないのでノルガの事をあまり知らないがこの男が真剣な顔をするとうごく違和感がしてしまう。

「この見張りは暗いしおもしろくないから夜遅くまで見張り役の兵士達がバカ騒ぎして飲んでいるんだ。今日は第10軍団の兵士達もいるハズだから静か、だなんておかしい。」

「みんな酔いつぶれてるんじゃないか？」

「それならいいんだけどねえ。…嫌な予感がするぜ。」

オレの嫌な予感は当たるんだよねとさっきの真剣な顔から元の軽い表情に戻っている。だが心も嫌な予感がかなりしてきた。第六感とでもいうべきだろうか。とにかく嫌な予感が消えないのだ。その時、心達がいる部屋の扉を誰かがドンドン！と叩いた。

「ノルガ將軍、緊急事態です！」

「どうした!？」

ノルガがドアを開けると肩に怪我を負った兵士が転がり込んできた。その傷は誰かに切られて出来た傷、ということは心の目から見ても明らかだった。

「ウグツ…反乱軍が夜襲を仕掛けてきました。すでに第1城壁は破られ見張りの兵もいきなりの攻撃にほぼ全滅しました。現在・グツ…第2城壁に敵は進行中、城内の兵と第10軍団の兵が只今必死の防戦を繰り広げております。」

「分かった。お前はそのまま怪我の治療しろ。オレは兵の指揮に就く。」

やっぱりオレの嫌な予感が当たったよ、と呟き城の第3城壁へと向かう。心もノルガに続いて第3城壁へと向かった。

怪我をした兵士は第1城壁が破られたと言っていたが、ヴァーノ城は血地戦争時代からの城とあって少ない人数で城を守るように様々な工夫がされている。その一つが三枚に渡る巨大な城壁だ。

敵が攻めてきた時に城壁が一枚では敵が大軍の場合、一気に突破されて本城を落とされる場合がある。しかしこのヴァーノ城は城壁が三枚あり、敵が第1城壁を落としても第2・3の城壁を落とさなければ本城まで辿り着かない。しかも城壁の通路は狭くなっているのだから弓矢なり何なりの攻撃がし易くなる。

心はヴァーノ城の造りに感心しながら第3城壁へと走った。第3城壁ではすでに負傷者や兵士に指示を出す各隊長で溢れていた。ノルガはその中の自分の副官だと思われる女性に声を掛ける。

「よおシリア、お忙しそうだねえ？」

「隊長。どこ行ってたんですか！？大事な時にいつつもいないんですから！！大体隊長は・・・」

「えっ？いや、あの………すみません。」

シリアと呼ばれた副官はノルガの姿を見つけると戦闘中だというのにいきなり説教を始めた。すると普段おちやらけた感じのノルガがタジタジになりながら最終的には正座のような格好になってシリアの説教を聞き始める。

こいつらは今の状況が分かっているのだろうか？

心は唾然としながら目の前の説教をしている部下と説教をされている上官を見る。周りの兵士達は慣れているのかそんな異質な光景に気にも留めずバタバタと動いている。

「あの……それで今どうなって……アナタは黙っていて下さい！」  
はいすみませんでした。」

埒が開かなそうなので心が口を挟むとシリアに思いきり睨まれ、怒鳴られた。心は反射的に背中が伸びた。この人怖い……

「おい將軍さん、ちょっといいかい。」

「あ、ああ……なんだ？」

恐らく城門で戦っていたのだろう。全身に返り血を浴びたバーンが話しかけてきた。心は心の中で助かったと思いつながらバーンの方へ体を向ける。

「状況が最悪だ。暗いから僅かな灯りで敵と対峙しなきゃならないし城門付近は乱戦になって上から弓の援護が出来ない。何より相手

の士気がかなり高い・・・こりゃ不味いぜ。」

そう言うバーンの体は良く見ると返り血の他に肩や腕を浅く切られて傷が出来ている。それにバーンが戦いを治めてここまで来ると言うことは余程マズイ状態なのだろう。

「分かった、オレも城門で戦う。ノルガ將軍は兵の指揮をお願いします。」

「ダメだ、危険すぎる。アンタは自分の立場が分かっているのか？」心の提案によく説教が終わったらしいノルガが反対をした。言いたいことは分かっている。軍団のリーダーである自分が万が一にも討ち取られれば統率を失ったこの城は瞬く間に陥落するだろう。しかしだからといってこのままでは自分が出なくとも城が落とされるのは時間の問題である。

「隊長、第2城門がもう持ちません!？」

「ここで言い争っている暇はありません。バーン、行くぞ!!」

「おい、ちょっと待て!？」

伝令兵が持ってきた悲痛な報告を聞いて心はバーンに軽く言うつと第2城門に向かって走り出す。バーンも無言で頷いて心を追いかけた。後ろでノルガが何か言っているが、今は城が落ちるか落ちないかの瀬戸際なので心はそれらを無視して階段を下りていった。

「・・・行ってしまったねえ。イテッ。」

ノルガは自分に背を向けて走り去っていく心將軍の背中を見ながら  
そうポツリという。その時誰かに頭をシバかれる。後ろを見ると自  
分の副官であるシリアが仏頂面で立っていた。

「あの人も頑張ってるんだから隊長も早く士気を取ってください。」

「分かりましたよ。厳しいねえ……」

ノルガも苦笑いをしながら兵の指揮をするために動き始める。シリ  
アもノルガが動く様子を見て一瞬だけ微笑んだ後けが人の確認の為  
に自分も動き出した……

## 第十九記 真夜中の防衛戦（後編）

「なるほどな。これは上から攻撃するのはきつそうだ。」

「だろう？上から吊り下げてくれるカンテラで何とか戦えているけどな。」

心達が第3城壁に着くとそこに映ったのははしごを掛けて城壁をよじ登ろうとする反乱兵とそのはしごを蹴り落したり破城槌はしごづちで城門を破壊しようとする敵兵を弓矢で攻撃するヴァーノ城、第10軍団連合の守備兵との必死の攻防戦が行われていた。

「とりあえずオレ達も加勢に入るぞ。」

「了解だ。」

心とバーンも城壁の上に登り、はしごを蹴り落しながら守備兵の加勢に入る。敵の数は詳しくは分からないが、いきなり奇襲された恐怖心からか城壁を登る敵の数は味方の兵の数の数倍に見えた。

心は次々と掛けてくるはしごを落としていくなかで、長剣を振り回しながらはしごを登ってくる兵士を叩き落しているキースを見つけ

る。

「キースッ！状況はどうなっている!？」

「將軍!？何でここに…それよりキツイどころじゃない。あいつらがいきなり攻めてきたのと酒に酔って寝ていたせいで第1・2城門が易々と突破されちゃった!！」

キースは心より少し遠く離れた場所で声を張り上げる。だから飲みすぎるなどあれほど言ったのに……

「ボヤボヤしない。ほら次が来てるわよ！」

「グアアアツ!？」

キースの近くではリリヌが自慢の槍を器用に使いながら敵兵士を体重を掛けて槍で突き刺す。肩を貫かれて叫び声を上げた敵兵はまるで坂から石を転がしたかのように後から登ってくる自分の味方である兵士を巻き込んで落ちていく。血飛沫が飛んだおかげでリリヌの顔は真っ赤な液体で染まっていた。

「まるで人を喰った後みたいだな……」

心はその姿を見てそんな事を考えている場合ではないのについ変な事を考えてしまう。意外に自分は度胸があるのだろうか？

顎から伝うその液体を手で拭いながらリリヌは次の獲物に目を向けて槍を握っている。オレも頑張らないとな。

「うわあああ!？」

心が横を向くと城壁を登ったのである。敵兵がしりもちをついている味方の守備兵に剣を振り上げていた。心はその敵兵に向かって駆け出すと敵兵が剣を振り落とすより先に後ろから敵兵へとナナメに自分の剣を振る。

「グガツ!？」

「大丈夫か？」

「あ、ありがとうございます…」

心はその助けた守備兵をチラリと見るだけにすると今度は周りを見渡す。味方の疲れかそれとも敵の進攻スピードが速いのか、敵兵のいくらかが城壁を登りつめて上の守備兵との戦いがあちこちで起きていた。

「チツ…厄介だな。ほら、今度は油断するなよ。」

心は城壁を登ってきた敵兵を見て思わず舌打ちをする。未だしりもちをついたままのその兵士に一声掛けてから心は城を守る為にもう一度駆け出した…

「はあっ…はあっ…」

第3城壁の端の方でロイは右腕で剣を構えたまま荒い息を吐いていた。漆黒の暗闇が辺りを支配するなかで、瞳には光が灯<sup>とも</sup>ちまだまだ戦闘意欲があることを物語っている。しかしその体はあちこちに切り傷・擦り傷が出来てすでにボロボロだった。先ほどまで使っていた左腕は手首を捻<sup>ひね</sup>ってしまったらしく力があまり入らない。

「あなたは一体何者なんですか。」

ロイは自分の目の前で両手に二本の短いナイフを持って立っている。皮鎧と頭に黒フードを装備した男に喋りかける。ロイは心が第3城壁に加勢に行つたとノルガ將軍から聞かされ、急いで城壁の端まで来た時にいきなりこの男が影から出てきて襲いかかってきたのだ。間一髪初撃は転がって避けたが、その拍子に左手首を挫いてしまい

今に至っている。

「……………」

黒フードの男はロイの質問に返答として黙って両手のナイフを構えた。そして驚くべきスピードでこちらの方へ走り出す。スピードに乗せて突いてきたナイフをロイは長剣の根元の部分で受けた。

中々のスピードですが……

そのまま力を込めて刃を押し返すと男は一度ロイから離れて距離をとる。自分だって長年クレス上級將軍と訓練をしてきたのだ。ただか反乱軍の一兵士にそう簡単に殺られるワケにはいかない。

今度は自分から切り掛かりに行く。その素早く、流れるような剣撃の嵐を黒フードの男は両手のナイフを巧みに使い、ロイの剣を右へ左へと受け流していく。バーンの剣が大剣の重さと勢いで全てをなぎ倒す剛の剣ならロイの一人の相手だけを狙いながら速く、流れるようなその剣筋はまさしく柔の剣。

最初は一方的に攻めていたロイだったが剣の交わりが数十撃を超えると今度はロイの方が攻められた。その途中経過に焦りを覚え始める。

ロイが攻め、黒フードが守の構造がいつの間にか完全に逆転していた。

「そんなバカな。私より…速い!？」

その動揺が勝負を決定づけた。黒フードはその一瞬の隙を見逃さずナイフの柄でロイの手を打ち、長剣が二人の足元に転がる。

「心將軍、すみません。バーン、心將軍をちゃんと守ってくださいよ。」

ロイは死の覚悟をした。黒フードの男のナイフが自分の喉に迫る。だがここで予想だにしない事態が起こった。ロイと黒フードとの間に矢が撃ち込まれたのである。そして間髪入れずに鋭い突きが黒フードを襲った。突きは黒フードを掠り、男の顔があらわになる。その髪は深緑を思い描く深い緑色に蒼き瞳、ロイはその美しい容姿に少しの間だが見惚れてしまった。

「ちよ〜と待つてな。ソイツを殺されるとオレの友達が泣くんだ。」

「ノルガ將軍!？」

「炎操えんそうが何故こんな所に。もう少しだったのに……」

長い髪に深紅の髪、ヴァーノ城守備隊長ノルガがそこに立っていた。その手にはエストックと呼ばれる突攻撃に特化した剣を持っている。ノルガの姿を見た黒フードは小さく呟くと身を翻してはしごを降りて暗闇に消えた。

「行ったか。さて、危なかったなあ。」

暗い中で鮮やかに紅色こうじよくの髪を灯すノルガの軽い声々と城兵の勝利の掛け声を聞きながらロイの意識は闇に落ちていった……

第十九記 真夜中の防衛戦（後編）（後書き）

いきなりですが15000HIT越え、ありがとうございます！これからも頑張りますんでよろしくお願いします。

さて心達の戦いも激しさを増してきましたね！

これからどんな戦いが待っているのか！？続きを楽しみにしてください。

## 第二十記 遅き到着

朝、ヴァーノ城の中では昨日の防衛戦で出た被害の後始末をしていた。完全な奇襲だった割には思ったよりも兵の被害が少なく（城門は突破されたが）、心を安堵させた。今でも城内の兵が死体処理やら城門修理を行っている。

「いや〜でも危なかったな〜」

「ですが敵が退いてくれてよかったですよ。もしあのまま攻撃されてたら城は落ちてたかもしれないから……」

敵が何故引いてくれたのかは分からないが恐らくロイが気絶してるのとそのロイを抱えて城にいたノルガと関係があるのだろう。

「そっいえばロイはどうしたんですか？」

「君の副官は意識が戻った後に城門修理の指揮を執っているよ。」

マジメだねえ…と言いながらノルガは笑う。確かに、と心もノルガに同意した。怪我人なのに仕事熱心だな、と言葉を続ける。

「全くです。隊長にも見習って欲しいですね。」

「げっ…シリア……」

「げっ、とは何ですか。」

心とノルガの二人の会話にあの防衛戦でノルガに説教をしていた女

性が入る。確かシリアと言ったか：それを見たノルガはその場から立ち去ろうとするが即座にその女性に服を掴まれ逃走不能となった。

「初めまして心將軍。私、この城の副官の任にあたっております、シリア・ベルツキー二と申します。階級は將軍です。」

「こちらこそ初めまして。第10軍団の將軍をしております、桐生心と申します。階級は同じく將軍。」

そう言つてシリアはペコリと頭を下げた。紐で一つに括つているのでまるで宝石のような薄いブラウン色の後ろ髪がピヨコンツと跳ねる。正確には心は本城に来た時に怒鳴られたので初めましてではないのだがまた怒鳴られたくは無いので言わずに紹介を返した。

「キリユウ？変わった名前ですね。」

「よく言われます。覚えやすくして良いでしょうか？あ、ちなみに桐生が苗字です。」

「そうですね。ところで隊長？」

一通りの会話が終わった所でシリアはノルガに声を掛ける。シリアの手を必死で掴んで逃げ出そうとしていたノルガは、その声に身体をビクツ！とさせた。

「報告書がまだ出ていませんが。」

「いや後でやるうと思つてたんだよね。」

「そうですね。やりましょう。」

そう言うとシリアは手を掴んだままズルズルとノルガを引きずっていく。上官が部下に引きずられていく、はたから見るとシニールな光景だ。

「失礼します。第5・6軍団の將軍方にご到着されました。」

「分かった。すぐ向かう。」

「よし、すぐ行こう。うん。」

「あ、隊長報告書!？」

ノルガは報告を聞くと逸早くシリアの手を振り払って城門に駆け出し、その後をシリアが追いかける。それを苦笑いしながら心も城門の方へと歩いていった。

「第5軍団長グラマ・ジユペール上級將軍、第6軍団長ジェリク・スパンダ上級將軍がお来しになりました!」

声と同時に髪の毛の長い銀髪の男と逆に頭がツルツルで顔が傷だらけな男が心とノルガの前へと歩み寄ってきた。

「貴様がここの守備隊長か？」

グラマはかなり威圧的な態度で心にそう聞いてきた。心は少しムカツときたが相手のほうが階級が上なこともあって文句も言わずノルガの方へ腕を向けて質問に答える。

「いえあちらの将軍が守備隊長です。」

「フンツ、そうか。確かにお前は守備隊長にしては貧相な体つきをしているしな。」

「まあそういうなグラマ将軍。こんなチンケな城に居るのだから兵士に決まっておろう。」

「それもそうか。」

「ハハハッ！と二人の上級将軍、グラマとジェリクは笑い合う。それを聞いて城内の何人かの兵士が腰にある剣を抜こうとするが心やノルガに目で制され渋々と腰から手を離す。いきなりやってきて横暴な態度をとる二人だがグラマ将軍は白銀の獅子ブラチナ、ジェイル将軍は虐殺者ジェノサイダーとそれぞれ異名まで持っている実力者なのだ。ここでケンカを売っても良い事は何も無いだろう。それからノルガが心を擁護しんごする為にグラマとジェリクに言葉を投げる。

「失礼ですがこの方はこの城が襲撃された時に自らを省みず必死に城の防衛をしてくれました。」

「そういえば聞いたぞ。城の第3城壁まで破られたとな。たかが反乱軍にそんな所まで進攻されるとはこの守備隊長もたかがしれる。」

心はハラワタが煮え繰りそうだったがガマンを続けた。この人たちは上級将軍なんだ。ガマンしろ…自分。

「ワシらがいれば反乱軍など一捻りなんだがなあ…残念じゃ。もう少し早くくれば…」

ガマンガマンガマンガマン……

「そういえばゴミの集まりの第10軍団の将軍が来ていないようだが……」

「どうせゴミの集まりだから恥ずかしくなって逃げたんだろ。少なくともワシならそうするわ！ワッハッハッ！」

ジェリクが愉快そうに大声で笑う。ガマン……できるか！

「失礼で「GRAMAさんよお、またあの時と変わらず偉そうな態度でいるなあ？」」

心がガマンできずに反論しようとしたが別の声がそれを遮った。後ろを見るとバーンが体に包帯を巻いて立っていた。

「なんだクズがこんな所にいたのか？それより元上官に対してその口の聞き方は何だ！」

GRAMAがバーンに向かって怒鳴る。自らの腰まである長い髪がその勢いで周りに弾けた。だがバーンはその怒声に屈する事なくさらに言い返す。

「突撃しか能がない奴がよく言うぜ。」

「キサマア！？このオレを愚弄するか！！」

GRAMAが腰の剣を引き抜く。と同時に他の第6軍団の兵士達が一斉に剣やら槍やらを抜いた。それに乗じてバーンは背中の大剣を構え、

第10軍団ならびにヴァーノ城守備兵の面々が対抗するように同じく剣やら槍やらを抜いた。両方に緊迫した空気と殺気が流れる。

「ジェイル將軍も私の仲間を悪く言うのはお止め下さい。」

「おお、リリヌ！こんなゴミの集まりみたいな所にいないでワシの所に戻ってこないか？可愛がってやるぞ？その横にいるバカなガキを捨ててな。ガハハハッ！！」

リリヌはジェイルの部下だったらしくジェイルを咎めるが逆にアップローチをされていた。リリヌの横にいたキースが自慢の槍に手を伸ばす。いまや城の中は完全に内紛の危機に晒されていた。

「…お待ち下さい。」

「何だ貴様は！雑兵が口を挟むな！！」

「私は第10軍団の指揮をしている桐生心と申します。」

「なっ……！？」

騒ぎを治めたのは心だった。心は怒気を込めて静かに自己紹介をする。GRAMもその怒気に押されて言葉が詰まった。

「我々はデカルト砦の奪還を任された言わば味方です。その味方同士がいかがみ合えば勝てる戦いも勝てません。後、GRAM上級將軍、バーンは今は私の部下です。そう言う悪口のような事を言うのはお止めください。お前もだバーン、私語は慎め。」

「ぬっ…ぐっ…」

「…了解だ。」

心の言葉はかなり正論であったし、的を射てもいたのでグラマとバーンは渋々だが黙る。

「チツ、先に部屋で休ませてもらう！」

「たかが將軍の分際で…おっとリリヌ、寂しかったらいつでもワシの所へこいよ！」

グラマは小さく舌打ちをすると早足に城の奥へと入って行ってしまった。そしてジェリクもその後を追うようにして城の奥へと歩いて行ってしまった。ジェリクの最後の言葉にリリヌだけではなくキースも一緒になつて嫌な顔をしていた。

かくして城内での味方同士の乱戦だけは免れたようだがこんな状態でこの後の戦いは大丈夫なのかとため息を吐く心であった……

## 第二十記 遅き到着（後書き）

更新がかなり遅れて申し訳ないです…さてやっと二十記までできました。ですがまだまだ長く続けるつもりです。

## 第二十一記 山岳の罾

「將軍、まだこの山抜けませんですかあ？」

「リリヌ、そのセリフは今のでもう十三回目だ。」

全く整備されていない山道を通りながらリリヌが愚痴を心に向かって言う。それを聞いた心は聞き飽きたという風にゲツソリしながら馬に乗っていた。

心達は第5、6軍団が来た次の日にデカルト砦への先陣として先頭での進軍を任されていた。デカルト砦に向かうにはこのマカダ山岳を越えなければ辿りつけないのだが何と云えばいいのか・・・ようにするに景色に飽きてしまった。

「それを言わないでくださいよ…自分もそう思ってるからですから。」

隣にいるロイもオレと同じことを思っているのグツタリして注意する。ヴァルハラからセルドア、スプール草原を越えて今、ここにいるわけだがデカルト砦までは恐らく後四日は掛かるだろう。その間ずっと獣道のような山岳を歩いているのだ。そりゃ飽きもくる。

「だって周りは全部岩・岩・岩よ！？もう見飽きたわよ！！」

「スプール草原みたいに動物もないしな。」

「それもこれもあのバカ將軍のせいよ！！」

ネウロまでもがボヤキだしリリ又はこんな進軍をする事になった当  
事者に怨みを募らせる。第10軍団が先陣をきっているのもこのマ  
カダ山岳を超えることになったのもグラマ將軍とジエイル將軍が心  
に提案したことだった。

「何が「歴戦の猛者が揃っている第10軍団なら先陣をきつても大  
丈夫だ。」よ！その前の日は散々バカにしてたでしょうが！それを  
あのハゲ・・・」

「まあ落ち着けよ。アイツ等オレ達が手柄立てまくってるから焦っ  
てんだろ？だからこんな無茶な道を選んだんだろうしな。一刻も早  
く砦に着きたいんだろ。」

前にいたバーンが遠慮無しの言葉を投げかける。その言葉には同感  
だが第5・6軍団の兵士に聞かれたらまたケンカが起ころぞ。次ケ  
ンカが起ころたら今度は自分も参戦しそうだ。

「しかしこんな場所で攻撃を受けたら一溜まりもないな。」

「バーンさんそんな事言わないでよ！」

「そつや！縁起でもないわ!？」

周りを見渡してバーンがポツリと呟いた。それを聞いたりリリ又やへ  
テロが言い返す。今、心達はサイドを高い谷に挟まれ、真ん中の細  
い道を通っていた。なるほど、確かに今サイドから攻撃をくらえば  
人数の少ない自分たちはともかく後ろにいる第5・6軍団は大ダメ  
ージを受けるだろう。

「全軍攻撃用意・・・」

「んっ、気のせいかな？ いやでもこの胸騒ぎは・・・」

そこで小さくだが心の耳に何か声が聞こえた。気のせいか思ったが胸騒ぎがする。次の瞬間心は、自身が出せる限界の音量で叫んだ。

「全員盾をかけたろー！ー！？！？」

「撃てー！ー！！！！！」

心の声とサイドの谷から大量の矢が放たれるのは同時だった。それから第10軍団と第5軍団の間に大きな岩を落とされ前方に反乱軍と思わしき少数の兵が現れる。

「敵襲だー！！？」

後ろから悲鳴染みた声が聞こえる。どうやら後方の第5・6軍団も襲撃を受けたらしい。上からは止まる事なく矢が降ってきていた。

「バーンさんが余計な事言うからあー！」

「オレのせいかな！？」

「アカン！このままやと全滅や！？」

近くにいるバーン達も矢を必死に防ぎながら防戦する。前にいる敵兵も弓矢で遠距離攻撃に徹しているようだ。ふとそこで心は敵兵の後ろを見た。後ろに細いが崖を上がる道がある・・・よし！

「全員前に進め！あそこの道を行って第5・6軍団を助けるんだ！」

そして第10軍団の兵士達が前にいる敵兵に突撃を掛ける。心も馬を走らせようとすると横にロイが並んだ。

「あのグラマ將軍達を助けるんですか？」

「一応は味方だからな。助けないわけにはいかないだろ。」

崖を上がる道では反乱軍の兵士がこちらを登らせまいと必死に弓矢で防戦していたがこちらの方が数が上とあって少し立ち往生したが難なく突破できた。しかし道が狭く少人数でしか戦えない為、そこからくる反乱軍の兵に足止めを食らうことになった。

「くそつ、どけってんだよ!!」

「ぐあああ!？」

「あぶねえ!?!バーンさんもっと小さく振って下さい!」

「この状況でそんな事できるか!!」

「あつちやく、こんな狭かったら弓も使えんわ!」

さらに大剣を使うバーンはその大きさが災いして思うように剣が振れず、ヘテロの弓矢もこんな所で撃つと味方に当たってしまう可能性があるので使えない。この作戦を立てた奴は相当の策士だな・・・

「オレが先行する!バーン達は下がって討ちもらした敵を叩いてくれ!」

「ちよつ...待ってください!?!」

そう命令しながら心は味方の兵を押しつけて前に出る。命令された

ロイも心を守る為にしかたなく心の後を追った。

この分だと向こうの状況は最悪だ。もしグラム將軍が討たれでもしたら指揮系統を失った第5軍団は壊滅、いや恐らく全滅するだろう。今は何としても第5軍団の応援にいかなくては……

聞くところによると第5軍団はグラム將軍が敵を見ると突撃命令ばかりの力思考のせいもあって騎馬隊や歩兵隊などの近接部隊が中心に組まれているらしい、そして自分が何を言いたいかというところまじり上への攻撃手段がないのだ。それを今の状態に当てはめると敵はやり放題、こちらはやられ放題。

だが焦って突撃しても味方の被害が増えるだけ、今は急ぎつつ冷静にいかなければ……

心ははやる気持ちを抑えて目の前の敵に刀を振るった。

## 第二十二記 獅子の油断

「騒ぐな！一箇所に留まって盾を掲げる！少しでも矢が当たらないようにするんだ！！」

矢の雨が降り注ぐ中、グラマは大きな声を出して飛んできた矢を叩き切る。自身は矢があまり来ないように端の方に移動しながら兵士に指示を飛ばしていた。だがいきなりの奇襲で兵達が混乱しているのと悲鳴が混じって上手く指示が伝わらない。グラマは思わず齒軋りした。

「グラマ將軍、ご無事ですか！？」

「当たり前だ。この私がそう簡単にやられるか！！」

後ろを見ると自分の副官がホツとしたような顔で近づいてきた。この副官は自分がこの第5軍団に来た時と同じくして配属された長年の戦友だ。今は自分が誰よりも信頼できる部下となっている。だがその副官にもグラマはイライラしていたせいでつい強い口調で返してしまう。

「状況はどうなっている！？」

「はい、後ろの第6軍団ならびに前の第10軍団も攻撃を受けているようです。自軍はただ今多数の岩場に隠れていた反乱軍と交戦中。」

副官はこんな状況でも冷静に報告をしてくれた。しかし6軍団や10軍団も攻撃を受けているだと？この場所は私以外知らないはずな

のになぜ伏兵を置けたんだ！？しかもこの敵兵の配置は確実に自分達がここを通る事を前提に置かれている！

「とりあえずここは待て。味方の助けがくるまで絶え続けるんだ！」

「了解しました。」

副官が指示を伝えに離れていく。地面には何人もの味方の兵が矢を受けて赤い液体を流しながら倒れていた。このままでは全滅も時間の問題だが自軍の兵は弓兵がほとんどいない。しかも数少ない弓兵は最初の攻撃でほとんどやられてしまった。

「突撃用の軍団が仇になつたか!？」

「ぐああああ!？」

目の前でまた味方の兵士が敵の弓矢の餌食になった。何度これを見ただろう？その後も次々と味方が倒れていく。剣先を地面に下げてグラマは呆然とした。自分は貴族のエリートとして兵士になり、その後も輝かしい戦績を残して戦場を生き抜いてきた。今では白銀のブラチナ獅子と呼ばれるまでになったのだ。そんなオレがこんな所で朽ち果てるのか？

グラマは、自分のすぐ後ろに敵兵に気づかず一人で自問自答を続ける。気づいた時にはすでに遅い。敵兵が剣を振り上げて落とす。吐いてくるハズだったのが……。その敵兵は口からいきなり血を吐いて倒れた。後ろにはさっきの自分の副官。

「將軍大丈夫ですか!？」

「あ、ああ…大丈夫だ。」

そこからまた剣を構える。そうだ、考え込むなんてオレらしくない。今はこの戦場を行きぬくのみ！！元氣を取り戻したその次にグラマの顔を一人の男が立ち塞がった。皮鎧に頭に黒フードを装備し、さらに二本の短いナイフ。グラマは知らないがヴァーノ城でロイと対峙した男である。

「貴様、何者だ！」

「…この司令官だな？」

男は副官の質問に答えず逆に質問する。その雰囲気は何故だかグラマは少しばかりの恐怖を感じた。只者じゃない……

「無礼者が！！！」

「待て！？！」

副官が黒フードの男に向かって剣を構えたまま走り出す。グラマは副官を止めるがその言葉はすでに遅きに達していた。右足を踏み込み腰を捻って副官は力を込めた一撃を放つ。しかしその力を込めた一撃を手に持つている短いナイフで受け止め、横に流した。急な動きで副官の体勢が崩れる。

「なっ……！？ガッ！」

「貴様アアアア！！！」

体勢が崩れた所をもう一方のナイフで心臓を一突きした。鈍い声を出して血を吐きながら副官が倒れる。その瞬間、グラマはさっきの

恐怖も忘れて無我夢中で男に飛び掛かった。刃がギザギザになっている剣が男に襲い掛かる。

「うおおおお！！」

「チツ…」

男はその剣を今度は受け止めず右へ左へと避ける。実はグラマの剣は少し特殊でこのギザギザは相手の剣を絡めとり、剣を折る又は敵から剣を奪うことに適している。男の短剣では例え受け止めたとしても刃の長さで力負けして剣を奪われるのが落ちだろう。逆を言えばそれが分かかって避けることに徹している男もやはり相当の実力者といえる。だがグラマは異名の如くまるで獅子のように激しい剣撃の嵐を男に浴びせていた。

ガキーン！？

とうとう避け切れなくなつて男が短剣でグラマの剣を受け止める。そしてグラマはそこから相手の短剣を捻って奪おうとするのだがそこで男は予想外の行動に出た。

「うっ！？くっ！」

なんと男は受け止めた短剣を自分で投げ捨てたのだ。グラマの体が前のめりになる。さらに男のもう片方の短剣が首へと迫った。そこを身体を捻って避けたのはさすがというべきだろう。だが次の瞬間には目の前に短剣が突きつけられていた。

「さすが司令官といったところだがまだまだ甘い…」

オレもここまでか……願わくば神よ、もう少し生きてかったな……

グラマは死の覚悟をして神に祈る。恐らくこの騒ぎでは第6軍団も援軍にこないだろう。

しかし神の気まぐれかはたまたグラマの祈りが通じたのか奇跡が起きた男の背中に何者かが切り掛かったのだ。

「最近邪魔されるのが多いな。まあいい…これだけ被害を与えれば十分だ。」

男はそれを察知してグラマから離れると苦々しげな顔をしながらそのまま逃げていく。

「グラマ將軍！」

「貴様は第10軍団の!？」

グラマを助けたのは心だった。心は顔から汗をとめどなく流して息が切れているがどこも傷を負っていない。

「助けに……きてくれたのか？」

「当たり前でしょう。自分達は仲間なのですから。」

心が笑いかける。上を見ると第10軍団の兵士が上にいる反乱軍と戦っていた。オレは助かったのか……？

「さあグラマ將軍、早くここを切り抜けましょう!」

「…フツ。分かっている」

小さく笑う。まさかゴミと侮っていた第10軍団に助けられるとはな。自分の情けなさに笑いがこみ上げてくる。

しかしグラマのその笑いは何故かスッキリしているように見えた。

「全軍うるたえるな！！援軍が来たぞ。隊を組みなおして我ら第5軍団の意地を見せつける！！」

怒声が戦場に響く。第5軍団も指揮官の声と援軍の姿が希望になったのか段々と態勢を戻して反乱軍を押し戻していく。

「撤退！撤退だ〜！」

どこからかそう声が響くと敵兵が引いていく。とりあえずは助かったらしい。グラマは血だらけになった副官に腰を下ろす。

悪いな…お前の元へいくのはもう少し先になりそうだ。

戦場が少しずつ沈静化していく。後にこの戦いをマカダの大奇襲と後世の歴史家は呼び、奇襲のやり方として戦術本に載ることになるのはまた後の話…

かくして心達デカルト砦奪還隊は大きな被害を出しながらもこの戦いを切り抜けることが出来た。

## 第二十三記 損害で得たもの

マカダ山岳での戦いの後、心達第10軍団は山を越えて辿り着いた平地に陣を構えていた。本当は山岳で犠牲者の回収をしたかったのだがあそこにいるとまた攻撃を食らう可能性があったので急いで移動したのだ。そして今、心は今後の進路をどうするか聞くために第5軍団の野営地前にきていた。

さてグラマ將軍は自分が来たと知ってどういう反応をするのか・・・心はグラマの事を考えて入るのを止めようとしたがそれでは次の行動に困る。

「何だ、私を笑いにきたのか？」

覚悟を決めて野営地に入ると自慢の剣と白銀の鎧を真っ赤に染めて座り込んでいるグラマ將軍がいた。グラマは心の姿を見ると自虐するようにそう言い放つ。

「いえ、グラマ將軍はりっぱに戦われました。グラマ將軍じゃなければ被害がもっと大きくなっていただでしょう。」

「下らない世辞はよせ。」

グラマは否定したが実際心は本当にそう思っていた。何せ結果としては大きな被害になったものの完全に不意をうたれた形になったにも関わらず心達が駆けつけるまで耐えたのだ。下手をすれば全滅もあり得た戦いでこれはグラマの指揮能力があつてこそその生き残りといえる。

「…かなり被害が出たな。」

「…そうですね。」

最初、心達を含めた3つの軍団をあわせて35000いた軍団は先ほどの強襲で半分近くの19000程度にまで減っていた。またグ  
ラム將軍の副官以下、多くの有能な軍人がその命を散らした。あの  
スパンダ將軍までも重症を負ったと聞いている。

「…心將軍。」

「何でしょうか？」

「ヴァーノ城での非礼は悪かった。そして…助けられて礼を言う。」

「グラマ將軍！？あ、頭をお上げください。」

突然立ち上がったグラマはそう言って深く礼をした。心としては驚  
きと自分はそんな礼をされる器ではないというハズカシさで慌てる  
ばかりだった。

「貴公は私が思うより遙かに勇敢で優れていた。それに私のせいで  
自らの部隊を危険に晒したのだ。礼をしなければ気がすまん。」

この言葉を聞いた心は少しグラマ將軍を見直した。ただエラそうに  
するだけの人かと思っただがどうやら筋は通す人らしい。

「味方なのでから助けるのは当たり前ですよ。それよりこれから  
の事を考えましょう。」

「そうなのだが…これだけの被害を受けたのならもうデカルト砦の攻略は無理だ。一度態勢を立て直す為にヴァーノ城まで戻ろうと思っっている。」

「しかし危険です。退路を待ち伏せされているかもしれません。」

確かに今の状況なら人数的にも士氣的にも砦を落とすなんてできないだろう。だが撤退するにしても先ほどの山の道で待ち伏せされていたのだ。他の道も待ち伏せされている可能性がある。

「じゃあどうするんだ？」

「これは危険な賭けですが…デカルト砦を落とします。それも短期に。」

「バカな！？無理だ。これだけの損害を受けた後でデカルトを攻略できるわけがない！」

グラマは即座に否定する。確かに重要拠点であるデカルト砦には敵もかなり兵力を集中させているだろう。もちろん落とすのも容易ではない。

「ですがやるしかありません。恐らく敵は砦から兵を裂いて各場所に兵を配置しています。ですからその分砦の兵力は少なくなっているでしょう。そこを一気に落とします。グラマ將軍もやられっぱなしでは性に合わないでしょう？」

「なるほどな。確かにやられっぱなしでは性に合わない。・・・よし、その掛けに乗るぞ！」

グラマが立ち上がり宣言する。その言葉を聞いて心はグラマ將軍が自分の言う事を聞いてくれるかどうか不安だったのでホッと胸を撫で下ろした。

「分かりました。では失礼します。」

「ちょっと待て。」

出ていこうとする心をグラマが呼び止める。心が振り向いた時、グラマは今まで心と会話したどんな時よりも真剣な顔をしていた。どうしたんだらう？

「私は貴公を信頼しているから言うておく。国内に裏切り者がいるかもしれない。気をつける。後、バーンのクズにこう伝える。貴様はクズでも宝石の中でのクズだと。」

「・・・ありがとうございます。では失礼します。」

そう早口で言った後もう何もいう事はないと言うかの様に後ろを向いた。心は少しした後にはグラマが自分を認めてもらえたということが分かってビシッと礼をした。そしてその顔には自然に笑顔が浮かんできていた。

恐らく今のグラマ將軍の顔は真っ赤だらう。戦場では大損害を受けたがそれでも得たものは大きいと心はこの時そう確かに感じる事ができたのだった。

しかしその頭の中ではしっかりと「裏切り者」という言葉を書き残すのを忘れなかった。

デカルト砦攻略戦開始まで後3日.....

## 第二十四記 ドラゴン

はるか彼方、ヴァーノ城からさらに南へいった場所。ヴァルハラに行く為の本道である三つの道のひとつ、ガイド街道でそれは起ころうとしていた。

「ゼスク将軍、攻撃準備が整いました。」

「ご苦労、引き続き警戒を怠るな。」

「はっ！」

「しかしやつらはバカだな。まさか我が軍の三分の一の兵でシズド城を落とそうなんてな。」

「おっしゃる通りです。」

ヴァルミアニア軍第2軍団指揮官であり今回の戦いの司令官を任されているゼスク・ヴォルマート上級将軍は報告しにきた副官に笑いながらそう言つと副官も同じように笑いながら返事を返した。（もちろん上官の前なので笑いは心の中でしたのだが）

現在、ガイド街道では二つの軍団が列を成してにらみ合っている。一つは反乱軍、そしてもう一つは・・・ほかでもないゼスクが率いる第2・第4・第7・第8軍団が集まっているヴァルミアニア軍である。数は反乱軍が三万五千、ヴァルミアニア軍が九万といった所か。

「でも彼らはどうしてシズド城を狙ったんでしょう？デカルト砦を落としたのならそこから攻撃すればいいのに……」

「やつらは我々貴族と違って大した学もない平民だからな。知識が足りないんだろう。」

白銀の鎧と金の短髪が日の光に照らされて淡く煌めく。ゼスクという男は自分が貴族という事に誇りを持っていた。そんな自意識過剰さからゼスクは自分の領地の平民に嫌われているがそんな事、平民をゴミと同じくらいにしか思っていないゼスクには全く関係がなかった。

「それより他の軍団のやつらは配置についているだろうか？」

「はい。サラサ上級將軍率いる第4軍団は右翼へ、ナバト上級將軍率いる第7軍団は左翼へ、ダジェル將軍率いる第8軍団は中心部に布陣を完了しております。」

「よし、サラサとナバトはともかくダジェルは役立たずだからな。今回の戦闘で死んでくれるとありがたいんだが・・・」

ゼスクの話を聞いていた副官はさすがにこの話を聞いて苦笑いした。「仮にも味方なのだからその言い草は・・・」と思っただがそれを口にする自分が殺されかねないので黙って話を聞き続ける。長い間ゼスクの副官をしてきて覚えた知識の一つだ。

「だがさすがにやつらもこの兵力差で攻撃する度胸も知恵もないか。ここは兵力があるこちらから攻撃するのが礼儀というものだろう・・・  
・攻撃を開始する！！」

「ははっ！！」

「暇だなあ……」

ヴァルミア本陣がそんな会話をしているにも関わらず、兵力が少ない側の反乱軍の本陣はノンビリしていた。そこで男のいかにも気だるそうな声が風に乗って聞こえる。

「そういうけどドラゴン、本当に勝てるの？リーダーであるあなたを疑うわけじゃないけど向こうはこっちの三倍以上の兵力よ？」

「だが勝算がないわけじゃないさ。とりあえずカルナ、そのドラゴンって言うのをやめろ。」

「え〜！いいじゃない。カッコいいんだし。」

ドラゴンと呼ばれた金色の髪の毛の男が脇にいる少女に言い返す。その少女、カルナは膨れっ面の男の頭を撫でながら笑う。雲一つ無い大空のような長いスカイブルーの髪が風で男の顔をくすぐっていた。

「そうですよ？これもあなたの正体を隠すためです。」

「デイザイル、分かっているさ。」

その後ろから、緑の髪の毛のスラッとした男がさらに言い返そうとした男の言葉に被せて喋る。

「しかし確かにデカルト砦からいかず、わざわざシズド城の方を選んだか…私も聞かせて欲しいですね。」

反乱軍の中心人物であるディザイルはメガネと呼ばれたアクセサリを指で上げながら男に聞く。本人に言わすとこれはアクセサリではないそうだがそんな事は今はどうでもいい。

「まあそれはこの戦いに勝ったら話すさ。」

「全く、あなたはいつも何かを隠してますね。」

「そこに惹かれたんだろ？」

「…まあそうですね。」

男二人が静かに笑う。カルナは取り残された感があるせいか頬を膨らませてジトツつと二人を見ていた。

「まあ少しだけ話すとな。デカルト砦方面には第10軍団がいる。」

「第10軍団……ですか？あのグダンとナーデルを破った？」

「そうだ。反乱軍に相応しくない傭兵集団を集めた軍団が…まさか兵力だけがあったあのグダン將軍を破るなんて中々の実力者じゃないか。…まあ予想はしてたがな。」

最後の男の声は消えるように言った為、誰にも聞こえなかった。

「でも…！偶然じゃない？」

男達の話に入れず、不満顔をしていたカルナがここでようやく私も

入れてという風に脇から言葉を挟む。

「さあな、運が良かっただけかもしれないが…警戒するに越したことはないぜ。それに…アイツは必ず近い内に頭角を表す。」

「それはドラゴンの勘ですか？」

「違う。」

「では何なのですか？」

男の口の端が微かに上がる。それは自分の意思で出たものでもなくまた自嘲の為に出たものでもない…

「ドラゴン様！国軍が動きだしました！！」

反乱軍の伝令役と思われる皮鎧の兵士が本陣に入ってきた。ドラゴンと呼ばれた男はその報告を聞いて歩き出す。

笑みの意味は本能。生きているもの全てがもつモノ。

強者が育ち、自分とソイツが戦うその日まで恐らくそう遠くはないだろう。できれば味方であって欲しいものだが…

「とりあえず今は目の前の戦いに集中ですね。」

「じゃあ私は行ってくるね！じゃあまた後でね、ドラゴン。」

「だからドラゴンって言うなよ…」

整備された道に風が通ってゆく。そこで男は伝令役の兵士に振り向いた。自らの名前を言う為に。

「オレは怒龍カイだ。」

お前はそんな所で燻ぶってるヤツじゃない。そうだろう？桐生、心。

今、もう一つの大きな戦いが幕を開けようとしていた………

## 第二十五記 開戦

「將軍、見えました。」

「……とうとう着いたか。でかいな……」

マカダ山岳を越えてから心達はデカルト砦のあるテムール地方にたどり着いた。荒地が多いこの地方では狩りや城壁などに使う石を掘って生計を立てている人が多い。

心とロイ、二人の將軍はデカルト砦の大きさに思わず口数が少なくなってしまうた。それは砦という大きさではない。内と外で二枚に分けてたたずむ巨大な城壁に堅牢そうな城門。ところどころの壁に残っている傷跡はこの城で戦ってきた歴史を物語っている。

デカルト砦……首都、ヴァルハラへと続く道を守る三つの城の一つである。このほかにシズド城、アルテマ城がある。何故このデカルト砦だけ城ではなく砦といわれているのか……血地戦争が関わっているらしいのだが心も詳しくは知らない。いつそのことデカルト城に改名したほうがいいのではないのだろうか？

「こんなの本当に落とせるんですかね？」

「さあな、どちらにしろここまできたらもうオレ達には選択権は無いんだ。」

「そうですね。」

ロイが遠い目をしながら前方に広がるデカルト砦の光景を見つめる。

広がる荒地とその中心に建つ巨大な城：これが戦いの前で無かったらさぞ爽快な景色になったことだろう。

「心將軍、ありがとうございます。」

「いきなり何だ？まあどういたしまして。」

不意にロイは心にお礼を言った。心はなぜお礼を言われたのか分からなかったが一応礼儀として言葉を返す。

「私は最初、この軍団に配属された時もう自分は役立たずだからクレス上級將軍に捨てられたのだと思っていました。ですがそれは違った・・・私はこの第10軍団に配属されて今まで戦えた事を誇りに思います。」

「おいおいそんな戦死しにくみみたいに言つなよ。この戦いで生き残つてまた一緒に酒を飲もう。」

「そうですね。失礼しました。」

「準備は整っているようだな。」

そう言つて二人は笑いあふ。そこで後ろから先頭の第10軍団に付いてきた第5軍団のグラマ將軍が話しかけてきた。その顔は少し前までのやつれた顔とは違って生気が溢れている。

「グラマ將軍こそ大丈夫ですか？」

「フンッ、私をそこらの一般兵と一緒にしてもらつては困る。準備などとうにできている。」

グラマはいつも通りの偉そうな態度で心に言った。後ろを見るとすでに第5・第10軍団連合の攻撃準備はほぼ整っている様だった。ちなみにジェリク將軍の第6軍団はジェリク將軍が重症を負った事と三つの軍団の中で特に損害が大きかった為先に本国に報告も兼ねて攻城兵器を担当している部隊以外は退却してもらった。

「後は攻撃をいつするかですが…もちろん準備が整いしただ。」

「今回はそれがいいでしょうね。」

ロイの言葉にグラマ將軍が素早く返す。血気盛んなグラマ將軍らしい作戦だ。心もそれに賛成の声を上げる。一見無謀に思えるが今回の戦いはどれだけ早く砦を落とせるかにかかっている。

本来ならば物資の多いこちらが兵糧攻めに持ち込めばいいのだがマカダ山岳で襲撃してきたあの軍団が戻れば城と外から挟み撃ちに合ってしまう。そうなればただでさえ大ダメージを受けたこの軍団は間違いなく壊滅するだろう。つまり、もう時間が無いのだ。

「分かりました。では準備が完全に完了せしだい攻撃に移ります。」

「では私も軍団に戻ろう。」

ロイが指示をするために立ち去り、またグラマ將軍も自分の軍団の指揮をするために戻った。この戦いは今までで一番激しい戦いになるだろう。もしかしたら全員生きて帰ってこれないかもしれない。いやその可能性の方が高いだろう。だが…



叫んだ。その声で弓兵の手から火矢が離れ、デカルト砦の上に降り注ぐ。そしてまた大きく息を吸い腹の底から力を出すように声を出す。

「全軍、攻撃開始——！！！」

心の命令によつて後に悲しみと苦しみを負うことになるデカルト攻城戦が今、その火蓋が落とされた。

## 第二十六記 剣と少女

「シャード、シャードはどこだ!？」

デカルト砦の頂上付近、いかにも重そうな重鎧を身に着けたひげ面の男がランプがいくつも並ぶその廊下を怒鳴り声を上げながら急ぎ足で歩いていた。鋼と鋼がぶつかって鈍い音が何度も起きる。額には横一直線に傷跡がありそれが彼の素から出ている威圧感を倍増させていた。

「はい、ここにいます。」

すると男の後ろからシャードと呼ばれたあの黒装備の男が現れた。どうやら心達とこの男はよくよく出会う運命にあるらしい。

「国軍がこの砦を攻撃してきたぞ!」

「確認しております。」

「貴様：国軍はマカダ山岳で大損害をこうむったから攻撃してこないのではなかったのか!？」

「すみませんバルザ將軍。どうやら強行進軍でいったよですね。」

「すみませんだと・・・?お前の言った通り国軍の退路を断つために兵を分散した事で今この砦は手薄になっているのだぞ。それを貴様：すみませんだけで済む問題か!！」

バルザと呼ばれたひげ面の男はシャードに怒鳴り散らす。シャード

はそんな鬼の叫びのような怒声を受けても平然としていた。そして静かな、なのによく通る声で話し始める。

「將軍、落ち着いてください。奴らは大損害を受けた上での強行進軍です。ですから勝ち目は十分にありませんよ。」

「当たり前だ。この長年ムガダ様の副官をしてきたワシが守っているこの城がそう簡単に落ちるか！貴様は退路を断っていた軍勢を呼び戻してこい！」

「了解いたしました。では…」

シャードは一度礼をするとすぐにスウツと消えてしまった。まるで光を失った影のように音もなくその姿を眩ました。

「・・・チツ、全く不気味な男だ。」

バルザはシャードが消えるとまた早歩きで進む。あのシャードと呼ばれる男はどうも気に入らない。ドラゴン様にどうやって取り入ったか知らないがいきなり現れては反乱軍の裏で動いているのだ。怪しくて仕方が無い。

しかし確かにヤツの言った通り敵は消耗している。ここで籠城すればいずれ退路を断っていた部隊が戻り我らの勝ちとなるだろう。

「バルザおじさま！」

バルザが一人、考えていると前から一人の少女が走ってきた。年は16・17といったところか…その少女が皮鎧に長剣というまるで今にも戦いに行くような格好でバルザの前でストップする。

「おお…とク、クリス様!？」

「どうしたの？」

「どうしたの？ではありません！なぜそのような格好をしているのですか!？」

バルザがクリスと呼ばれた少女の格好をみて叫ぶ。その姿はさっきまでシャードを怒鳴り散らしていた姿ではなくどちらかというと父親の様な光景だった。

「なぜって…私も戦うから。」

「なりません!！」

クリスの言葉をバルザは即座に切り捨てる。何が起きるか分からない危険な戦場にまだ年若い少女を連れて行くわけにはいかない。

「どうして!？私も戦えるわ!！」

「ダメです!ドラゴン様の妹であるアナタ様を戦場にお連れするわけにはいきません。しばらく部屋でジツとしててください。」

「イヤよ。ナーデルを殺した国軍を私は許さないわ!！」

「クリス様!とにかく戦場にお連れするわけにはいかないのです。おい、誰かいないか!？」

バルザが叫ぶと近くの何人かの兵士が大慌てでやってくる。バルザは呼ばれたらすぐに来いといつも兵士達に指導していたからだ。ち

なみに遅れると大の大人が本気で泣きそうになるぐらいの威力のゲンコツが振り下ろされる。

「クリス様を部屋にお連れしろ。そして戦いが終わるまで見張っているんだ。」

「ちょっと、離しなさい！」

兵士二人がクリスの両脇に立つとその腕を持ち上げて連れて行く。クリスは逃れようとバタバタと暴れるが所詮は女性と男性、しかも訓練を受けた兵士である男性二人相手だ。悪あがきも虚しくクリスは城の奥へ連れて行かれることとなった。

「…ふう。」

バルザはその姿を見届けるとため息を吐く。全くクリス様にも困ったものだ。戦場に行きたいなどと、まあ行く理由は分からなくも無いが…

ナーデル……………

心半ばに死んだ元自分の部下を思い浮かべる。確か第10軍団に討たれたと聞いているがその真相は定かではない。何せ帰ってくる兵士がほとんどいなかったのだ。バルザ自身も運よく難を逃れた兵士から聞いたただけなのだから詳しくは分からない。

「バルザ副将軍、指揮をお願いします！」

「……………うむ。」

地方防衛軍からの戦友である兵士がバルザに声をかける。それに応えながらバルザは城の指揮所へと向かった。

「ちょっと離して、離してよ！キャツ！？」

暴れていたクリスはしばらく兵士二人に持ち上げられていると奥の小さな部屋に連れてこられ、そこで下ろされた。いきなり下ろされた為に小さく悲鳴を上げてしまう。

「すみませんクリス様…なにぶん副将軍のご命令ですので、この部屋でしばらくおとなしくしててください。では……」

そう言つて兵士二人は扉を閉める。ガチャリという音と共に兵士は部屋の外で何かを話すと足音と一緒に遠ざかっていった。

全く私をこんな狭い部屋に閉じ込めるなんて！

クリスは一人で怒りながらドアのノブを捻る。予想通りどうやら鍵をかけられてしまったようだ。周りを見渡す。窓も無い。どうやらここは倉庫のような場所なようだ。

「見てなさいよ…絶対にこの部屋から出て戦場に出てやる……」

腰から剣を抜く。そしてそれを見たクリスの目の中を光がぎらついた。その目の光は平和への希望でもなくまた自分もバルザの力になりたいという勇気でもない。では何なのか？

「ナーデル……」

かつての愛する者の名を呼びながら少女は剣を見る。そしてその剣を両手で上に掲げるとある想いを込めながらクリスは剣を床に突き立てたのだった……

## 第二十七記 指揮官の役割

「ハシゴをかける！城壁をよじ登るんだ！」

「城門付近にいる破城槌を持っていて部隊を狙え！敵に第一城壁を越えさせるな！！」

「ウグアアアア！？」

本来ならば動物は寝ている時間、鳥さえも羽ばたかないその時間でデカルト砦では所々から大きな声が響き渡っていた。敵味方の声が入り混じり、あちらこちらから悲鳴や怒声が聞こえる。デカルト砦への攻撃開始からすでに1時間が経っていた。

「クソツ…やっぱり首都を守ってる三大城の一つだけあるな。中々超えられない・・・」

ヴァルミア軍の本陣で心の横にいるグラマが苦々しげに呟く。確かにこれはマズイと心も思った。予定ではすでに第一城壁を突破して第二城壁へと攻撃を開始してはなくてはならない。それなのに突破はおろかまだ城壁さえはしごで越えられた者は少ないのだ。

「投石器さえあればいいんですが・・・」

右斜め後ろにいるロイもグラマと同じ苦々しそうな顔で話に加わる。本国からはデカルト砦は後で使うからあまり傷つけるなという命令を第5・6軍団は受けていたらしく反乱軍をナメていたのもあって最低限の攻城装備しか用意していなかったのだ。

全く馬鹿げた話だと心は思う。そもそもデカルト砦を落とされた時点で反乱軍が自分たちにとってかなりの脅威になっている事は予想

できたはずだ。まあそんな事を今更言っても始まらないが……

「將軍さんよお！」

その時、体が血にまみれているバーンが戻ってきた。息を切らしている所を見ると城壁付近は相当の激戦らしい。そのバーンが疲れた顔で自分に声を掛けてくる。

「このままじゃ埒があかないぜ。どうにかしてあの城門開けないとこちらがやられる。」

確かにバーンの言うとおりだ。門を壊す役割である破城槌の部隊も城壁の上からの激しい攻撃に成果は上がっていないようだし何より第一城門すら突破できないとこちらの士気に関わる。

「どこかに裏道はないのか？」

「將軍…一つだけ策があります。」

「うおっ！？…なんだネウロか。」

悩んでいると気配がなかった心の後ろに突然工作隊のナイツであるネウロが現れた。突然の出現に心以下、グラマやロイなど他の奴らも驚く。こいつそういえばいたな…いつも影薄いから分からなかった。

「で、策とはなんだ？」

そんなヒドイ事を考えているとグラマがネウロにそう聞いた。確かに策があると言っていたな……

「はい、自分の部隊がこのデカルト砦の周りを調べた所の数箇所に城門の向こうへと通じる穴がある事が分かりました。残念ながら第一城壁までしか繋がっていませんがそこを通ればもしかすると・・・」

「城門を開ける事が可能・・・か。」

グラマがネウロの言葉を引き継ぐ。見ない間にそんな事をしていたのか、さすが工作隊のナイツだな。

「ですが一つ問題が・・・」

「何だ？」

「穴が狭いため行けるのは数人かと、さらに恐らく相手の追っ手が来ないようにする為でしょうが続けて大勢で行くと振動で上が落盤するように作られています。」

珍しく饒舌にネウロは喋る。なんて凝った仕掛けだ。恐らく血地戦争からの遺物だからなのだろうがそれにしても凝りすぎていないか？だが余裕が無いのも事実だ。ここは仕方ないだろう。

「よし、バーンとオレと兵士数人で行こう。ロイ、指揮は頼む。」

「ダメです。將軍をそんな危険な場所へは行かせられません。私が行きます。」

「いやだが「あなたはここの指揮官なのですよ？」ぐっ・・・」

「確かに私も同感だ。お前はもうこの軍団全体の指揮官なのだから。私も行こう。奴らには借りがあるからな。」

ロイの言葉に心は何も言えなくなる。確かに自分が殺されたらこの戦いは負ける。正論なので言い返せない。しかもグラマ將軍までも言われてはもう何も言い様がないのだ。

「決まりだな。じゃあ將軍さんよお、後は任したぜ！おら、お前らついて来い！！」

「朗報を期待しててください。」

「ではこちらです。」

バーンは近くの屈強な兵士数人を連れてロイ、そしてグラマと共にネウロについて行く。さてオレも頑張らなきゃな。

「全軍、攻撃の手を緩めるな！この戦いに勝たないとオレ達に未来は無い！」

心は周りの兵士に喝を入れる。もう自分達の退路は断たれているのだ。もしここで負けたら待っているのは死。だからこそ戦況を変える為に自分が行こうとしたのだが・・・

「全くあいつらは。」

ネウロについていったバーンとロイと…後グラマ將軍もか、を思い浮かべる。グラマ將軍に関してはあの人があそこまで素直にオレに従うなんてなあ。数日前からでは考えられない事だ。

「將軍、右翼方面の味方が城壁を上りきったそうです。そこから続々と味方が上つていきます！」

「よし、そこから一気に城壁の上の敵を叩け！城門が開いたら一斉攻撃を仕掛けるぞ！」

「ハッ！」

この策が吉と出るか凶と出るか…とりあえずオレはあいつらの仕事を少しでも達成しやすくしよう。それがオレの…指揮官である自分の役目だ。

心は指揮官という自分の役割を再認識してこの戦の行く末を見守りながら周りに指示を出し続けた…

## 第二十八記 バルザの力

「ほお…？こんな所よく見つけたな。」

「確かにここならバレずに中に侵入できるな。」

ヘテロの案内でバーン達は近くの洞穴に来ていた。それは人の手でかなり早急に掘られた穴のようであちらこちらがデコボコで補修もしていなく、今にも崩れてしまいそうな穴だった。

「本当に大丈夫なんでしょうね？入った瞬間に崩れて生き埋めとか洒落にもなりませんよ。」

「大丈夫です。恐らく走らなければ崩れないと思いますから…」  
「思いますって適当だな。」

あまりにも崩れそうなのでロイが不安げに聞くがネウロはそれを淡々と否定する。グラマもネウロの言葉を聞いて少しばかり不安になったようだ。

「まあ今更そんな事言っても仕方ねえよ。もう他の穴に兵士達を行かせつちまったんだ。腹決めねえとな。」

「当たり前ですよ。ここまで来て辞められません。」

「同感だ。クズでも時々良い事を言うな。」

「どうも。んじゃあ行きますかね。」

そして4人は洞穴へと入っていった。洞穴の中は暗かったがカンテラを使って何とか進んでいた。所々の足下にある大きな岩に何回か躓きそうだったがこれはまああの洞穴の様子からして予想内だ。

「しかし長いな。」

「ていうか何で第一城壁までしか繋がってないんでしょうね？」

「そんなもの知らん。だが使えるものは使わないとな。そろそろ出口のようだぞ。」

グラマの言うとおりで今まで暗闇だけだった道先に光がこぼれていた。小さくだが声も聞こえる。出口は近いという事だろう。だがこの洞穴を抜ければ待っているのは戦いの道なのだ。悲鳴、剣音、怒号など抜けた瞬間にそこは阿鼻叫喚の地獄絵図になるだろう。

その場にいる全員がその事を思っているのか四人の歩みが一気に遅くなった。だがここで止まってもいられない。時間が経てば被害がどんどん大きくなるのだ。早くこの戦いにケリをつけなければならぬ。光はもうすぐ目の前だ。そして洞穴から抜けた。その目の前に広がっていたのは・・・？

「敵が中に入ってきたぞ！？」

「何で敵がここに！？城門はまだ破られてないぞ！？」

「そんな事はどうだっていい！城門を死守しろ！！」

「こりゃドンピシャだな。」

バーンが出た先、そこは第一城壁の中にある草むらの中だった。他の兵士がすでに攻撃を開始しているのか城壁の中は慌ただしくなっている。

「私たちもウカウカしてられませんね。」

「この前の奇襲の借りを返してくれる！！」

ロイとグラマは先に行ってしまった。ヤレヤレ、少しはゆっくり行

くという事をすりゃあいいのに・・・  
そう思いつつバーンも自らの大剣を持って戦場へとまた戻るのが  
た。

「將軍！城門が開きました！！」

「何っ本当か！？」

本陣で指揮をしていた心は城門を見る。大人5人分くらいの背丈があるその大きな城門がゆつくりと、しかし確実に開いていた。その開いた城門を味方が次々と通過していく。すかさず心は味方に指示を出した。

「バーン達が開けてくれた道を無駄にするな！全軍総攻撃をかける  
！！」

「！！はっ！！！！」

よし、これで敵は浮き足立つだろう。これで勝つ可能性はグッと上がった。それに打てる手は全て打った。後はバーン達の訃報を待つのみだ。

心は戦いの中で少しだけ勝利の確信をしていた。だが彼は知らない。この後起こる悲劇と…そして結末に。さて話はバーン達に戻る。彼らは第一城壁で獅子奮迅の活躍を見せていた。

「どいてくださいー！」

「ゲアアアツ！？」

敵味方が入り乱れる中でロイは一人、時には二人を切り捨てながら第二城壁を目指す。城門を開放した後、周りの敵兵は逃げ腰になり

始めてから一人が第二城壁へと逃げ出すと皆が一斉に逃げ出し始めた。それを追いかける味方、逃げる敵：戦いは完全にこちら優勢に傾いている。

勝てる！

剣を振るう中でロイはそう確信していた。破城槌の部隊もじきに第二城門を突破するだろう。後は残った敵を倒すのみ。ここでロイの前に重装備の大柄で顔に傷のある男が現れた。手には自分の背丈ぐらゐの長さがある三つ又槍を持っている。この威圧感……

「あなたがここの指揮官ですか？」

「そつだ。お前もそこそこの名のある人物と見える。ぜひお手合わせ願おう。」

そう言つて男は三つ又槍を両手で構える。その姿はまさに指揮官に相応しく堂々とした物言いだつた。顔の傷は彼が幾多もの戦場を経験してきた証だろう。ロイも自分の得物である長剣を構える。

「ヴァルミニア第10軍団副司令官、ロイ・アルベルト。手合わせをお願いします。」

「ウム、デカルト守備司令官でありムガダ將軍貴下地方防衛軍副司令官、バルザ・ガルタニア。いざ参る。」

ギガンツ！！

そこで二人の武將はぶつかり合つた。斬撃の音が響く。バルザはその大柄な見た目の通り力で攻撃を仕掛けていた。長く、鋭い槍の撃がロイを襲つ。対するロイはそれを受けることはせず避けに徹した。

避けられない攻撃は長剣で流し、相手の隙を探す。

「小僧、中々やるな!!」

「それはありがとございます。」

「だがそれだけではワシには勝てん! ムウンツ!？」

バルザは槍を縦に振るう。その勢いはまともに受けてしまえば手が痺れて剣を落としてしまうだろう。だからロイは・・・

「そんな大振りでは当たりませんよ!!」

横に避けた。突き刺さった刃が地面を少し削る。これで相手は大きな隙をロイの目の前に見せる事となった。これを見逃さない手はない。すかさず距離を詰めて剣を横なぎに振るった。だがそれは甘かった事を次の瞬間教えられた。

「甘いわあッ!!」

「グハッ!？」

なんとバルザは槍の逆、柄の部分でおもいきりロイの横ツ腹を殴ったのだ。予想もしていなかった攻撃にロイの態勢が崩れる。そこを躊躇わずバルザは槍を振り上げた。三つ一对の刃が迫る。避けられな・・・!？

「アグアッ!？」

「ロイツ!？」

「止めだ!!」

バーンが叫ぶ。ロイの腹が下から上へと刃に切り裂かれる。腹からは止め処なく血が流れ膝を足につけてしまっていた。バルザが止めを刺そうとしたその時に誰かがロイを抱えていった。

「バーン、一度引くぞ!!」

それはグラマだった。彼は傷を負ったロイを持ち上げて第一城壁の方へと走っていく。バーンは周りを見渡した。ロイがやられる現場を見たからかはたまたあのバルザとかいう男が出てきたからか敵の指揮が上がり今度は味方を押し始めていた。バーンは決断する。

「お前ら引けー!撤退だー!」

大声で叫んだと同時にバーンもグラマを追って第一城壁の方へと走る。走っている中でもその心は後悔しか生まれてこなかった。勝てた。勝てた戦いだった。あの男が出てくるもう少し前に第二城壁を突破していれば自分達は確実に勝っていた。

「敵が引いていくぞー!!」

「ウオオオオオオ!!」

敵が後ろで勝ちどきを上げる声が聞こえる。こうして一回目のデカルト砦攻防戦は心達第10軍団の敗北という形で終わるといふ最悪の結果となってしまうた……

## 第二十九記 敗戦の後の選択

「……………」  
「……………」

デカルト砦から南へいった森の中、心達デカルト砦攻略隊はそこで野営をしていた。一昨日まで騒ぎまくっていた状態はどこへいったやら今は恐ろしいぐらいに軍団内は静まり返っていた。

「……………」

「……………あー暗い!!」

今は軍団会議中、心やバーン、グラマも参加しているがそこでも皆黙ったままで何も喋らない。だがとうとうその沈黙に耐えられなくなったキースが立ち上がって叫んだ。

「もつと明るく行こうぜ!?一度くらいの失敗が何だよ!」

キースが熱弁を振るうも静まり返った会議内ではそれも空回りするばかり。いつもなら誰彼が反応するだろうが今回は誰も反応する…いや反応できなかった。キースもそれを見て気まずそうな顔をしながらまた黙った。

「確かに黙っていても仕方ねえな。それでこれからどうするんだ?」

「とりあえず軍団を立て直そう。まずはそれからだ。」

「立て直すってどうやってだ?」

グラマが話をきりだし、心が答えるとそれにまたグラマが問いを出す。確かに昨日の攻撃で軍団の被害は尋常じゃない。立て直すとし

てもすぐとはいかないだろう。

「すでに軍団の戦死者が二割、重傷者も合わせてともに戦えるのは全体の五割に加えて副官であるアルベルト將軍の重傷。さらに敗戦での兵の士気の低下。ここは悔しいが撤退するしか方法が無いと思う。」

「アンタには珍しく弱気な発言だな。猪突猛進野郎だと思っていたが。」

「これでも一つの軍団の司令官の端くれ、引き際は分かっているつもりだ。」

バーンの皮肉にグラマは平坦と返す。だが拳を震わせているのを見てバーンはこれ以上何も言わなかった。

「けど後ろには奇襲を仕掛けてきた部隊がきてるんやろ？戻ったらさらに被害が増えるんちゃうか？」

「だがこのまま攻撃しても全滅するだけだ。ならそちらに攻撃をしかけて一か八かの撤退戦に出るのも悪くないと思う。」

「だけどそれでも被害はバカにならないだろ？一か八かなら第一城壁を突破している皆の方を先に攻撃した方が確率が高くないか？」

会議で皆があーだこーだと論議を繰り返す。だが今まで黙っていたネウ口の次の一言で全員が黙った。

「…將軍に決めさせればいいのか？」

その一言で会議室にいる者全員が心を見た。正直怖いと思ったのは心の内の話だ。そして現在の状況を考えて悪いなりに最適の選択をしなくてはならない。心は目を瞑って考える。

ここで撤退するかさらに大きな犠牲覚悟で攻撃するか・・・？  
やがて心は目を開ける。誰かがゴクリと唾を飲む音が聞こえた。

「・・・デカルト砦を落とす。」

この言葉に全員が立ち上がった。それはそうだろう。今の言葉は安易に死ぬと言ってるようなものだ。だが撤退戦で被害を出すよりデカルト砦を落とした方が被害は少ない。そう考えたのだ。自分でも可能性の話なので何かしらの暴言がくることは覚悟している。心は次にくる皆からのキツイ一言待ちわびた。

「そこなくちゃな！お前ら、今すぐ出陣準備するぞ！！」

「まあやらねばなしはやっぱりダメよねえ。」

「急がな敵が来てしまうぞ！！」

だがきた言葉は心が思っていたのと全然違う言葉だった。バーン達は慌てて外へ出る。ネウロ静かに外へと歩いていくがその顔は笑っていた。後に残るは心とグラマのみ。

「グラマ将はいいんですか？」

「何をだ？」

「何をつてグラマ將軍は撤退を考えていたんでしょう？」

「昨日も言ったが今はお前がこの軍団の指揮官だ。上官の命令なら

ばオレは従ざるを得まい。それに…貴様ならばそう言うと思つていた。」

そう言い捨てるとグラマもさっさと外へと出てしまった。指揮官・  
・ほんとうにオレにそんな資格があるのだろうか？戦いには負け、  
戦死者もかなり出した。そんなオレが本当に指揮官でいいのだろうか？

心にモヤモヤを抱えながら自分も準備をするために外へと出た。

「勝った！？それは本当なの！？」

デカルト砦の小さな部屋、そこで兵士とクリスが会話をしていた。  
クリスの方はすごい剣幕で前にいる兵士に話しかけている。

「はい、副将軍が相手の副官に重傷を与えた事で敵は撤退しました。」

「それで！討ち取ったの！？」

「いえ、ギリギリで逃げられたそうです。」

私はこれを聞いて討ち漏らした事に少しイラッとした反面に胸の内ではホッとしていた。それが何なのかは分からないがとりあえずまだ自分にも敵討ちはできるという事だ。

「それでクリス様にはこの砦からドラゴン様のいる地方へ移動してもらいます。」

「えっ？何言ってるのよ。」

意味が分からない。勝ったのになぜここから移動しなくてはならないのか。ここにいた方が安全は高いだろうに……

「もしもう一度攻撃がきた時にはさすがにこの砦も持たないかもしれないので……」

「一度撃退したんでしょ？なら来ないわよ。それにもし来たとしてもバルザおじ様がやられるわけないじゃない。ベンもおじさまの強さを知っているでしょう？」

クリスはバルザに槍術の稽古も時折受けていたのだ。その強さはクリスが一番よく知っている。それでもベンと呼ばれた兵士は食い下がった。

「それは分かっています。ですからもしもの事を考えて「もしもなんてないわよ！それにもしバルザおじ様が敗れたとしても私が仇をとるわ！！」」

「クリス様、無茶はお止め下さい！？」

「うるさいわね〜もしもの話よ。もうこの話はおしまい！ほら、さつさと持ち場に戻って！」

「いやしかし「いいから戻る！」はいい！……」

ベンはクリスの大声に逃げるように部屋を出る。クリスはそれを見届けると力尽きたかの様に近くにあったベッドに倒れた。

「まさかおじ様までやられたりしないよね……？」

先ほどは見せなかった心の不安を口に出す。やはりクリスも年頃の女性ということだろうか。強がっていても不安というものはあるものなのだ。しかしそんな自分の気持ちをクリスは自分で頭から振り払う。こんなのは私らしくない。

「そうよね。バルザおじ様が負けるわけないわよね。」

ウオオオオオオオオ!!!

「クリス様!!!」

「な、何よ?いきなり部屋に入ってこないでよ!??」

クリスが思い直したその時、外で怒声にも似た大きな人の声が響いた。と同時にベンが焦った顔で部屋に入ってきた。ノックぐらいはしなさいよ……

「そんな場合ではありません!国軍が再度攻撃を仕掛けてきました。クリス様は鍵を閉めてこの部屋から出ないでください!!!」

「もう来たの!?!撤退から七時間ぐらいしか経ってないじゃない!」

「それでも来てしまったのです!いいですか?絶対にこの部屋から出ないでくださいよ!」

そう言い捨ててベンは部屋を出て行った。急いで私も部屋に鍵をかける。まさかもう来るなんて……早すぎる。神様:どうかバルザおじ様を守ってください……

クリスは剣を両手で握り、強くそう願った。彼女の願いは届くのか。

それは少女の握る剣しか知らない・・・そして二回目のデカルト攻城戦が始まった。

### 第三十記 少女の涙

「攻撃開始！城門を突破しろおおお！！」

「ウオオオオオオオ！！！！」

「全部隊怯むな！一度敗走した国軍など恐るるに足らんわー！！」

「ワアアアアアア！！！！」

バルザ率いるデカルト守備兵と心率いるデカルト攻略兵が再度激突した。第二城壁で昨日よりさらに激しい怒号、悲鳴、金属の音がする。その中でバルザは苦虫を潰したような顔をしていた。

「クソツ…いくらなんでも早すぎる。」

「敵の態勢の整えの早さも見事ですがそれを可能にした兵士もまた、見事ですな。」

「そんなのは分かっておる。だがここは絶対に落とさせん！！ワシが出る！」

ロイを切り裂いた三つ又槍を持って外へ向かうバルザ、最初の戦いでは敵の大將を止めを刺すには至らなかつたものの重傷に追いやって勝った。次も大將格を倒せば今度こそ完全に撤退するだろう。そう読んでいたからだ。そして彼はそれをやってのける自信もまた、実力もあつたのだ。

「今度こそ完膚なきまでに潰してくれらわ…」

その時のバルザの目はすでに獲物に飢えた。獣の目をしていた…

「オラアッ!!」  
「ギャブツ!?!」

バーンは目の前の敵をろくに行動もさせず一瞬で切り裂く。周りを見る限り、とりあえず不意はつけたようだった。敵はまさかこんな早くに再攻撃がくるとは思ってたようだった。完全に動揺してしまっている。このままいけば楽に砦を落とせそうだった。しかし・・・

「まだアイツが出てきてねえ・・・」

ロイに瀕死の怪我を負わせた敵、今の状況は最初の奇襲を成功させた時と似ている。ならばヤツは十中八九また大将格を狙いにくるだろう。その時は・・・

バーンの大剣を持つ両手に力が籠る。

「ウオリヤアアア!!」

その時、第二城門の城壁から一人の大男が降って来た。三つ又槍に顔に傷、間違いない、ヤツだ!?

「国軍の大将、ワシと勝負しろおお!!」  
「オレが相手「私が相手だ!」んなつ!?!」

バーンが手合わせを願おうとするといつの間にかすぐ横にいたグラマがバーンの言葉を遮ってバルザに手合わせを申し込んだ。

「バーン、悪いがヤツは私が倒す。・・・私の兵士達の仇を取りたいからな。」

「…ヘッ、絶対勝ってこいよ。」

「・・・フンツ、クズに心配される程落ちてはおらぬな。貴様こそ

雑兵などにやられるなよ？」

「オレがやられるわけないだろ！」

バーンはグラマの最初の言葉に反論しそうになったがその次の言葉と、その真剣な表情を見て頭が冷えた。そして二人は少しの言葉を交わすと二手に別れる。グラマはバルザと一騎打ちを、バーンは邪魔者が入らないように他の兵士の相手をする為に……

「貴様が大将か？」

「そうだ。私はヴァルミア軍第5軍団団長、グラマ・ジユペール。」

「貴様があの有名なブラチナ白銀の獅子ライアンか。相手に不足無しだ。デカルト守備司令官、ならびにムガダ將軍貴下地方防衛軍副司令官、バルザ・ガルタニア……いざ勝負！」

二人の武器がぶつかり……いやグラマは上段蹴りを放った。意表をつかれたバルザだがそこは長年の戦いを生き抜いた感というものであるのか？反射的に槍を寄せて蹴りを止める。しかし間髪入れずにグラマは今度は後ろ回し蹴りを放った。

「ぬおっ!？」

グラマの蹴りがバルザのわき腹に直撃する。たまらずバルザは距離をとった。直撃はしたが重装備のおかげであまりダメージは無いようだった。グラマはそこで初めて剣を構えた。

「戦場での戦いが武器同士だけだと思っなよ？」

「……クククツクスしぶりに歯ごたえのある相手が来たわ。」

笑いあう二人、そこにはあるのは喜びだった。強者と戦える事の喜

び、武人として生き延びた事であった本能、そして二人は今度こそお互いの武器をぶつけ合った。

戦いはまさに一進一退の展開だった。グラマは自分の剣に相手の槍を絡めようとし、バルザはそれを力で抑えながらグラマの体に突き刺そうと槍を振るう。まるで決して終わることの無い、まさに永遠のように見えるこの戦いに双方の兵士達も勇気付けられ、戦いは第二城門前は激しい乱戦となった。

この永遠を変えたのはバルザの方だった。バルザは槍を高く掲げるとものすごいスピードで縦に槍を振るう。ロイに勝利した時にも見せた、バルザ必殺の技だった。だが今の相手はロイではない。ロイはあの時避けたが……

「ウゲンヌツ!?」

「ホウツ。」

グラマはそれを剣で受けたのだ。ありえない威力とスピードにグラマの足が少し土に沈む。

「この一撃を受けるとは見事。しかしこれで終わりだ!」

バルザは槍の柄の部分返してグラマのわき腹目掛けて振るう。これで勝負がついた。ついた筈だった。

そこにガギツ!?という鈍い音が聞こえなければ。

「ナニツ!?」

「私の剣が特殊だという事を忘れちゃあいけないな。」

バルザの柄をグラマは剣のギザギザの隙間の部分で受け止めたのだ。隙間に柄がガツチリと入り、バルザの力を持ってしても抜けない。

「見事なり・・・」

「私の勝ちだ。」

グラマが剣をバルザの腹に押し込み、横に切り裂いた。バルザの体から大量の血が吹き出る。そしてゆっくりとその巨体が倒れていった。

「バルザ様・・・」

「バルザ様がやられた・・・」

「も、もうダメだあ！！」

バルザが倒されたその数十秒後はシンツとしていたが一人の兵士が逃げ出したのと同時に我先にへと敵兵士達が城の中へ逃げ始めた。やはり彼がこの城の兵士達の心の支えだったのだろう。後方でその報告を聞いた心が即座に全軍に命令を出す。

「敵の大將は討ち取った。好機だ！総攻撃をかける！！」

「よっしゃあ！行くぜお前ら、やられた分をやり返せ！！」

ヴァルミア軍の全兵士がバーンと心の言葉と同時に雄たけびを上げる。そして一気に攻撃を開始し、第二城門を突破したその勢いのままに第三城壁を突破し、城の中へと一気に雪崩れ込む。早々とした再攻撃に動揺し、なおかつ指揮官までも討ち取られたのだ。そして城の中まで入ってこられてはもはやデカルト守備兵に勝ち目は無い。あるものは降伏し、また抵抗を試みた者は次々と討ち取られた。

「クリス様、急いでお逃げください！！」

ベンがクリスがいる一番奥の部屋に顔中に汗を流しながら雪崩れ込むように入ってきた。クリスはそれに多少驚きながらも入ってきたのがベンだと分かり、変わらぬ表情で対応する。

「どうしたのよ。そんなに急いで移動しなくてもバルザおじ様なら負けないわよ。」

「バルザ様は討ち取られました！今は一刻も早くこの城から脱出してください！！」  
「えっ……？」

ベンはクリスの返事を待たずしてその手を掴むと、一目散に城の裏側へと走った。一方、クリスは何が起こったか分からなかった。バルザおじ様が死んだ？それも討ち取られた？頭の中でその言葉が交差する。

「ゼイツ…ゼイツ…くそっ…もう敵兵がここまで…」

前を見ると剣を血にまみらした兵士十数人と…バーンがいた。

「見たところ敵の重要人物か。降伏しろ。そうすれば悪いようにはしねえ。」

「貴様のような輩にクリス様は渡さん！」

「なら悪いが無理やりにも降伏してもらおう。」

その言葉と同時にバーンは大剣を構えた。ベンも長剣を抜いて構える。その時、後ろの階段から反乱軍側の兵士と見られる者が数人上がってきた。そしてベンとバーンの間に体を入り込ませる。

「ベンさん、ここは自分達に任せて早くクリス様を連れてお逃げください！！」

「ここは我らが引き受けます。クリス様が捕まってはバルザ様に申し訳が立ちません!!」

「クツ・・・スマナイ、頼んだ!」

「えっ? ちょっとベン!？」

ベンは仲間をその場に置いてクリスと共に階段を下りる。ここを下ればすぐに裏門だ。クリスはベンの手を振りほどこうと暴れた。

「ベン、アナタも兵士でしょ!？どうして戦わないの!？」

「後でなんなりと罰を受けましょう。ですが今はクリス様を逃がす事が先決なのです!」

裏門に到着する。そこで暴れるクリスを無理やり馬に乗せると、すぐに走らせた。クリスの目からデカルト砦が遠くなっていく。

「嫌、嫌・・・嫌————!?!?!?!?」

遠い空、少女が叫ぶ。腰に差した剣の鞘に溜まった水滴は、まるで少女の涙のようだった・・・

### 第三十一記 軍旗と異名と皇女

デカルト砦の陥落から一週間が経った。砦の中では今だ遺体の排他作業や城壁の壊れた部位などの修理をしていて兵士達が忙しく走り回っていた。

「しかしかなりの被害が出たな。」

「仕方ありませんよ。かなりの激戦でしたから…」

バーンとリリ又は、城の修復作業を見守りながら改めて一週間前の戦闘の激しさを思い出していた。

「ロイさんもまだベッドから動けない状態ですしね。」

「ケツ、アイツが軟弱すぎるんだよ。」

「そう言いながらロイさんが切られた時すごくバーンはん怒ってましたやんけ。」

「…ヘテロ、お前は少し痛い思いをしたいみたいだな。」

バーンがヘテロの頭を掴んでグリグリする。それを見てリリ又は苦笑いをしていた。そこへ疲れた顔をした心がフラフラしながらやってきた。

「よお將軍さん、随分とお疲れじゃないか。」

「ああ…報告書に本国への連絡、さらには…これが一番厄介なのだ

がシェリー姫がこちらに来るらしい。」

「姫様が！？でも一体どうして・・・？」

「激戦の中生き残った勇者達の顔を姫直々に見たいんだそうだ。全く、戦いを何だと思っっているんだ。」

そう言った心の顔は珍しく不機嫌だった。恐らく戦場をお遊び感覚で見る姫が気に入らないのだろう。

「まあいいやないですか。姫様が来た方が兵の士気もあがりますよ。」

ヘテロが心をなだめるが、心の顔から不機嫌さは消えない。余程皇族が嫌いなのかはたまた別の理由なのか・・・とりあえずヘテロは八つ当たりを受けないように逃げる事にした。

「じゃあワイはまだ武器の手入れなどが残っていますんで…ほなまた！」

ヘテロが早足でその場から立ち去る。他のメンバーも心から逃げるように離れていった。ただ一人、バーンだけを除いて。

「將軍さんは皇族が嫌いなのかい？」

「別に嫌いではないさ。ただ戦場をそんな祭りの見学気分で来られるのを考えると少しイラついただけだ。」

「青いねえ。」

クククツと笑うバーン、それを見て心はさらに機嫌を悪くした。

「まあとりあえず丁重な御持て成しをしてとっとと帰ってもらおうぜ？」

「それが一番妥当だな。」

「オレもまだ城の修復が残ってるからいくぜ。お偉いさんの接待、頑張ってくれよ。」

そう言つてバーンも城壁の方へと向かつていった。さてと、ついでにロイの見舞いにもいくかな。

城の医務室に入るとロイが体に包帯を巻き付けたまま寝ていた。ロイはこちらに気づくと体を起こす。

「心將軍。」

「ロイ、体の方は大丈夫か？」

「ええ何とか動けるってところですね。迷惑かけて申し訳ありません。」

「気にするな。今はしっかりと休め。」

「しかし私のせいで撤退をする事になってしまつて……」

「結果的に皆は落としたんだ。気にする必要は無い。お前は何でも自分のせいにしすぎだ。」

しかし…とまだ自分の責任にしようとするロイを心は諫めた。ロイは何でも自分のせいにする所が玉にキズだな。

「…分かりました。今はおとなしく体を直す事に努めます。」

「それでこそ第10軍団の副官だ。お前にはまだやってもらわないといけない事がたくさんあるんだからな。」

ニコツと笑う心、それがロイの目には大きな存在として見えた。この人とならどこへだつてついていこう、そういう誓いを立てれるほどに。その時、医務室に一人の兵士が入ってきた。

「將軍様、本国から伝令が参りました。至急広間まで来て欲しいとの事です。」

「分かった、すぐに行く。じゃあ元氣になれよ。」

「はい、ありがとうございます。」

ロイと別れの挨拶を交わすとすぐに心は広間へと向かう。そこにはロイを除く第十軍団のメンバーとグラムが集まっていた。そしてその中心に馬車と本国の騎士と思われし男が立っている。

「お待たせしました。どのようなご用件でしょうか？」

「うむ、貴公が陥落させたデカルト砦の件で褒賞として軍旗と異名を授ける。」

騎士の言葉を聞いて第10軍団のメンバーが一気にざわついた。そ

れもそうだろう、これまで第10軍団には軍旗というものが無かった。それは第10軍団がクズ集まりと見られていたのもあるし、それまで目立った功績も無かったからである。つまり、軍旗と異名を授けるという事は正式に第10軍団がヴァルミアの軍団だと認められたという事である。

「ありがたき幸せです。」

「では軍旗を公開する。」

そして軍旗らしき布を持ってきた兵士二人がその布を開かした。それを見た第10軍団の面々は誰もが目を輝かせた。それが次の瞬間には怒りの目になるともならず……

「龍……だと?」

「しかも黒い……」

「ふざけるな!」

グラマの怒声が飛ぶ。その軍旗の絵柄は紛れもなく黒い龍の姿だった。他の者から見ればカッコいいと思うかもしれないが、アエル教において龍は悪の象徴……しかも黒い龍といえばアエル教の神話では世界を混沌に導こうと何度も争いを起こし、最終的には英雄アエルに倒された史上最悪の敵なのである。

「これがオレ達の軍旗だつていいのか!」

「本国はオレ達を敵だと認識しているという事なのか!」

軍団のメンバーから罵声が飛ぶ。神話の最大の敵が軍旗、すなわち

それは第10軍団はヴァルミア神国の敵である。そう言い換えているのと変わらないのである。

「わ、私はただこれを持っていけと言われただけでこんなのが描かれているとは……」

公布した騎士も描かれている模様に動揺しているようだった。キースが槍を突き出す。

「なんならお前の死体を本国に送りつけてやるうか!？」

「ヒイイイツ!？」

「キース、やめろ!」

「だけど將軍!？……分かりました。」

心がキースを止める。彼はまだ何かを言おうとしていたが心の拳が震えているのを見て槍を引いた。ほかでもないここで一番屈辱に思っているのは心だろうと思ったからだ。

「そ、そして……ミュールニアという異名を授ける。」

騎士はどもりながらも異名を公布する。ミュールニア（全てに反逆する者）か…本国はよほどオレを嫌っているらしいな。

「用件はそれだけですか？ならば即刻お帰り頂きたい。」

「わ、我らは本国から直々に来たのですぞ!？それを即刻帰れとは……」

「私も同感だ。荷物をまとめて即刻本国へと帰れ。」

心は丁寧ながらも冷たい目で騎士に言い放つ。グラマも心に同調して騎士にキツイ言葉を浴びせた。

どうやらグラマも第10軍団への本国の対応に怒っているようだった。数週間前とは違うグラマの様子に心はそんな場合では無いにしても笑ってしまう。すると馬車から一人の女性が姿を現した。

「すみません、皆様の怒りはもつともですが使いの者も疲れていらっしやいますのでどうか休ませていただけませんか？」

「アナタはどなたですか？」

「頭が高い！この方こそヴァルミア神国第一王位継承者、シェリー・アエル皇女殿下であるぞ！！！」

「皇女様！？」

「はい、皆様初めまして。」

輝かんばかりの笑顔でその女性、シェリー・アエルはその場でドレスの裾を摘まみ、礼をした。

### 第三十二記 忍び寄る策略

「フフフフ・・・」

首都の城の一部屋：外の明るい日差しに照らされて、男は小さく笑いながら椅子に座っていた。

「上機嫌ですね。何か良い事でもあったのですか？」

「何大したことじゃないさ。あの第10軍団の将軍、桐生と言ったか：？がデカルト砦を取り返したそうだ。しかも城にほとんどダメージを与えずな。」

「あの男が：よく生き残りましたね。」

近くにいた女性は男の机にあるカップに紅茶を注ぐと感心したように二・三度頷いた。その女性は前に男に報告をしていた女性だった。

「それほど実力があるということだ。その褒美としておもしろいモノを送ってやったよ。」

「褒美：何を送られたのですか？」

「それは奴らが帰ってきてからの楽しみだ。それにしても本当におもしろい男だ。まさかあの状態から生き残るとわな。」

それからまたフフツツと男は笑う。それはまるでゲームを楽しんでいるかのようだった。

「しかしせつかく閣下が軍の情報を流してくれたというのに…しょせん下等な民の集まりですか。」

「いや反乱軍は侮れん。ガイド街道ではゼスク上級將軍率いる九万の軍勢をたつたの三万で破つらしいからな。」

「聞いております。しかしそれはゼスク上級將軍が大した策も講じずに突撃させたからだという報告が入っております。結果、左右からの伏兵に気づかず挟み撃ちをくらい敗走など…呆れて言葉もありません。」

女性はヤレヤレと首を振るう。男はそんな女性の様子を見て、男は食えぬ女だ。と心の中で呟いた。

男は女の素性を知らない。ただ突然現れて、いつの間にか自分のそばにいたのだ。だがその能力は高く、男が今の地位にいられるのもこの女の力が大きいと言える。

「ところでシズド城を指す反乱軍の一部がデカルト砦に向かっているという情報が入っています。」

「早いな。やはり反乱軍を率いているのは優秀なやつか…」

「至急にデカルト砦へ伝令を送ります。」

確かに伝令を送ってデカルト砦から撤退させた方が良さだろう。それからデカルト砦を破壊させて…いや待て？

「おい。」

「何でございましょう?」

女は男の声に振り向くとその顔が笑顔になっているのを見て何かある察した。あの顔は良からぬ事を考えている顔だ。

「デカルト砦に伝令を送るな。」

「……第10軍団と第5軍団をお見捨てになるのですか?」

「所詮奴らは捨て駒だ。代えなんぞいくらでもいる。」

「……了解です。」

女は部屋を出る。さておもしろい事になった。あの小僧は次はどうやって危機を乗り越えるかな?じっくりと見物させてもらおうじゃないか。その時コンコンツと部屋のドアが叩かれた。

アイツが戻ってきたのか?いやこの気配は違う。では誰だ?

「失礼します。」

それは女の進言で教皇様のお世話をさせる為に自分が送った侍女だった。普段は怪しまれるので自分に近づかないように言っているのだが来たという事は……

「教皇様が危篤状態になりました。」

口の端が上がるのが自分でも分かった。やっとか、いやあの女が思っているより随分早かったな。

「分かった。すぐ向かう。」

「承知いたしました。」

男は少し残っている紅茶を飲み干すと椅子から立ち上がる。計画まで後少しだ。それまでもう少し、もう少しだけ私を楽しませてくれよ？ 桐生心将軍。

それから男は部屋を出て行った。部屋には飲み干されたカップと…それを片付けながら笑う侍女だけだった。

### 第三十二記 忍び寄る策略（後書き）

さて、これにて武の章は終わりです。この章は戦いメインでしたが楽しんで頂けましたでしょうか？

心達が戦っている間に城では様々な思惑で動いているようですね！では次の章の終わりでもまた会いましょう。

## 逃の章 第三十三記 女神の黙禱、死神の言葉

ヴァルミア神国第一王位継承者、シエリー・アエル皇女が来てからさらに数日経ち、城内は慌ただしくなった。城壁の修復作業を急ぐもの・訓練をするもの・はたまた何故か上半身裸で走りあうなど（皇女様に筋肉でも見てもらいたいのだと思うが）と様々だ。

「桐生さん、次はこっちへ行きましょう。」

「分かりましたからそんなに急がないで下さい。」

シエリーがそこら中に笑顔を撒き散らしながら城の外を走っていた。心は後からフラフラと金魚のフンのように行っている。なぜこういう事になっているのかというとシエリーが心を自分の案内役に任命したからだ。皇女様いわく「兵士達の頑張りをこの目で見たいのです」だそうだ。

全く戦場を見世物と勘違いしているんじゃないだろうな・・・

心はシエリーに気づかれないようにそつとため息を吐いた。年は18くらいだと聞いているが本当なのだろうか？透き通るようなプラチナブロンドの髪に雪のような白い肌。誰もが振り返るような整った顔と外見は18歳の女性なのだがいかんせん精神が幼いように感じってしまう。

「ここは何の部屋なんですか？」

「ここは兵士の宿泊所ですよ。ここで兵士達が生活をしているんです。」

「よお將軍、見回りか！」

「こらキース！姫様がいらっしやるのに失礼でしょ！」

心とシェリーが兵の宿泊所の扉を開けると、キースとリリヌが椅子に座って休んでいた。キースなんかはビールを片手に持っている。

「昼間から酒か？ほどほどにしとけよ。」

「もつと言つてやってください。コイツー日ビール飲むつて聞かないんですから。」

「酒は飲んでも飲まれるなつてやつだよ。」

「皆さん仲がよろしいんですね。」

心達三人の会話を聞いてシェリーが羨ましそうに口を挟む。心はそれを聞いて即座に言葉を返した。

「ただ注意をしているだけですよ。」

「それでも羨ましいです。私は外にあまり出してもらえなかったですから……」

その時のシェリーの目は少し寂しげだった。まがりなりにも王位継承者、それも第一だ。王族にも色々あるんだらう。

あたりの空気が少し暗くなる。しばらくしてその空気に耐える事ができなくなつたりリリヌが、ここでシェリーに質問をした。

「そういえば姫様は妙に心將軍を気に入っているみたいですけど。」

「あ、それオレも思いました。もしかして將軍の事が……?」

リリヌの質問にここで一気に話題を変えてしまおうとキースが放った爆弾発言にシェリーはサツと顔を赤めた。

「いえ私はただ桐生將軍が信頼できる方だと思いましたので……」

「こ、こらっ、姫様になんていう事を聞くんだけ!」

心も焦りながらリリヌとキースを叱った。そこでまた変な空気になる。キースはしまったという顔し、リリヌはそんなキースを睨んだ。

「さ、さあ姫様。次の場所へ行きましょう。」

「そ、そうですね。」

そして二人は部屋を出て行った。部屋を出たのはいいものの二人の間にはキースの言葉のせいで緊張した空気が漂っていた。

「次はどこに行きたいですか?」

「では次は……」

心はそんなシェリーを気遣って行きたい場所に行かせる事にした。そしてシェリーが行きたい場所とは……

「わあ〜高いですね〜!」

「落ちないように気をつけてください。」

シエリーが行きたいといった場所、それは城壁の上だった。デカルト砦は荒地に囲まれているので外はなんの変わりもない延々と続く寂しい景色のみ。それをシエリーは目を輝かせて眺めているのだ。正直心には何が楽しいのか分からない。

「おい桐生……と姫様、お久しぶりです。」

「姫様、お初にお目にかかります。」

「グラマ將軍もお久しぶりです。そちらの方はアルベルト家の方です。初めまして。」

城壁に上がるとその後ろにロイとグラマが上がってきた。恐らく城の修復作業の指揮をしていたのだろう。

「ロイ、ケガはもういいのか？」

「はい、ご心配をおかけしました。」

心はロイの体を見やる。包帯はまだ巻いているが、傷は大体直っているようだった。大した事がないようだったので心はホウツと安心する。

「城壁はまだまだ修復できたのか？」

「全然だ。まあ城壁自体の被害は少ないが連続で攻撃を受けたから所々が傷んでいる。これは意外に時間がかかるかもな。」

グラマが心の問いかけに、顔を横に振りながら説明する。おいおい

…こんな時に攻撃されたら一溜まりも無いぞ。

「でも將軍達がいらっしやいますからもし敵が来ても安心ですね。」

「お任せ下さい。姫様は我らが命に代えましても守り抜きます。」

心はシェリーに悟られないように苦笑いしながらそう言った。心の言葉にグラマもウンウンと頷きながら反応する。グラマ將軍の家は昔から忠誠心に厚いそうだからそれも重なっているのだろう。

「この地で何人も人が死んだのですね・・・」

シェリーは城壁の上で両の手のひらを重ねて目を瞑り、黙禱を捧げる。銀色の髪が太陽の光に反射して、心にはまるで女神が祈りを捧げているように見えた。心はシェリーの隣に立つと一緒に目を瞑って死んでいった兵士達に黙禱する。

それを見てグラマとロイは目を見合わせると笑いながら静かに城壁を降りていった。

「ハアツ・・・ハアツ・・・」

その時男は馬を走らせていた。砦から出たときは綺麗な光沢を放っていた鎧は、今は血と泥で汚れてしまっている。

男は自分の上官であるグラマ上級將軍に言われて、本国へ援軍要請をしに昨日の朝、デカルト砦を出発した所だった。だが今、男は顔を汗だくにし、体は傷だらけになりながら急いでデカルト砦へと向かっていた。

「ハアツ…早く、早くこの情報を將軍に伝えなくては…」

男は手綱を引いて馬のスピードを上げる。脇や足、背中にはいくつもの矢が食い込み、血が進むたびに馬と地面を濡らしていった。それは誰が見ても瀕死の傷だった。だがそんなのは今は問題じゃない。デカルト砦の門が見えてきた。男の目が霞む。門の前になると見回りをしていた同僚が血相を変えて近寄ってきた。

「おいどうした！？何があった！！」

手に力が入らず、とうとう男は馬から振り落とされた。地面に体が叩き付けられる。もう痛みさえ感じない。

「大丈夫か！？すぐに医務室に…」

男は同僚の手を掴む。瞼が落ちてきた。もう時間が無い…早く伝えなければ…

「反…軍…大…こっ…て…」

男は口を動かすが声が出ない。それでも最後の力を振り絞って同僚に情報を伝えた。

「…反乱軍が大軍でこっちに向かっている。」

微かな…本当に微かな声でそれを伝えると、男の意識は永遠の闇へと誘われていった。

### 第三十四記 ナンシー・ストルーゲル

爽やかな朝日が照り、鳥と獣の声が響く中…デカルト砦の砦内では殺伐とした雰囲気の流れ込んでいた。砦の裏には何故か何台もの荷車が横に騒然と連なっている。ふと砦の中の一室で鬼も逃げ出すような怒声が聞こえた。

「何だと！桐生、貴様正気か!？」

「落ち着いて下さいグラマ上級將軍。」

「これが落ち着いていられるか。なぜ本国は援軍を送らない!」

「理由はその兵力でも十分砦を守れると判断したからだそうです。」

「本国はオレ達に死ねと言っているのか!？」

グラマ將軍は今にも破壊してしまいそうなほどに机を叩いて机上の伝令書を見ている。その顔はまるで本当の鬼のようだ。

「本国がそう判断したなら仕方ありません。」

「だがこの前の軍旗の事言いこの伝令の内容と言い…本国は一体何を考えている。」

「拳句の果てに伝令の最後の内容が最後までアエル神の誇りを胸に戦え…ですか。」

ロイもその伝令の内容を見てため息を吐いている。事の最初は瀕死の傷を負った伝令兵の言葉だった。そしてその伝令兵が持っていた本国への援軍の返答。

「反乱軍の大部隊がこちらに接近している…か。それで援軍は無し。」

「で、どうするんだ？今の兵力ではオレ達に勝ち目なんて無いぞ。」

瀕死の伝令兵もその後息絶えてしまった。恐らく最後の力を振り絞ったの言葉だったのだろう。工作隊の中で斥候部隊を送って確認した所、隊長のネウロ以外は全員連絡が途絶え生死不明、さらにそのネウロも体を傷だらけにして帰ってきた。幸い軽症だったがその報告によると敵の数は二万だそうだ。

「相手は二万なのにこちらの兵力は一万以下、重軽傷者を除けると戦える者はごく僅か・・・さすがに厳しい所のもではありません。」

「兵がないのに戦など勝てるか！」

「とりあえず今の状態で行える最善の判断をするしかありません。」

未だ怒りが収まらない様子のグラマを心が宥める。とは言ってもこんな最悪の状態で作れる事など限られてくるのだが・・・

「ここで死ぬまで戦うか・・・撤退するか・・・」

「私は死ぬまで戦う。敵と戦わずに背を向けるなど・・・アエル神に誓って来ん！！」

心の言葉にグラマは即答する。それは騎士として、国に忠誠を誓う者としては最適であり至極当然の言葉だろう。だが心は違った。

「いえ、撤退します。」

「何だと？貴様・・・それでも騎士か！！」

心は撤退を宣言した。確かにここで戦うのが騎士としては当然だろう。しかしここで死んでは所詮犬死だ。負けると分かっている戦いに自分の部下を巻き込む事は出来ない。それに姫様もいらっしやる。騎士でも無い者を見殺しには出来ない。

「姫を無事に本国に送り届けねばなりません。」  
「見損なつたぞ桐生心。貴様がそこまで弱虫だったとは・・・勝手にしろ！」

グラムはそう心に吐き捨てるとすごい音で扉を閉めて出て行った。

「いいんですか？」

「こうなる事は分かっていたさ。明日、砦を撤退する。いざとなればグラム將軍を羽交い絞めにしても連れて行く。…無駄に血を流す必要は無いんだ。」

「…了解しました。」

そうしてロイも部屋を出て行く中、心は一人考えにふけていた。本国がオレを毛嫌いする理由は分かる。だが軍旗に黒龍を指定したのは解せない。そんな事をすれば民衆から反感を買うはずだ。それに今回の件は恐らくどこかで情報が漏れている。そうでなければこんなに早く反乱軍がこちらへ進軍してくるわけがない。

「クソッ…」

「將軍、大変です！反乱軍がもうすぐそこまで迫っています！？」  
「何だと！？」

心がそう呟いているとロイが血相を変えて扉に入るなり叫んだ。心も聞き捨てならないその言葉を聞いて急いで砦の上から外を見る。そこで目に飛び込んできたのは反乱軍の象徴である龍が描かれた軍旗と森を埋め尽くす程に見える数の兵士だった。

「つつ！…全軍に通達、直ちに撤退準備を始めろ！急げ！！」

後にナンシー・ストルーゲル（嘆きの戦い）と呼ばれるこのデカルト撤退戦はこれからの心の人生、そして第10軍団の面々の人生を大きく左右してしまう事をこの時はまだ誰も分からなかった・・・

### 第三十五記 デカルト撤退戦（前編 絶望の前の幸福）

デカルト城内は心の一言で大騒ぎとなった。最低限の食料と武器を荷台に積み込み、城壁の上にいる見張りはしきりにあたりを警戒している。それを見ながら心とロイは準備の進み具合についての報告を受けていた。

「それで、敵は後どれぐらいで到着するんだ？」

「確証はありませんがネウ口隊長の推測では恐らく1日半後には…」

「時間が無いな。準備を急がせてくれ。姫様だけでも今日中に撤退させるんだ。」

「分かりました。」

ロイが部屋を出て行く。心はフーッと息を吐き出すと近くのイスに倒れる様に座った。正直に言えば心もやるせなかった。デカルト砦を落とすために多くの血と命を散らしたのだ。それをこつも簡単に放棄する・・・それはいわば死んでいった兵士達が無駄死にしていた事と等しい。

グラマが怒るのも無理はない。だがここでさらに兵士を無駄死にさせるわけには行かない。生きていればまた勝機も出てくるのだから。

「さて、オレも荷物を片付けないな。ん？どうぞ。」

心が部屋の片付けに入ろうとするとドアがコンコンと叩かれた。入室を促すとシェリー姫殿下が入ってくる。

「シェリー姫！？何か御用ですか？」

「いえ、ただ桐生將軍とお話があったので。」

「それは光栄です。ぜひ。」

シエリーは満足気に微笑むと心の隣のイスへと座った。あまり女性に免疫が無い心は隣に座られただけでも心臓が早鐘した。なんかすごい緊張するな・・・

「反乱軍が来るんですか？」

沈黙の中、先に話し出したのはシエリーの方だった。シエリーは少し不安そうな表情をしているが吸い込まれそうな黒い瞳に心は飲み込まれそうになった。慌てて平静を装う。

「だ、大丈夫ですよ。姫様は我々が守ります。」

「本当ですか？」

「はい。なので心配する事はありません。」

「ありがとうございます。それとお願いが一つあるのですが…」

笑顔になった顔がまた不安そうな顔になった。オレはもしかして会話下手なのか？それよりお願いとは難なのだろう？

「自分が叶えられる願いならなんなりと。」

「あの…私の事をシエリーと呼んでくださいませんか？姫様なんて呼ばれ方はあまり好きじゃないので・・・」

えっ？

「いやさすがにそれは…」

「ダメですか？お姫様の命令ですよ？」

「・・・分かりました。」

「わあっ！ありがとうございます！…」

予想外の願いに拒否をしてしまったものの姫の命令と言われてしまつては逆らえない。仕方なくOKをしてしまった。シェリーはそれを聞くと本当に嬉しそうに笑う。しかし姫様を呼び捨てか・・・本国に知られたら即牢屋モノだな。しかし姫様の笑顔を見れたのならこれはこれで良かったのかもかもしれない。

「では今呼んでいただけますか？」

「さすがにそこまでは・・・」

「命令違反ですか？」

シェリーの顔が唇と唇が触れる一歩手前まで近づく。いやなんで近づいている！？やばい、心臓が半端なくドキドキしている。

「桐生將軍・・・」

「大変です！？・・・あ」

突然部屋に入ってきたロイが心とシェリーを見て固まる。状況を整理してみよう。今、オレとシェリーはキス寸前まで近づいている。それを他人が見れば導き出される答えは・・・？

「お邪魔しました。」

「待て誤解だ！？」

ロイはすぐさま部屋を出て行くこうとするが、急いで引き止める。もし変な噂がたつてしまったらオレ所か姫様まで不快な思いをするかもしれない。

「申し訳ありません。もうちょっと遅く来るべきでした。反省しています。」

「反省はしなくていい！それより何が大変なんだ？」

ロイはなぜか素で落ち込んでいるが心はむしろ良く来てくれたという思いでいっぱいだった。来てくれなければオレは理性が飛んでいたかもしれない。

「そうです！反乱軍が攻撃を仕掛けてきました！！！」

「なっ…！？早すぎる。一日半後に来るんじゃないのか!？」

心は急いで窓を開ける。そこには城壁をよじ登ろうとする敵とそれを叩き落とす味方の姿があった。

「急いで姫様を荷車に乗せて連れて行け！絶対に姫様を無事に本国へ帰還させるんだ。」

「了解しました。では姫様、こちらへ。」

「あ……」

シエリーは一度心の方を見るとロイの後をついていく。心はそれを確認した後、すぐに戦場になっている城壁へと向かった。

第三十六記 デカルト撤退戦（中編 白銀の獅子と呼ばれし男）

「状況はどうなっている？」

「来たか。状況は最悪だ。見張りが早くに気づいたとはいえずでに第一城壁は突破、第二城壁も何とか持ちこたえているがその内突破されるだろう。砦の周りも包囲されつつある。」

心が指揮している部屋に入るとそれに気づいたグラマが素早く状況を説明する。その情報を整理して策を練ろうとするが何も浮かばない……

状況はグラマの言った通り最悪だ。数は向こうが圧倒的に上。さらにこちらはデカルト砦を攻め落としたばかりでまだ兵の疲れも城壁の修理も残ったままだ。撤退しようにもすでに包囲されては逃げようもない。

降伏。

心の脳裏にその言葉が浮かんだ。このまま戦っていてはいずれ全滅する。ならば降伏してしまった方が助かる確率が高い。最悪オレの命で皆が多くの兵が助かる。

「オレの軍団がここで戦う。」

「えっ？」

「その間にお前の軍団はデカルト砦から撤退しろ。」

「そんな事出来るわけグツ!？」

心が反論しようとした瞬間、腹に強烈な痛みが来た。たまらず心は床に沈む。殴ったのはグラマだった。

「將軍さんよお！このままじゃ全滅・・・って何をしてるんだ？」

「バーンか。ちょうど良い。こいつを馬車に乗せて撤退しろ。」

「アンタ死ぬ気か？」

「どうせマカダ山脈で死ぬはずだった命だ。それより桐生將軍が起きたら伝えてくれ。お前との生活は思ったより悪くなかった、と。」

「・・・分かった。じゃあな。」

「ああ。・・・クズはクズらしく最後まで生き残れよ。」

バーンは気絶した心を抱えて部屋を出る。さて、オレも最後まで意地を見せなきゃならないな。

グラマは外へ出る。すでに第二城壁は突破されてしまったようだ。しばらくして部屋に若い少年兵士が入ってきた。

「グラマ様、お逃げ下さい！！敵がもうすぐそこまで来ています！第10軍団の方々もすでに撤退に入っております。」

「オレは逃げない。白銀の獅子の名においてここで引くわけにはいかない。」

「將軍・・・」

「泣くな。ちなみに聞くがお前の年はいくつだ？」

「グスツ・・・16歳になります・・・」

「若いな・・・お前に任務を言い渡す。直ちに撤退した第10軍団の護衛をしる。」

少年兵はグラマの言葉を聞いて目を見開いた。当然だろう。この任務はすなわちお前はここから逃げると言っているようなものである。

「従えません！私はグラマ將軍と共にここで戦います！！」

「これは將軍命令だ。従わなければお前を斬る。」

そう言つてグラマは剣先をその若い少年兵に向けた。

「・・・分かりました。」

「最後にお前の名前を聞かせてくれ。」

「ジョニー・・・ジョニー・プロンプトです。」

「ジョニーか。いい名前だ・・・ほらもう行け。任務を遂行しろ。」

「グツ...ツツ...お世話に...グスツ...なりました。」

ジョニーはグラマに一礼をすると部屋から出て行った。よし、これで良い。若い命を無駄に散らす事は無いんだ。すでに敵は砦の中に侵入したようだ。第10軍団の奴らも全員撤退した事だろう。頃合いだな・・・

グラマが部屋を出ると傷だらけの部下達が寄ってくる。

「グラマ將軍、敵がもうすぐ「良い。オレはここまでだ。砦の仕掛け石を崩す。」・・・分かりました。」

「お前達は逃げる。死ぬのはオレだけでいい。」

「いえ、私たちはこれまでグラマ將軍を慕つてこの第6軍団に来ました。死ぬ時もついていきます。」

「フツ...部下には嫌われていると思つていたが私も案外捨てたものではないな。」

「いたぞ。敵の將軍だ!!」

敵の兵がグラマを見つける。グラマはそれに気づくと横にあった小さな石を素早く抜き取った。その瞬間、砦の中がなにやら地響きの様な音を立て始める。

「何だこの音は?う、うわああああ!!」

「砦が崩れるぞ。撤退!撤退だああ!??」

そして崩れる音と共に砦の天井が崩壊し始めた。中にいた敵は天井の石に押しつぶされてその命を散らしていく。

「オレもここまでか…」

思えば短い間にたくさんの事があったな…白銀の獅子と呼ばれてから桐生心と会い、助けられ。そして今度は自分の命を持ってやつを助けようとしている。これもアエル神が導いた運命なのか。ふとگرامと一緒にいた部下がگرامに話しかけた。

「將軍、私はアナタと、そしてあの第10軍団の面々と今まで戦ってこれて誇りに思います。」

「オレも今までお前達と戦えて誇りに思う。」

桐生心。お前とバーン、そして第10軍団の面々にアエル神の加護があらん事を…

その願うと同時に第5軍団総司令官、白銀の獅子と呼ばれた男、グラム・ジユペール上級將軍は最後まで残った部下を引きつれ崩壊するデカルト砦と共にその姿は見えなくなった。

第三十七記 デカルト撤退戦（後編 残る者、逃げる者、戦う者）

「……んっ…グッ！」

目が覚めると心は輸送車に乗っていた。何か急いでいるのかすごく粗い動きで馬は地を蹴っている。思い出した。オレはグラマ將軍に気絶させられて…

心は輸送車の幕を上げて周りを見る。そして視線の先に入った者は第10軍団のみんなが必死に走っている所だった。

「將軍、起きましたか！」

「ロイ、デカルト砦は…グラマ將軍はどうなった!？」

「それは……」

「死んだ。オレ達を逃がすためにな。」

近くにいたバーンが言い難そうだったロイの代わりに答えた。心はそれを聞いて両手を地につける。

「グラマ將軍が……」

「デカルト砦の仕掛け石を抜いて砦は崩壊、敵は足止めを食らっている。」

確かにあの時は誰かが足止めをしなければ全滅していた。分かっている。分かっている。でも割り切れるものじゃない。

「とりあえず私たちは今ヴァーノ城まで撤退している途中です。そこからシェリー殿下を送る為にヴァルハラを目指します。」

「…分かった。もう下がって良い。」

心はロイとバーンを下がらせると馬車の中、一人で頭を抱え込んだ。なぜあの時すぐに撤退しなかったのか。援軍を待たずに撤退していればグラマ將軍は死なずに被害も最小限に抑えたはずだ。いやそもそもなぜ本国は自分を嫌悪する？ここで初めて心の中で本国に対し、一つの反感が生まれた。

心は心を落ち着ける為に馬車の外をのぞく。先ほどまで血生臭い戦いをしていたとは思えないほど山の中は静かだった。ふと木と木の間を見る。そこで何か心臓の瞳を横切った。

何だ、鹿か？いやそれにしては動きが変則的すぎる。これはまさか・

「全員周りを警戒しろ。囲まれているぞ！」

「荷物を奪えー！！」

心が兵士に叫ぶのと周りから雄たけびを上げるのはほぼ同時だった。馬を操りながら何人もの武装した男が山の側面を下ってくる。

「山賊だ。全員物資を守れ！」

ロイが馬を走らせながら下ってきた男と剣を交わす。辺りはすでに混戦状態となっていた。

「敗残兵目当ての山賊か。」

「何をしている！早く物資を守るんだ！？」

いつもの状況の兵士達ならばこのぐらいの練度の山賊は難なく倒せる。だが今は状況が違った。必死の撤退をしたばかりで兵士達の体力は限界に来ていた。加えてデカルト砦を落とされた事で士気も低い。一人、また一人と兵士が山賊に倒されていった。

「これでは無理だ。物資より先にこちらが全滅する。急いで山から降りるぞ。」

「しかし…いえ分かりました。全部隊物資は放棄しろ。急ぎこの場から撤退する！」

ロイの言葉を聞いた兵士たちが我先にへと山を下っていく。だが後方を走っていた兵士達が突然倒れ伏した。胸には矢が刺さっている。

「待ち伏せか!?!」

「全軍攻撃、国軍を皆殺しにしる。」

輸送車と兵士達の間にいるはずのない反乱軍が新しい山賊の仲間と  
思ひし者と共に現れた。先回りされていたと?

それから一方的な殺戮が繰り広げられた。味方が何人も反乱軍兵士の剣に倒れていく。

「心將軍。」

「ロイ、ここはオレが引き受ける。だからお前はバーンと一緒に味方をつれて逃げる。」

「その役目はあなたではありません。」

心はロイの不可解な物言いに振り向いた。するとロイは…

「それは副官である自分の役目ですよ。」

「何を言っ…」

「私が突破口を開きます。將軍はそこから逃げてください。」

笑っていた。そして剣を構え直すとロイは敵に突撃していく。それを心は引きとめる事が出来なかった。バーンはロイの顔を見てその

覚悟を見てとる。

「行くぞ！ロイの突撃で敵さんの陣形が乱れた。」

「ロイを放つてはおけない！」

「バカ野郎！何度言わせやがる。お前が死んだらこの軍はお終いなんだー！」

「おい、離せ！？」

そう言うとバーンは心を抱えて馬を走らせ、ロイに続いて敵の中を突き抜けた。ロイの背後をバーンが駆け抜けた瞬間、

「心將軍を頼みますね。」

「…悪い。」

その言葉を交わした。そしてロイは敵に囲まれて見えなくなる。バーンは大声で叫んだ。

「全員ロイの決意を無駄にするな。突き進め！！」

バーンの覇気か、それともロイの決意をまざまざと見たせいなのかその後の味方の兵士も敵を突き抜けて撤退する。そして第10軍団は辛うじて全滅を免れたのだった。

「…行きましたか。」

ロイは撤退する軍団を見送りながら呟く。以前の自分ならこんな事はしなかっただろう。グラマ將軍と同じく自分も心將軍と関わって変わったようだ。

「また貴様か。」

ロイの前に現れたのは全身黒一色で覆われた男。ヴァーノ城で戦ったあの男、シャードである。

「どうやらあなたとはよくよく縁があるようですね。」

「それも今日で終わりだがな。おい、邪魔をするなよ。」

シャードは部下らしき女性に一言言ってからナイフを構える。それを待たずしてロイは斬りかかった。二つの剣が再びぶつかり合う。

「せめてこの人だけは・・・」

「いきなりとは随分だな。」

「こちらには余裕がないのでね。」

この人物は危険だとロイは思っている。実力ではなく何か心の中に大きな闇を飼っている気がするのだ。それは剣を交わしたロイだからこそ分かる事と言えよう。近い内に必ず心將軍と第10軍団にとって障害となる。

斬撃と覇気がぶつかり合う。この時点では有利なのはシャードだった。

「ほらどうした。動きが鈍いぞ?」

戦いの疲れが取れていないロイにとってスピードの速いシャードの攻撃は脅威。それを分かっているのだろう。シャードは余裕の笑みを浮かべている。だがそこに勝機はある。

「そろそろ終わりにさせてもらおう。」

「そうですね。そろそろ終わりにしましょう。」  
「言ってる。」

シャードの鋭いナイフがロイの心臓部分へと向かう。ここしか勝機は無い！

「ぐっ!？」

ガグギイインツ!!

ナイフが地面に落ちる。ロイは力でシャードのナイフを叩き落としたのだ。シャードは速さはあるが力が無い。それに目を付けたロイには珍しい力技だ。そのまま剣はシャードの首に向けられる。

「取りまし…た。」

だがその剣がシャードの首に届く事は無かった。ロイは口から血を吐きながら倒れる。その胸には一本の短剣が刺さっていた。

「…邪魔をするなど言っただけだ。」

「すみません。ですがここであなたを失うわけにはいきませんでしたので。」

短剣を投げたのはシャードと話していた女性だった。その無表情な顔で平然と人を殺す姿は恐怖とさえ感じるだろう。

「まあ仕方ない。助かった、とだけ言っておく。」

「はい。ありがとうございます。」

シャードはロイを見下ろす。そしてロイの顔の前で屈み、手のひら

でロイの目を閉じると小さく何かを言っただけでその場を去っていった。  
それは戦い合った敵へ贈る、東方の感謝の言葉。

「貴公と戦えた事を誇りに思い、この胸に刻まん。」

後にはロイの亡骸だけが山にポツリと残された……

### 第三十八記 敗者の行く先

古来より世界には勝者と敗者が存在する。勝者と呼ばれる者は敗者を殺し、または従えてさらなる力を得る。敗者と呼ばれる者は勝者と呼ばれる者に怯え、または殺されて消える。それが自然の摂理。そしてここにも一つの敗者達が歩いていった。

「…まるで死人達の行進だな。」

「仕方ないわ。あれだけ苦労して落とした砦をすぐに奪われてもうたんやから。」

第10軍団の一番後ろを歩いているキースとヘテロはそんな言葉を漏らしながら沈黙の行軍を見ていた。なるほど。確かに兵士ひとりひとりの顔に気はまるでなく、鎧や兜は埃まみれで力無く歩くその行軍姿は正に死人達の行進と呼ぶに相応しかった。

「それより問題は將軍よ。指揮をバーンさんに任せて完全に馬車の中に引きこもっちゃってんだから。」

「ロイはんにグラマ上級將軍、さらに軍団の半分以上が戦死したんやから無理もないけどなあ…」

「けっ、情けない將軍だぜ。」

横から話に入ってきたリリ又は真中で一際大きな馬車を見る。ロイを犠牲にして撤退したあの後、心はバーンに後の指揮を託すと馬車から出てこなくなってしまうのだ。ロイを犠牲にしたシヨックは大きいとは思うが軍団の將軍がこのままでは困る。キースはそんな心が乗っている馬車を見て舌打ちをした。彼もイライラしているのだらう。

「で、ワイらはこれからどこへ行くんや？」

「ヴァーノ城だ。」

「キヤツ!? 驚かさないでよ!」

空気を変えようと話題を出したへテロに答えたのはリリヌの後ろにいた今まで存在を消していたネウロだった。というかいつの間にもリリヌの後ろにいたのだろうか？

「お前らが気づかなかっただけだ。」

「ヴァーノ城か…あそこまで結構距離あるで？」

「だから一度近くの街で休憩をする予定だ。」

「近くに街なんてあつたか？」

キースが怪訝な顔でネウロに聞く。確かにヴァーノ城へ行く時には近くに街など無かったハズだ。

「あるにはある。だがあまり行きたくはない場所だ。だから將軍に言わなかつたんだ。」

「やばい場所なのか？」

「まあ…ある意味やばいな。吐き気がする。」

「どんな所だよ。」

「…奴隷の街、アルクラウド。」

ネウロはキースから目を離して空を見上げる。そしてまたキース達の方へ顔を向けると一言そう言った。

「奴隷の街!？」

「何言つてんだ。奴隷制度はもう随分前に無くなったはずだぞ。」

「世界には表もあれば裏もある。つまりは、そういう事だ。」

キースが言うとおりの奴隷制度はもう何十年も前に無くなっている。しかしネウロは何か謎かけのような感じでそんな事を言った。それでも彼には分からなかったようで次の言葉の語尾が少し荒くなる。

「だから分かんねえって！」

「つまり裏取引つちゆう事や。」

「そうね。噂には聞いてたけどまさか本当に行われていたなんて。」

どうやらキース以外の二人は感づいたようだ。二人の言葉を聞いてネウロは頷く。

「どうして本国は何も手を打たないの!？」

「取引先には本国の上級貴族もたくさんいる。さらに他の街より税金を多く納めてるから見逃されている。」

「最悪やな。国の上はそこまで腐ってるんか・・・」

「今では普通に奴隷を売り買いしている。」

「ふざけやがって・・・」

ネウロの言葉を聞いたキースとリリ又は怒りを表に出していた。特にキースは今まで見たことが無い憤怒の表情になっている。

「私たちはまだ解放されないの...?」

口から小さく零れ出たその言葉をネウロは聞き逃さなかったが彼はだまって口を閉ざしていた。一方、馬車の中に引きこもっていた心のそばにはシエリーと何故かは分からないがクリスがいた。クリスに関しては両手足は縄で締められて身動きの取れない状態にしていた。

「心さん大丈夫ですか?」

「平気ですよ。少し休めば大丈夫ですから・・・」

「でもご飯もあまり食べてないようですし・・・」

「ちよつと何私を忘れてイチャイチャしてるのよ!？」

シエリーと心の会話にクリスが食ってかかる。確かに囚われの身の状態で目の前でイチャイチャされれば腹も立つだろうが果たして囚われの身の状態で敵の頭に食ってかかるのもどうだろうか。

「ああ、悪いな。街に着いたら解放するからそれまで我慢してくれ。」

「はっ?何言ってるのあなた。」

敵の捕虜を街で解放する將軍など聞いたことが無い。仮にもし敗戦のせいで邪魔になったとしてもその辺の荒地に置き去りにすれば良いのにわざわざ街で解放するなんてただのバカだ。クリスは頭をフルに回転させて考える。

「仕方がない。ここで暴れ出されても困るからな。」

「・・・バカじゃない?」

クリスは小さい声でそう呟いた。この人がバルザおじさまを死に追いやったなんてとても信じられない。

「それより心さん、無理はしないでください。休む事も戦士の役目の一つですよ?」

「すみません…シエリーも疲れているでしょうから早く休んでください。」

「いえ私は心さんとお話したいので・・・」

それよりもこの女性は誰なのだろうか?見たところ軍人には見えな

いしかといつてお付きの侍女にしては格好が綺麗すぎる。しかもまたイチャイチャし始めたし。

だけど悪い人ではないのかも・・・

「將軍、着いたぞ〜！」

前の方からバーンの声が聞こえてくる。そして心達第10軍団は奴隷の街、アルクラウドでキツイ現実を知る事となったのはこのすぐ後の話だった。

### 第三十九記 バラバラになる軍団

「何よこれ……」

「ネウ口の言った意味がよく分かったぜ。」

街の中では薄汚れた人達が何人も牢に入っている姿だった。その手前では恐らく商人だろう筋肉質の男と、貴族らしい太った男達が競せりをしていた。

競りとは本来魚や野菜を仕入れる時に入手の難しい物などを一番高い値段で買った者が手に入れるいわゆる賭けのようなものだが・

「人間を商品みたいに扱いやがって……」

キースは拳を握りしめ、歯を食いしばる。奴隷制度が無くなってからも奴隷売買をしていたのだ。いやもしかすると奴隷売買全盛期よりも今の方が盛り上がっているかもしれない。

「私達は何も知らされてないわよ？」

「当然やろ。こんなもん本国に知れ渡ったら下手したら暴動起こるかもしれないへんで？」

「いやいや將軍様。こんな辺境の街へようこそおいで下さいました。」

リリ又達が門の近くで会話をしているとこの領主らしい太った男が近寄ってきた。男はバーンに手をスリスリさせながら歩いてくる。

「私はここの街の領主をしております。マルーヌ・ジャンエイボと申します。」

「あゝ…將軍はオレじゃなくてあつちだ。」  
「はいっ?」

マルーヌは馬車の方を見る。そこではシェリーと一緒に降りてくる心の姿があつた。

「こゝこれは申し訳ない!マルーヌです。どうぞご無礼をお許し下さい。」

「いえ気にしていません。ところで聞きたい事があるのですが……」

「その前にこれをお受け取り下さい……」

マルーヌが心に差し出してきたのは小さな袋だつた。その中身を開けてみるとたくさんのお金。これはもしかや……

「どうぞこれからもよろしくお願いします。」

「……分かりました。」

「……なっ!?!」

心の言葉にリリヌ達は驚きの声を上げる。それもそうだろう。マルーヌがやった事はいわば賄賂。しかもそれを受け取るという事は奴隷売買を見てみぬふりをするという事であるからだ。

「フヒヒ…でわ私はこの辺で、ごゆっくりおくつろぎ下さい。」

「將軍、どういう事だ!?!」

「説明してください!?!」

マルーヌが出て行ったすぐ後にリリヌとキースは心に詰め寄つた。バーンは顔をしかめてはいたが何も言わなかつた。

「全員この件には手を出すな。」

「何言ってるんだ!？」

「今この街で騒ぎを起こすわけにはいかない。」

心はそう言つともう何も言う事は無いといったように押し黙った。キースはさらに怒りを募らせる。

「お前…見損なつたぜ。オレは勝手にさせてもらつ！」

「ちよつとキース!？」

キースは心が上官である事も忘れて罵言を飛ばすと早足にどこかへ行ってしまった。リリヌもそんなキースを追いかけていく。

「今回はワイもキースに同感やで。將軍はん、他の將軍とは違う思てたけど…見損なつたわ。」

そう言つてヘテロもどこかへ行ってしまった。後にはバーンと心だけが残される。二人とも数分間はお互い黙っていた。

「…で、どうしてあんな命令をした。まさかオレにまで説明無しとかいうんじゃないだろうな。」

「…説明する事は何も無い。」

「テメエ、いつからそんな軟弱になつた？」

バーンは心の首元の襟を掴む。そして周りの事もお構いなしにあらん限りの声で怒鳴った。

「答える。何でテメエはそんな軟弱になつてんだよ!オレ達第10軍団を上を上げるって話は嘘だったのか?エエツ!！」

心はそんな震えあがるほどのバーンの迫力にもただジツと黙っていた。バーンは埒が明かないとばかりに心の首元から手を離す。

「悪いがオレはもうこれ以上お前に付き合ってられねえ。」

そしてバーンは宿に向かって歩いていった。そんな様子を黙ったまま見つめていたシェリーは心にかけてやる。

「姫様、はしたない姿を見せてしまつて申し訳ありません。」

「そんなことは構いません。ですがなぜあんな事を言ったのですか？」

心は黙る。シェリーは奥の手としてこの言葉を発した。

「これは聖ヴァルミア神国の姫としての命令です。答えなさい。」

「……ここで奴隷売買を取り締めれば確実に争いになります。」

「えっ……？」

シェリーの驚きにも構わず心は言葉を続けた。

「争いになれば当然死者も出ます。それに奴隷を買っている常連客には貴族も多い。ここを潰せばオレ達は本国の貴族に目を付けられます。そしてまた争いが起こる……もう、もうオレは誰も死んで欲しくないんです。こんな軍人として失格です……」

それは將軍からでもなく、また戦友からでもなく、心の心からの願い。気づけばシェリーは心を抱きしめていた。

「確かに死者は出るかもしれませんが。ですがここで見放せば奴隷の方が何十人、いえ何百人も死んでしまつかもしれません。あなたはそれでも良いんですか？」

「ですが・・・」

「それに全然失格じゃありません。戦う人の事を考え、死を思う。私は素晴らしい軍人だと思いますよ？正しい事をして悪い事は何もありません。」

心は顔を上げた。そしてシエリーと目を合わせた時、もう心の心には迷いは無かった。そんな心とシエリーを二人の人影が見ていた。

「全く世話の焼ける將軍だぜ。」

バーンは馬車の影から二人の様子を見ると静かに宿へと向かっていた。そして二人を見ていたもう一人は・・・？

「何よ。国軍の軍人でも少しは良い所あるじゃない。」

馬車の中でこっそりと見ていたクリスだった。そんな彼女の口元に笑みが浮かんでいた事に気づいていたかどうかは彼女自身にも分からなかった・・・

#### 第四〇記 奴隷達の反乱

深夜。奴隷売買の時間も終わり、皆が寝静まった頃に三体の影が動いていた。その影は奴隷たちがいる牢がある建物へと移動する。

「ちょっとキース、本当にやるの？」

「当たり前だ。こんなの見てられるか。」

「でもちよいとキツインちゃんかなあ……？」

コソコソと動くキースを後ろからリリヌ、ヘテロの二人がついていく。彼らの目の前には奴隷たちを見張る警備兵の姿があった。

「あの将軍が使えない以上オレ達がやるしかないんだ。」

「でも……」

「お前はあの頃のオレ達を忘れたのか!？」

リリヌはグツと黙る。それを見たヘテロは彼らの昔が気になったがあえて聞く事はしなかった。誰にでも言いたくない過去はある。

「んで、作戦はどうするんや？」

「もちろん考えてあるのよね？」

「おう！とりあえず突撃して番兵蹴散らして奴隷解放!!」

「……それだけ？」

「それだけだ!!」

その瞬間にリリヌがキースをひっぱたく。ヘテロも顔を片方の手の平でダメだこりゃという風に覆った。

「無理に決まってるでしょうが!？」

「こりや作戦から考えなあらへんなあ。」

「じゃあオレも・・・」

「アンタは黙ってなさい！」

二人はため息を吐きながら作戦の話をしだす。キースはそれに混じろうとしたがリリヌによって強制排除された。・・・しばらくしてどうやら話が決まったようで二人ともキースに向き直る。

「決まったわ。作戦はこうよ。まずヘテロとキースが建物の前で騒ぎを起こす。そこから私が番兵が建物から離れた隙について奴隷を解放する。」

「分かった。つまり暴れればいいんだな？」

「まあ・・・それでいいわ。じゃあ作戦を開始するわよ。」

「了解！！」「」

そしてキースとヘテロが番兵の前に飛び出す。

「ん？あれはさっき来た兵士のやつらじゃないか？」

「何か用があるのかな？」

番兵二人はキースとヘテロに近づく。その扉の裏に、リリヌがまわった。

「おいお前ら何か用ゲフツ！？」

「何をすグアツ！？」

キースとヘテロはその近づいてきた番兵を言葉を最後まで言わせず叩き伏した。二人の番兵は即座に倒れる。

「侵入者だ！全員あの二人を捕らえろ！！」

「いきなり派手やなあ。」

「どんだん来いや!!」

「よし、今の内に……」

リリ又は建物の中に入る。そこでは武装した兵士達が走り回っていた。どうやらみんな外の騒ぎに気を取られて誰もリリ又に気づいていないようだ。これは好都合……

「えっと、牢はどこかな……?」

リリ又は周りを見渡すと地下室へ行くらしい小さな階段が見えた。あれか……?

リリ又が階段を下りていく。階段を下り終わると奴隷の監視役らしい一人の兵士と牢の中に入れられたたくさんの奴隷がいた。

ピンゴッ!

「おい、何があつたんだ?上で騒ぎが起きてるようだが……」

どうやらこの兵士は牢の監視をずっとしていたらしくまだ上の騒ぎの内容を知らないらしい。騒ぎが起きてても自分の持ち場を離れないとは見上げた心意気だ。だが今回はタイミングが悪かった。

「悪いけど鍵は渡してもらつわ。」

「はっ?グフツ!??」

リリ又は監視役の兵士の鳩尾に拳を叩きこむ。その兵士は言葉を発する事も無くその場に崩れ落ちた。しかしこの兵士も今日の日が監視の当番など運の無い男だ。

「どこにあるか・・・これね。さあみんな逃げなさい。」

「アンタ達は・・・？」

「説明は後！今は逃げる方が先決よ！」

奴隷はリリヌが味方の兵士を攻撃したのを見て困惑していたが、一人、また一人と牢から出てきた。

「ほらさっさと逃げるわよ！」

「でも上には兵士がいるのにどうすれば・・・？」

リリヌはしまった！？といったような顔をした。侵入する方法は考えたがそれから奴隷たちを逃がす方法を考えていなかった。

「うーん・・・」

リリヌの頭の中にパツと考えが浮かんだがそれは危険な事だったがこれしか方法は無い。

「みんな聞いて！危険だけど・・・これしか方法は無いわ。」

リリヌの声に奴隷たちが耳を澄ませて聞く。そして作戦を聞くとみんな生き生きしたような顔になった。

「よし乗った！」

「どうせここにいたって売られるだけだ。ならやつらに目にモノを見せてやるうぜ！」

「・・・そうだそうだ！！」「」

地下室が奴隷たちの声で一杯になる。その声が聞こえたのだろう。数人の兵士が地下室に下りてきた。

「おい何を騒いで・・・お、おい！？お前ら何故牢屋の外にいる！？」

「みんな作戦開始よ！」

「「「オオオオオオオオツ！！」「」「」

リリヌの声で一斉に奴隷たちが兵士達に突撃をしていった。

「止まれ！く、来るな・・・ヒツ・・・ウワアアアアツ！？」

「「「オオオオオオオオツ！！」「」「」

兵士達が武器を構えるが、奴隷たちのあまりにもすごい気迫に兵士達は瞬く間に飲み込まれた。奴隷の数人が兵士達の武器を奪うとそのまま建物の中を突き進んだ。

「何だ！？」

「奴隷達だ！奴隷達が反乱を起こしたぞおおお！！」

「ギャアツ！？」

建物の中の兵士達が奴隷の存在に気づくがその気迫に押されて次々と倒された。奴隷達はある一点に向かって突き進む。目的地は・・・

「武器庫を襲ええ！」

武器庫だった。リリヌの作戦は単純明快だ。ただこう言っただけ。

戦いなさい。

つまりリリヌは奴隷達を解放する為に兵士達と戦えといったのだ。そして一部の反乱は周りに飛び火する。他の場所からも同じような

出来事が起こり、結果。  
奴隷達の大反乱が起こったのだ。

「全員逃げるな！武器も持っていないただの奴隷共だぞ！？」  
「ヒツ……こいつら何なんだよ……」

兵士達は応戦しつつも奴隷達の気迫に押されて後ずさる。武器庫を占領した奴隷達はそこを拠点に本格的に街の兵士達と戦い始めた。こうなると分が悪いのは街の兵士達の方だ。

「も、もうダメだ！？逃げろ！！」  
「オレももうやってられるか！」  
「こ、こらっ！逃げずに戦え！？」

一人の兵士が逃げだすと後の全員が武器を捨てて逃げ出した。それを奴隷達が追いかける。そこでリリヌが制止をかけた。

「深追いはダメ！」  
「オレ達の恨みをあいつらに思い知らせてやれ！」  
「待って！止まりなさい！お願い止まって！？」

だがここで一つの誤算が起きた。奴隷達は今までの鬱憤が溜まっていた為、リリヌの制止も聞かず、兵士達を追いかけて街の入口まで向かって行ってしまったのだ。街の外にいけばキースとヘテロが誘いだした街の警備兵の本隊がいる。奴隷たちでは敵うわけがない。そしてリリヌが奴隷達に追いついた時には考えられる中で最悪の事態になっていた。

## 第四十一記 意外な結末

「はあっ……はあっ……嘘……」

息を切らしながら奴隷達に追いついたりリリヌはその目の前の光景を見て顔を真っ青にさせた。それもそうだろう。街の外には警備兵が両手に弓矢を構えて狙っていたのだ。もちろんその狙いの先は奴隷達。

その先頭には卑しい顔をしたマルーヌが高笑いを上げている。

「ハハハハッ見たか奴隷共め！屑のくせに調子に乗るからだ。貴様ら今すぐ串刺しにしてやるからな！！」

「リリヌ……」

「もうアカンわ……」

兵士達に捕まったキースとヘテロがうなだれる。作戦は途中まで成功していた。だが結果は失敗……その原因はリリヌが奴隷達の怒りを過少的に思いすぎていた事だ。

長年、奴隷達は兵士達によって辛い目に合わされていた。その怒りの大きさはリリヌの想像を予想以上に越えていたのだ。

「うっ……」

奴隷達が絶望の顔で一步後ずさる。そして警備兵達はその光景を見てさらに弓を引き絞る。中には笑っている兵士までいた。

「將軍様。この反逆者達の処遇をいかがいたしますかな？」

マヌールがそうというと警備兵の後ろからは心達第10軍団の面々が

弓をもって並んでいた。それを見たりリ又が心を睨む。

「將軍……」

「マルー又殿、今日はこのような事態になって申し訳ない。」

「気にしないでください。こちらともご鼻屑ひじきにして下さっていますしお互い様ですよ。」

「でわ処罰はこちらが決めて良いのですか？」

「ええどうぞどうぞ。」

心は右腕を高く上げると兵士達が弓を構える。

「テメエ味方を殺す気か！」

「そこまで落ちたんか!？」

「ヒヒヒッ！」

キースとヘテロが心に暴言を飛ばすが近くの警備兵に地面に押さえつけられた。マルー又はそれをみて心底愉快そうに笑う。だがその笑いは心の次の言葉で止まった。

「全軍警備兵に狙いを定めろ！」

「はっ？」

マルー又はわけが分からないといったような顔をする。だが心は平然としていた。

「將軍様？命令が違うのではありませんか？」

「いいえこれで良いのです。マヌール殿、おとなしく投降してください。」

「將軍様、冗談が過ぎますぞ！」

マルーヌはとうとう顔を真っ赤にさせて声を荒げた。周りの兵士達はいきなりの出来事に頭がついていかず、オロオロしている。

「マルーヌ・ジャンエイボ。貴様を奴隷売買をしていた罪で拘束させてもらう。」

「ふ、ふざけるな！おい、こいつらを殺してしまえ！！」

「この人数差で戦うのですか？」

心の声で第10軍団の兵士達が構えていた弓が引き絞られる。いかに敗戦直後だといっても正規の軍兵士と警備兵では練度も数も違う。それが分かった兵士達は諦めた顔で次々と自分の弓を下ろしていった。

「こら何をしている！？戦え！やつらを殺すんだ！！」

「こいつを拘束しろ。」

「貴様らこんな事をしてタダですむと…こら放せ！？」

マルーヌの近くにいた兵士が一齐に取り押さえにかかる。マルーヌは抵抗するがあっさりと縄でしばられた。リリヌとキース、そしてヘテロはその一連の動作を見ながら呆然とする。

「何で…」

「どうなってんだ？」

「お前ら、將軍の命令を聞かずに勝手な行動は本来ならば厳罰ものだ。だが…今回は重罪人を捕らえたので不問にする。」

三人はえっ？といった様な顔でまだ状況を把握出来ていなかった。ただ一つ分かった事は自分達は助かったということだ。その途端にリリヌは腰が抜けたらしくその場に崩れ落ちた。

「ふう……」

「マルー又を殺せ！」

だが話はまだ終わっていない。奴隷の一人がそう叫ぶと周りにいた奴隷達が一斉に騒ぎ出したのだ。

「そつだ殺せ！」

「オレ達をこんな目に合わせた街のやつらもだ！」

「殺せー！ー！ー！」

今度は警備兵達が絶望の顔をする番だった。奴隷達が一斉にマレー又と兵士達に向かってきたのだ。その時一つの声はその歩みを止めた。

「待てえっ！ー！」

その大気が震えるような怒声に隷達の動きが一瞬で止まる。その声の主はバーンだった。

「今お前らがそいつらを殺すとお前らも街のやつらと一緒になっちまうぞ。」

「……」

奴隷達が黙る。バーンはそのまま言葉を続けた。

「いいのか？お前達はいいつらの様に人殺しじゃないだろう？」

「じゃあオレ達はこの怒りをどこに持っていけば良い！？」

バーンが問いかけると一人の青年がバーンに問い返した。

「お前は？」

「オレはバズ・ガラナ。なあ教えてくれ。オレ達はこの怒りをどこに持っていけば良いんだ？妹を、母を、父を、息子を、娘を、恋人を、家族を殺されたこの恨みはどうやって晴らせば良い！！そいつらを殺すしかないだろ！？」

「そうだ。娘の敵を……。奴隷達の間でまたざわめきが起こる。それをバーンは……」

「そしてお前らは殺すのか？その番兵達のように。」

それは静かに、しかしなぜか透き通った声だった。

「その番兵達にも家族はある。お前らは自分にされた事を今度は自分がするのか？」

「うう……」

バズはその場に泣き崩れる。それから次々とすすり泣き、あるいは大声で泣く声が聞こえた。

「もうこんな事を起こさないようにするのがこれからのお前達の役目だ。その辛い気持ちをこれから出来るお前達の子供に二度と味合わせるな。」

そう言ったバーンの表情は少し泣いているように横にいた心には見えなかった。そして奴隷達の反乱は終わりを告げた。

## 第四十二記 帰還

奴隷達の一件から数日が過ぎた頃、心達は首都、ヴァルハラを目指して出発していた。アルクラウドの街を出る瞬間には街中といえるぐらいの数の奴隷達が一斉に見送りをしてくれた。このアルクラウドの街が後に自由の街としてその名が知られるようになるのはまた後の事である。

「それにしてもコイツはどうするんや？」

「もうここで死刑にしてもオレは良いと思うんだがな。」

「まあ一応法の裁きを受けさせないと……」

行軍しながら話すヘテロ達の後ろの馬車にはマルーヌが縄で縛られ、口に猿ぐつわを噛まされて横たわっていた。

「ウググツ！ムグツウグググツググウグー！」（貴様ら、この私にこんなことしてタダですむと思うなよ！！）

「何言ってるかわかんねえよ。」

「もうコイツ捨てても良いんちゃうか？」

「私もそんな気がするわ。」

リリヌが軽く怒気を含ませて睨むとマルーヌは顔を恐怖にひきつらせて（そういう風に見えただけかもしれないが）そのままおし黙った。

「リリヌ怖ええ……」

「おいアイツあんな性格だったか？」

「今なら目だけでも人を殺せそうやで……」

「何か言った？」

「「何も言つてません!!」「」

リリ又が振り向いたのを見てヒソヒソと話していた三人が一齐に直立不動になる。あのバーンでさえもそうなるという事は余程今のリリ又は怖いのだろう。

「そ、それより將軍はどうしたんだ？」

「將軍なら姫様と馬車の中で話してるわよ。余程お姫様に気に入られたみたいね。」

空気を変えようと話題を変えたバーンにリリ又が平然と答える。それを聞いて野次馬根性丸出しのキースとヘテロが口を出してきた。

「もしかしたら逆玉の輿もあるんちゃうか？」

「マジかよ？そうしたらオレ達優遇されるんじゃないか？」

「そんな事あの真面目な將軍がするわけないでしょ。」

「だよなあ…あゝオレもあんな美人な妻がほしいぜツウ!？」

「……」

リリ又は無言でキースのつま先を踏んだ。キースは言葉も出せずにつま先を抑えながら涙目でリリ又を恨めしそうに見上げる。

「フンっ！」

「…なんかリリ又いきなり怖あなつたなあ。」

「それには同感だ。」

ヘテロとバーンはリリ又に聞こえない小さな声で話しながら言い争いをする二人を見たのだった。そんな中で馬車の中にある心はシェリーと今後の事について話し合っていた。

「……ですから本国に帰れば何らかの処罰は免れないでしょうね。」

「そんな……でもあそこで撤退しなければみんな死んでいました！」

心の言葉にシエリーは反論する。話して手分かった事だがシエリーは城で戦術論や武芸・戦略論も学んでいるらしく、戦いの知識にはかなり詳しくかった。

「それでも自分達は本国の命令に背いて撤退しました。これは命令違反と同じです。」

「私を送り届ける為という名目ではダメなのですか？」

「それなら他の兵士に任せれば良い事です。」

シエリーの反論を心はことごとく潰していく。シエリーは確かに頭は良いし回転も速い。しかし政治的駆け引きには疎いようだった。心と第10軍団は何故かはわからないが本国の上層部に嫌われている。その上層部が今回の心達の失敗を軽くすませるなどあるはずが無いのだ。恐らくどんな理由があろうとも自分を引きずり落とそうとするだろう。下手すれば死刑も、なら最低でも自分の命だけで事が済むようにしなければ……

「ならどうすれば良いんですか!？」

「どうするもありませんね。とりあえず少しでも他の人たちの罰を減らすように努力してみます。」

とうとう冷静なシエリーも大きな声になる。それを心は冷静に返した。

「心さんは平気なんですか？」

「何がですか？」

唐突にそんな事を聞くシェリー。心はそれを聞いて首を傾げる。心にはシェリーが何を言いたいのか分からなかった。

「そうしていつも自分を犠牲にして、です。心さんはそれで平気なんですか？辛くはないんですか？」

シェリーは泣いていた。そんなシェリーの目を心は優しく指先で拭う。平気なんて・・・

「オレはもう誰にも傷ついて欲しくはないんですよ。」

「私だって心さんには傷ついて欲しくはないんです。」

二人は静かに見つめ合う。それを馬車の端で見つめる一人の少女がいた。他でもないクリスである。

「アンタ達さ〜もうちょっと周り見てからイチャついてよ。」

「わ、悪い……」

「そんなイチャついてるなんて……」

クリスが注意すると心は心底すまなさそうな顔をし、なぜかシェリーは顔を赤らめて激しく首を振っていた。それを見たクリスはハアッ…とため息を漏らす。ちなみにクリスは心が逃げだすことはないだろうという事で縛られていた両手足の縄を解いていた。

「究極の女たらしね。」

「そんな、オレは女たらしじゃ…」街が見えてきたぞ〜」・・・行こうか」

心は弁解しようとしたが到着の声にクリスがサッサと馬車を降りて

しまったので諦めてシェリーに行動を促した。

「はい！」

シェリーは元気に返事をする。そして心達は馬車を降りていく。こうして心達第10軍団は再び首都、ヴァルハラへと戻ってきたのだ。

## 第四十三記 デカルト陥落のその後

「どういう事だ!」

デカルト砦でデイザイルはひざまづいている青年に向かって怒声を浴びせた。それは部屋中に響くぐらいの大声で普段温和で冷静な彼がこんな声を出すなど珍しい事だった。だが今回はそんな彼でも見逃せない事であった。

「貴様はその時クリス様を逃がしたハズでは無かったのか。」

「はい、確かに・・・」

「なら何故クリス様はいない!」

クリスのお世話役であり今現在怒声を浴びせられている青年、ベンはその言葉に困惑の表情を浮かべながら説明をし始める。

「ヒック…グスツ…」

「クリス様、どうか泣き止んでください。」

あの日、落ちゆくデカルト砦から逃げだしたベンとクリスは崖の下にあった洞穴で野営をしていた。周りが暗くなってきた事と夜は夜行性の肉食動物などがいる為危険と判断したからだった。

「・・・」

クリスは何も喋らない。デカルト砦から脱出してきたのは良いもののバルザ將軍を失った心の傷は大きかったようでそれから一言も話さなくなってしまったのだ。

「バルザ將軍の事は残念に思います。しかしアナタ様は死んではないけない人間なのです。」

クリスはまだ無言のままだ。しかしそれに構わずベンは一人で喋り続ける。

「そして私はバルザ將軍からアナタ様を守るように言いつけられました。私にはバルザ將軍の最後の命令を果たす責任と義務があります。」

「どうして戦わなかったのよ・・・」

クリスが小さな声でポツリと漏らす。そして今度は大きな声で叫ぶように続きの言葉を言った。

「私の事は放っておいておじさまの所で戦っていればおじさまは死ななかつたかもしれないじゃない!!」

「ですから私にはクリス様を守る責任と義務が「そんなのいらねいわ。自分の身は自分で守るわよ!」アナタなんかただの弱虫じゃない!!」

クリスの言葉がベンの胸に刺さる。確かに自分がバルザ將軍の近くにいれば將軍は死ななかつたかもしれない。ベン自身もそんな後悔にかられていたからだ。弱虫、それは確かに今の自分にふさわしい言葉かもしれない。だが彼にも譲れないモノがある。

「確かにそうかもしれませんが。ですが私は私の出来る事をします。」

あの時はクリス様を逃がす事が自分に出来る事だった。」

「そんなの言い訳よ!」

「言い訳でも構いません!私は私の出来る事をします!!」

ベンがハッキリ言ったその言葉にクリスは言い返せなかった。確かにあの時出来た事は自分を逃がす事だけだ。そんなのクリス自身でも分かっている。しかしそれでもやり切れないモノがあった。

「そんなの…そんな…」

クリスの目にまた涙が溜まってくる。そんなクリスをベンは悲しそうな目で見つめた。

「ナーデルを失って今度はバルザおじさままで…私はこれからどうすれば良いの…?」

「クリス様はクリス様の出来る事をすれば良いのです。」

「私の…出来る事。」

「はい。」

そこからしばらく会話に間が出来る。辺りは暗くなり少し肌寒くなってきた。

「では私は近くで薪を取ってきます。何かあれば呼んでください。」

ベンはそのまま洞穴の外へと出ていく。クリスはベンが出て行っただけから先ほどの言葉について考えていた。

私が出る事…婚約者であったナーデルを失い、そしてバルザおじさまをも失い何も無くなった自分に何が出来るのだろうか?ふと城で思い立った考えがまた頭をよぎる。

復讐。

今自分が出る事はそれしかない。いやそれは自分にしか出来ない。

クリスマスの中でその言葉が濃くなっていく。

「クリスマス様、お待たせしました。ちょうど食べれる木の実がありましたので取ってきました。」

ベンがたくさんの薪と少しの木の实を持って帰ってきた。そしてその枝を一か所に集めて火をつけようとする。その瞬間クリスマスは今しかないと思った。クリスマスは近くにあった自分の短剣を拾う。ベンは火をつけるのに夢中でクリスマスが短剣を持っている事に気がついていない。

クリスマスはベンの後ろに回る。ベンはまだ気がつかない。・・・とそこでようやく薪に火がついたようだ。

「あつ… やつと火が付きましッグツ!？」

クリスマスはベンの頭の横を、短剣の柄で思い切り殴った。女の子の力とはいえ物は短剣の柄でさらに頭だ。ベンは堪らず倒れ込み、気を失う。

「・・・ごめんね？」

クリスマスは集めてきた薪を全部炎の中に入れてとさらにベンと一緒に取ってきた木の実を持って馬に乗る。幸いクリスマスはバルザに乗馬を教えてもらっていた為、馬には乗れた。

「私がナーデルとバルザおじさまの敵を取る。それが私に出来る事だから。」

そして暗闇の中、クリスマスは元来た道を駆け抜けるのだった。

「……っというわけです。」

ベンの説明にデイザイルは驚きが隠せなかった。まさかクリスマス様自身がそんな行動に走るなど。確かに血気盛んな妹君ではあったが。だが気になるのはクリスマス様の居所だ。今の話からすると……

「という事はクリスマス様は今……」

「恐らく敗走した第10軍団の中に潜んでいるかと。」

「これは出陣を早める必要がありますね。」

「デイザイル將軍、自分の処罰は……?」

「クリスマス様を絶対に救出しなさい。それまでは不問にします。」

「あ、ありがとうございます!」

ベンは深々と頭を下げる。それと同時にクリスマス様を絶対に助けると  
いう信念も同時に生まれたのだった。これは心が帰還する三日前の  
出来事である。

## 反の章 第四十四記 軍事裁判

薄暗い暗闇の空間。外界から閉ざすように周りに組み立てられた岩の壁。そして目の前には何本も並べられた鉄の棒。そして外には体格の良い鎧姿の兵士が一人。

「オレはいつまでこんな所に入れられるんだろうなあ・・・」

そうぼやくのはヴァルミア軍第10軍団の司令官である桐生心だ。いや「だった。」というべきであろうか。周りを見渡す。カビ臭く狭いその部屋には物は寝る為の布切れ一つしかない。つまり言うところのここは牢屋の中である。

「まさか帰っていきなり牢屋行きとはなあ。」

心達第10軍団が帰還した時、街では街民が総力を挙げて歓迎のお出迎えをしてくれた。それはさながら敵を倒して帰ってきた英雄を迎えるように。心達もそれに驚いたもののその歓迎を笑いながら受けていた。しかし城に入った瞬間、心は城の兵士達によって捕らえられ、牢屋に入れられてしまったのだ。

ここに入れられて早数日である。そろそろ何か何か伝えられてもよい頃だと思っただが・・・

「桐生心。」

心がのんびり座っていると名前を呼ばれた。顔を上げると城の兵士数人が牢屋の鍵を開けてオレを待っていた。

「出る。貴様の裁判が始まる。」

そしてオレは数日ぶりに牢屋の外へと出た。兵士に連れられて行った場所は予想通り、裁判所だった。

「罪人を連れてきました。」

「ご苦労。」

裁判所の一番上にいるいかにも偉そうなお年寄りが心を連れてきた兵士に謝辞を述べる。そしてその後心へと顔を向けた。そして・

「ではただいまより、罪人、桐生心の軍事裁判を始める。」

心の裁判が始まった。脇にいるお年寄り：いや裁判官が心の罪状を述べる間、心は上の観覧席を見る。そこには煌びやかな衣装を着た貴族や鎧姿の軍人がニヤニヤしながら自分の事を見下していた。

「・・・であるからして罪人は国からの命令に違反し、我が国の兵士が勇敢に戦っている最中にデカルト砦からの撤退。見殺しにした・・・間違いないな？」

「はい。間違いありません。」

ザワザワつと周りの貴族達が騒ぎ出す。それから隣の者に「最悪だな。」「国の恥め」とヒソヒソ話をし始めた。しかもその内容がほとんど悪口だ。ヒソヒソ話するなら聞こえないように言ってもらいたい。

「静粛に！誰か罪人について、弁護の発言はあるか。」

「はい。」

弁護？こんな負ける事が分かっている裁判の弁護なんて誰がやるんだ。心は吐き捨てるようにその心の中で呟いたが、その予想と違って観覧席から手を上げる一人の若者がいた。心はその挙手する若者を見て声をあげる。

「クレス！？」

「よお心、久しぶりだな。全く帰って早々厄介事に巻き込まれるなよ。」

弁護人は心の上司であり親友のクレス・ウィルターだった。クレスは首都を出るときと変わらずおどけた口調で心に話しかける。しかしその会話も次に降り立つ威厳のある声によって止められた。

「クレス上級將軍。久しい友との会話も良いがそろそろ本題に入ってもよろしいかな？」

「はい、いつでも構いません。」

裁判長がクレスに聞くとクレスもさつきとはうって変わって真剣な表情になり弁護する場所へと立った。

「でわ弁護人が発言する。」

「はい。まず罪人はデカルト砦で戦う際に、本国に援軍要請をしていました。ですがそれは却下され満足な準備も出来ないままに戦闘に突入しました。この状況から罪人の罪を軽くする配慮があると思います。」

クレスは手に持っている紙を読みながらゆっくりと発言する。クレス、オレの為に調べてくれたのか…

クレスの言葉に心は感動したがその言葉に反撃する者がいた。

「裁判長、それについて意見が。」  
「何ですか。クローリー大臣。」

観覧席でキラキラした豪華な衣装を着ている貴族の中でも一際輝いている老風の男、クローリーが立ちあがった。

「まず援軍の件は軍部が十分その時の戦力で勝てると判断したからです。そしてその罪人の罪はそれだけではなく命令を無視して勝手に撤退し、あまつ我が国の兵士を無駄に見殺しにした事にあるのではないですか？」

「それは・・・」

クレスの言葉が濁る。確かに命令違反は軍にいるかぎり絶対にしてはならない禁忌だ。なぜなら戦いとは一人の勝手な行動でその勝敗が決定してしまう事があるからだ。故にその禁忌を犯してしまった心に言い逃れはできない。クローリー大臣は言葉を続ける。

「さらにその男は撤退途中にアルクラウドで略奪まがいの事をしたと報告が入っている。」

「略奪だと!？」

これには心も黙っていられずに叫んだ。

「オレ達は略奪なんてしていない!」

「被告人!発言を許可した覚えはないぞ。」

「それは何かの間違いでは?」

クレスも目を見開いて聞き返した。当然だろう。心達第10軍団はアルクラウドで騒動は起こしたが略奪などしていない。むしろ奴隷解放をした事で表彰されてもいいくらいである。

「いや間違いではない。そして何より罪人が犯した重い罪は・・・我が国の重要な人材であるジュペール上級將軍とアルベルト將軍の二人を身代わりにして自分だけ逃げた事だ！！」

これにはクレス・心の二人同時に衝撃を受けた。クレスは心の方に顔を向ける。

「心、それは本当か？」

「・・・」

心はクレスから顔をそらす。それで事実だと気づいたクレスは観覧席の手すりに手をつき、それから何も言わなくなった。

「...分かりました。判決は後に言い渡します。これにて閉廷！！」

ガンガンと手に持つ木筒を叩く。そして心の軍事裁判は最悪の形で幕を閉じた。

## 第四十五記 亀裂

「……將軍が牢屋に入れられた!?」「……」

遠征から帰還した後、いつも第10軍団が集まっていた宿舎で第10軍団メンバーは一斉に叫んだ。

「ああ、自分も最初は嘘だと思ったが：確かな情報らしい。」

神妙な面持ちで話すのはネウ口。だがいつも無表情なせいでそれが神妙な顔をしているのかは疑問に思う所だ。

「何ですよ。確かに遠征は失敗したけど最初の戦いは連勝したしデカルト砦も陥落させたじゃない!」

「すぐ取り返されたけどな。大方今回の遠征は無茶を無理やり押しとおしたものだっただろ。」

リリヌの言葉に机に足を乗っけているバーンが口をはさむ。そして彼はその後も続けた。それにヘテロが反応する。

「無茶?」

「ああ無茶、だ。大体オレ達第10軍団の数は普通の軍団の半分にも満たない。それに反乱軍の情報もほとんど無かった。スプール平原の反乱軍の数が良い例だ。2万なんて数、オレ達じゃあ普通勝てない。勝てたのは將軍が指揮していたからだ。」

「それならなんで……」

「分からないか?無茶を通して行った遠征が大失敗に終わったんだ。当然教皇の支持率は下がり、政治にも影響が出る。」

「バーンさんもっと簡単に言ってくださいよ!」

「だから…あぁめんどくせえ!!!」

自分の言葉を分かってくれないキースにバーンがガシガシと頭をか  
く。

「つまり「誰かが責任を取る必要がある。」・・・そうだ。」

「まさか・・・」

「分かったのか？」

キースはまだ分からないといった顔をしたがりリ又は分かったよう  
だ。ヘテロも分かったようで険しい顔をする。そして・・・

「スケープ・ゴート  
身代わり。」

小さく呟いた。それを聞いたバーンもネウロも頷く。

「そういうことだ。勝てると言われていた戦いに負けたんだから誰  
かが責任をとらなければならぬ。そうしなければ教皇の威信に関  
わる。ならどうすれば良いか？簡単だ。誰かに責任をなすりつけて  
身代わりにしまえばいい。ならその身代わりは誰が適任か。」

「そういうことかい。だから将軍が…」

「心将軍は直接今回の戦いで指揮をしていた。しかもデカルト砦を  
奪われさらにその戦いでロイ将軍とグラマ上級将軍が戦死したんだ。  
責任を取らせるには十分な理由だろう。」

「そんなのおかしいじゃねえか!？」

キースがドンつと机を思い切り叩きながら叫ぶ。その顔は怒りに満  
ちていた。それにリリヌも同意する。

「そうよ。だいたいデカルト砦だって国が援軍を送ってくれば取

られなくて済んだかもしれないのに。」

「そんなのは関係ないさ。東方の言葉にもあるだろう？勝てば官軍負ければ…ええと…」

「賊軍。」

「それだ！…つまり負けたオレらに反論することは許されてねえんだよ。」

バーンの言葉をヘテロが補足する。若干周りが気まずい空気に包まれながらもバーンは最後まで説明を終えた。

「でも…」

「オレ達が出来た事は将軍が帰ってくるのを待つだけさ。」

そして時間は流れていく。その夜、心がある牢屋の中で足音がした。どうやら誰か来たようだ。

「ここはもう良い。悪いが席を外してくれ。」

「ハッ、分かりました。」

「誰だ？」

心は警戒しながら慎重に相手を確認しようとする。牢屋の中で暗殺される可能性があるからだ。声的には男か…？

「心、オレだ。」

「何だクレスか。驚かさないでくれ。」

牢屋に来た人影はクレスだった。心はそれが分かって脱力したが裁判の事もあって二人の空気に気まずい空気が流れる。

「そっいえばオレの弁護を引き受けてくれたんだってな。ありがと

う。」

「気にするな。オレとお前の中だろう。それよりロイの事なんだがな。」

「……すまなかった。」

心はあぐらをかきながら深く頭を下げる。ロイが死んだのは自分の責任、そう頭の中にあつたからだ。

「気にするな…とはさすがのオレも言えないな。」

「すまない。」

「……なあ心。」

心はまた謝る。それを見たクレスが心の前にあぐらをかきながら心の名を呼んだ。

「何だ？」

「アイツは、ロイは自分の役目を守れたか？」

「…ああ、オレや兵士が生きてるのがその証拠だ。」

「そうか……」

クレスはポツリと呟くと立ちあがる。そして心に背を向けた。

「オレはお前を恨むつもりは無い。アイツも軍人である以上覚悟してただろうしな。ただ…少しオレに考える時間をくれ。」

「…本当にすまなかった。」

心は三度目の謝罪をする。謝っても死んだ者は帰ってこない。だがそれでも心は謝りたかった。

「じゃあまたな。」

そう言つて牢屋を出るクレスの姿はいつもの陽気な彼ではなくどこか哀愁が漂い、…そして何より寂しそうだった。心はその友人の姿にただ静かに涙を流すしかなかつた。

反乱軍六万の大軍勢が首都ヴァルハラに進軍しているという情報が入ったのはその翌日の朝の事だった。

## 第四十六記 大臣と答え

朝、騒がしい音の中で心は目が覚めた。この朝早い時間に何の騒ぎだ？

「緊急会議の準備だ！」

入口の階段から大きな声で兵士たちが大勢走りまわっているような足音が聞こえる。心は目の前でダラダラとしている見張りの兵士に聞いてみることにした。

「何かあつたんですか？」

「反乱軍が大軍で首都を目指して進軍してきてるらしいんだ。」

「反乱軍が！？」

「おうよ。おかげで朝から会議やら戦いの準備やらで大騒ぎだ。」

見張りの男も朝早くから叩き起こされたのだろう。眠そうに欠伸をしながら律儀に質問に答えてくれた。

「しかしここ最近には本当に戦続きだねえ。この城の貴族や軍人といったら自分の事しか考えないから叱らないのかもしれないかもしれねえが……」

見張りはそう言った瞬間「しまった！？」とといったような顔で心を見た。ああそういうことか。

「自分は貴族出身ではありませんから気にしませんよ。」

「お、兄ちゃん話が分かるね。」

見張りの男はホツとした様な顔をする。恐らく上司にチクられると

思ったのだろう。ここでは上司の機嫌を損ねると全てが終わるのだから。

「ええむしろ申し訳ありません。」

「兄ちゃんが謝る事じゃねえよ。しかしアンタそんな性格でこんな牢屋（所）にいるってことは大方上に嫌われたな？」

「ハハツ…まあそのようなものです。」

心は苦笑しながら応える。本当は最初から好かれてもいなかったのだが…。

「ダメだねえ。世の中賢く生きなくちゃ。」

「その賢いお人が今は牢屋の見張り番ですか？」

見張りは心の言葉に目を丸くさせると次の瞬間大笑いした。

「ガハハハハツ！いやゝ実は訓練をサボったのがばれてねえ。ここに飛ばされっちまったのさ。」

それからまた大笑いする見張りを見て心も小さく笑う。なかなか面白い人だ。しばらく笑っていると階段から誰かが降りてきた。

「ん、誰…し、將軍様!？」

「罪人である桐生心の様子は？」

降りてきたのは第8軍団の指揮官を務めているダジェル・イースリ―將軍だった。ダジェルは若干老年の入った顔を引き締めるように真剣な顔で心を見る。

「ほう…？貴公が桐生心か。」

「お初にお目にかかります。ダジェル將軍。」

「あいさつは良い。大臣がお前を呼んでいる。」

「大臣が？」

大臣といえばこの国の政治を一手に任されている大物じゃないか。そんな人物が最早罪人扱いされている自分に何の用があるんだ？

「そつだ。早く来い。」

訳が分からぬままに心は牢屋から連れ出される。そしてダジェルが歩く後ろをついていった。

「しかし私を連れてくるだけに將軍自らが来られるとは…意外でした。」

「フフツ…私も貴公と同じで上からは嫌われている身なのでな。」

ダジェルは含み笑いを持たせながら自分を卑下する。確かに歴戦の猛者であるダジェルが未だ將軍の地位にいるという事はそういう事なのだろう。

「將軍とは気が合いそうです。」

「私もだよ。さて、ここが大臣の部屋だ。」

ダジェルが立ち止まった先は城の奥の小さな部屋だった。大臣という身分にしては狭すぎる部屋ではないだろうか？ダジェルはコンコンツとドアをノックする。

「桐生心を連れてきました。」

「入れ。」

部屋の主がそう言うとダジエルは静かに部屋を開ける。そこにはソファーに座った老人がいた。

「ダジエル將軍、ご苦労だった。下がって良いぞ。」  
「でわ失礼します。」

ダジエルが部屋から出ると老人は心に向かって笑顔で話しかけた。

「初めまして、と言った所かな？」

「はい、お初にお目にかかります。桐生心と申します。」

「そう堅くならなくて良い。私はゲルド・ダツカーニアだ。この国の大臣を僭越ながら務めている。まあ座ってくれ。」

心は言われた通りに老人の向かい側のソファーに座る。一国の大臣と対面なんて何か落ち着かない。

「それで…自分に何か用でしょうか？」

「まあそう慌てないで紅茶でも如何かな？」

「…いただきます。」

「どうぞ。」

「うおっ!?!」

心はいきなり紅茶を持って出てきた女性に思わず声を出して驚いてしまった。

「これはこれは驚かせて申し訳ない。彼女は私専属のメイドをしているアスラだ。いつもいきなり出てくるから皆驚くのだよ。」  
「アスラ・シャンリーナです。どうぞお見知りおきを。」

ホッホッホッと笑うゲルド。確かにいきなり横から声がしたのでか

なり驚いた。こんな事で声を出すなんて自分もまだまだだなと心は少し落ち込んだ。

「さて一通り楽しんでもらった所で本題に入ろうか。っとその前に…君はこの世界をどう思う?」

「この世界…とは?」

「なんでも良い。この世界を君はどう思う?」

心はゲルドの周りの空気がいきなり変わったのと質問の内容に少し圧されたが少し考えてから口を開いた

「ひどい、と思います。貴族は自分の利益の為にしか動かず軍人も自分の出世の為にしか動きません。ここ以外の街や村は重税で苦しんでいるのに城の人は皆贅沢をしている。」

「左様、この世界は腐りきっている。だがだからこそ今が変革の時だ。」

「変革の時?」

「世界を作りかえる。そしてこの世界を昔の様に争いの無い平穏な世界にする。」

争いの無い平穏な世界、それが実現したならどんなに幸せだろうか?

「だからこそ今は反乱軍にこの世界を渡すわけにはいかない。本題に入ろう。君には第10軍団を率いて第2・6・8・9軍団と共に反乱軍を撃破してもらいたい。」

「私より優秀な指揮官はいくらでもいると思いますが…」

「君の話は聞いている。2万の軍勢を半分以下で破った事やデカルト砦を落とした事もな。この戦いに勝った暁には君を上級大将の位に任じよう。それに罪も帳消しだ。」

それは心にとつては願つてもない事だった。どうせこのまま牢屋にいても死刑は確実だ。それならば生きる可能性に賭けてみても悪くはない。久しぶりにみんなの顔もみたいしな。

「分かりました。その大役、謹んでお受けします。」

「おおそうか！頼んだぞ。ヴァルミアの未来は君にかかっている。」

そして心とゲルドは固い握手をした。この戦いが一体どういう結末を生むのか、その答えは誰にも分からない。いや、もしかすると答えは最初から決まっていたのかもしれない。そう彼が気づくのは戦いが終わった後だった。

## 第四十七記 不安要素

「將軍!？」

「心將軍!？」

「おおやつと帰ってきたか。」

出陣直前、心が釈放されてから第10軍団の兵舎に行くとの姿を見つけたキーズ達が出陣の準備も投げ打って一斉に集まってきた。

「牢屋に入れられてたんじゃ？」

「第10軍団を率いて今回の戦いに参群するって条件で釈放されたな。」

「指揮官がないのにオレ達に出陣命令が出るなんておかしいと思っていたがこれで納得したぜ。」

「バーン、留守にして悪かったな。」

心は久しぶりに顔を合わせたメンバーにあいさつを交わしていく。そんな事をしている内に時間はあっという間に過ぎていき、とうとう出陣の時間になった。心が馬に乗るとシェリーが不安そうな顔で心に近づいた。

「もう行くんですか？」

「ええ、出陣時刻ですから。」

「必ず生きて帰ってきてくださいね？」

「王女様の命令なら従わないわけにはいきませんね。」

「いいえ、これは王女としてではなく私…シェリー・ヴァルミニア個人の願いです。」

シェリーは少し潤めの瞳で心を見る。その瞳に心の心臓がドキッ!

と高鳴った。

「分かりました。生きて帰ってきます。」

「必ずですよ。」

そして反乱軍討伐の軍勢が今、首都から出陣した。一方、首都を指して進軍していた反乱軍は進軍を途中で止め、休憩の合間の軍議をしていた。

「…ですから国軍はこの地点で我々を迎え撃つハズです。」

「なるほどな。まあそこらへんはディザイル、お前に任せる。それよりクリスの居場所は？」

「はっ、第10軍団の中にいるという以外は未だ詳しい事は…」

「クリスのやつ一人で無茶しやがって…とにかく早く見つける。」

「分かりました。」

ディザイルは一礼してからテントを出る。彼もドラゴンと呼ばれながらもやはり人の子なんだな…

ディザイルは思った。それはドラゴンがディザイルが見たなかでも数少ない心配した表情をしていたからだった。

「クリス、どこにいるんだ？」

テントに残っていたドラゴンは一人そう呟く。そして一度テントの中を見回すと近く起こる戦いの指揮をとるために外へと出て行った。

首都ヴァルミアニアに入る入口をでてから真っ直ぐいった大きな街道。白龍と共に黒龍を倒し、ヴァルミアニア神国初代教皇となったアエル？世が初陣の時に最初にこの道を通ったことから聖者の道と呼ばれ

ている。そこで一人の男が演説していた。

「諸君、この戦い、敵と我々には決定的に違うものがある。それはなにか？我々にはアエル神の加護がある！反乱軍はアエル神の守護がある我々を敵に回したのだ。私はこれだけは言える・・・」

今回の戦いの総指揮官であり第2軍団の司令官でもあるゼクスが目の前に広がる多くの兵士達に叫ぶ。そして声を止め、一度深呼吸すると最後に声高らかに言った。

「正義は我らにある！！」

その声に周りの兵士が歓声で応える。それをゼクスは満足そうに見ると演説台から降りていった。それと同時に解散！という言葉が聞こえて兵士たちがバラバラと散らばる。そして心達第10軍団が固まっていた所にある男が近づいた。

「ようりりヌ。相変わらずシヨボイ軍団の所にいるんだな。」

「ジェリク上級将軍・・・」

その声を聞いたりりヌがあからさまに嫌そうな顔で第5軍団司令官であり、マカダ山脈の戦いで重症を負って本国に撤退した男、元りりヌの上司でもあるジェリクの方へと振り向いた。心も苦笑しながらジェリクの相手をする。

「戦いの準備は大丈夫なんですか？」

「反乱軍相手に準備なぞせずともワシの腕の一捻りで勝てるわ。」

「前の遠征で来て早々怪我して帰ったヤツが何を偉そうに・・・」

そう小さな声でキースが呟くが地獄耳というべきかジェリクにはそ

れが聞こえたらしく途端に真つ赤な顔でキースを睨みつけた。

「なんだとこの餓鬼っ！」

「ちよつと言つてみただけですよ。それでも凶星だからそんなに顔真つ赤にして怒ってるんですか？」

「言わせておれば若造が…この場でぶつ殺してやる！」

「キース、もうそのくらいにしておけ。」

二人の間でヒートアップしそうになるのを心が間に入って仲裁にはいる。

「ジェリク將軍、部下の非礼、真に申し訳ありませんでした。將軍のお怒りは最もですがここは私の顔に免じてお許しください。」

「…クツ、せいぜい敵と間違えられないように背中を警戒しとくんだな。」

ジェリクは上級將軍のメンツで大勢の兵士がいる前で頭を下げて謝る心を怒鳴り散らすわけにもいかず渋々捨て台詞を吐きながら自分の軍団へと戻って行った。心は頭を上げるとキースを睨みつける。

「キース、お前は少し自重する事を覚えろ。」

「けどよおっ！？すいません。分かりました…。」

キースは反論しようとするが心が少し本気で睨みつけたのでこちらも渋々といった様子で謝った。

「こんな様子で戦いは大丈夫なのかよ…。」

バーンが疲れた顔してそう呟いた。こうしてゼスク率いるヴァルミア軍は聖者の道で明後日に来る反乱軍を待ち受けるのだった。

## 第四十八記 決戦（激闘の始まり）

ジェリク將軍とのいざこざがあつてから時間は経ち、いよいよ決戦の日となつた。ゼスク率いるヴァルミア軍は左にジェリク將軍率いる第6軍団、右翼にベルガー・ロウ上級將軍率いる第9軍団、中央にダジェル將軍率いる第8軍団が布陣して街道を通せんぼする形で横一列に並んでいた。そして静かに敵が来るのを待った。

「来たぞ。反乱軍だ！」

前線にいた兵士が大声を上げて前の方向を指さす。すると自分たちの目の前に黒いゴマくらの小さな影が現れた。それがどんどんと大きくなる。しばらくするとそれが人だという事が分かる位置にまで反乱軍は進軍するとその軍勢は急にピタツと歩みが止まった。辺りを沈黙が支配する。

「・・・・・・・・」

きっかけ。

なんの勝負をするにもきっかけは必要だ。もつともこの場合はルールありの勝負では無く始まってからルール無しの殺し合いだが、それでも両軍はきっかけを探していた。戦いの開始を意味する合図のきっかけを……

まだ沈黙は続く。それは永遠に続くかと思われたがやっと合図が出た。

リン……ゴーン……

それは首都で鳴っているだろう教会の鐘の音。それを期に両軍の司令官が同時に声を上げた。

「全軍攻撃開始！」

どちらがどちらかを言ったかは分からないがそれを聞いた両軍は一斉に双方の敵に向かって武器を両手に持ち、雄たけびを上げながら向かっていく。そして両軍は…ぶつかった。

先につつかったのは中央に布陣していたダジェル將軍率いる第8軍団だった。第8軍団の兵士たちは皆叫びながら目の前の兵士に斬りかかっていく。遅れて右翼のベルガー將軍がぶつかり最後に左翼のジェリク將軍が戦闘を開始した。そして心率いる第10軍団はという。

「なぜオレ達がこんな中途半端な役回りを…」

「ゼスク將軍の命令なのだから仕方ない。それにこの役目も戦いにおいては重要だ。」

「しかしあのゼスクとかいう將軍バカなんじゃないのか？」

ボヤクキースを心が苦笑しながら宥める。心たち第10軍団は戦列を維持するために横に並んだ布陣の後ろを同じく横に伸ばして布陣していた。だがキースは不満顔だし横にいたりりも不服そうだった。ロイが戦死してから副官に就任したバーンにいたっては総司令官を馬鹿にする始末だ。

「兵が補充されたとはいえただでさえ他の軍団より人数が少ないのにそれをさらに割り振って横に並べだあ？しかも今回の戦いは回り込まれる心配ねえから人数割いてまで後ろ固める意味あまりねえだ

る。」

確かにバーンの言うとおりだ。ざっと見たところ戦場は広い街道なのだから回り込もうとしてもすぐ分かるし何よりそんな事をするなら早くから一部の軍を本隊から離しているハズだ。ならばここは自分たちを中央に投入して敵前線を破るのに力を注いだ方が得策だろう。

「しかもその將軍様が一番兵数多いくせにさつきから後方に陣張って動かねえし…本当に何考えてんだ？」

「ゼスク將軍にも考えがあるのさ。それより今は目の前の戦いに力を尽くそう。」

「報告します。中央のダジェル將軍から援護要請です。」

「ほらやつと仕事だ。第10軍団進軍するぞ。」

そして心達第10軍団はダジェル將軍率いる第8軍団を援護する為に進軍するのだった。一方援護要請したダジェル將軍は押される前線を必死に保っていた。

「報告！桐生心將軍貴下の第10軍団が援護要請を受けてすぐにこちらに向かうとの事です。」

「分かった。下がっていい。」

ダジェルは伝令兵の言葉を聞くとまた次の伝令兵が飛び込んできた。

「將軍、我が軍は反乱軍に押され、劣勢。このままでは中央の前線が崩壊します！」

「分かっている。もうすぐ後ろの第10軍団が応援にくるはずだ。」

それまで前線を保たせる！」

「ハッ！」

くそっぜスクめ…何をやっているんだ！！

普段自分に厳しく文句を言わない厳格な性格の老将が珍しく心の中で後方にいる総司令官に悪態をつく。そもそも全体兵力では敗戦続きといえどこちらが勝つ<sup>まさ</sup>ているのに軍団の中で一番の兵力を持っている第2軍団が後方で動かないせいで実際に戦っている兵力は向こうの方が上になってしまっているのだ。しかも敵に回り込まれる可能性は今の所低いのだから中央に兵を回しても全然問題ないハズ。

それなのに動こうともしないとは・・・

ダジェルは第2軍団に文句を言いたい衝動を必死に堪える。いくら納得いかない戦い方だとしても相手は総司令官であり位も向こうのほう为上なのだ。命令には従うという生粋の軍人氣質な性格を持っていたダジェルには命令違反などできなかった。例えそれが前回の戦いで自分たちの意見も聞かず、無理な突撃をさせて結果大敗北を喫した無能の将であっても。あの時、サラサ將軍の指示が無ければ我々は壊滅していたかもしれない。

「とにかくこの状況を打破しなければ…」

戦況は今の所劣勢。しかも敵の中央を率いている將軍は優秀らしく攻勢をかけても全く敵の前線が揺るがない。逆に無理な攻勢を仕掛けた分こちらの方がダメージを負う結果となり、ジリジリと前線が押されつつある。幸いにも敵は中央に兵力を集中させているらしく右左翼は前線を保っている。

「イスリー將軍、桐生心將軍率いる第10軍団が我が軍団と合流しました。」

何か戦況を変えるきっかけがある。ちょうど第10軍団も応援にきた。……よし。

「再度攻勢をかける。私も出るぞ！」

そしてヴァルミア軍の一番の古株でもありいくつもの激戦を生き抜いた老将、「不死身」のダジエルの異名を持つ男が今動き出した。

## 第四十九記 決戦（伝説という名の脅威）

聖者の道で激戦が繰り広げられている中、ヴァルハラ宮殿の中で一大事件が起こっていた。その報告を聞いたヴァルミア第1軍団司令官、ストラ・クトウルディーは慌てて王の部屋へと走る。

「教皇様!？」

「・・・間に合いませんでしたか。」

ストラが教皇の部屋についた頃にはすでに他の国の上役達が部屋に集まっていた。その中心にはベッドで目をつむったまま動かない教皇アエル三世の姿。

「先ほど息を引き取られた所です。」

「そんな・・・」

ストラはその場にうずくまる。そこに近づいていくのはゲルドだった。彼はストラの肩に手をかける。

「ストラ殿、悲しんではおれぬ。教皇様の分まで我らがこの国を良い方向に導いていかなければなりません。」

「そうだな。我らがこの国をより発展させていかなければならぬ。」

「それには反乱軍の討伐が最優先です。私に考えがあります。」

「考え?」

「はい。私に任せてもらってよいですか?」

この時、いつものストラなら冷静に物事を考えて判断するのだが今は教皇が崩御してすぐの為、精神的に不安定だった。だからつい言うってしまったのだ。

「任せました。」

「はい。では私は少し所用で…失礼します。」

ゲルドは一礼すると部屋を出て行った。それから教皇の葬式の準備の為、城の上役達が次々と部屋を出ていく。最後にストラが残ると彼は王のベッドに膝をついた。

「教皇様…私はこれからこの国を良くしていきます。天国で見  
ていてください。」

そう呟きながら教皇の前で誓う。だが彼は気付かない。ドアのすぐそばにゲルドがいた事に、そしてその顔がこれまで見たことがないような邪悪な笑みで満ち溢れていたという事に。

「アスラ。」

「ここに。」

不意にゲルドは誰もいない廊下で人の名前を呼ぶ。するといつの間  
にいたのかゲルドの後ろには膝をついたゲルド専属のメイド、アス  
ラが膝について彼の後ろにいた。

「地下に行く扉は見つかったか？」

「だいぶ手間取りましたがようやく見つけました。」

「場所は？」

「牢屋の一室の石に覆われた床下です。」

「フツ…なるほど。牢屋にあるとは意外だった。……行くぞ。」

ゲルドは牢屋の一室についた。その下では床の石は持ち上げられ、中に階段のようなものが下に続いていた。階段は今にも崩れそうなほどボロボロだったがそれを一步一步慎重に降りていく。

「ずいぶん深いな。それに脆い。」

「なにせ血地戦争時代のものですから。敵に見つからないようにする為でしょう。」

後ろから火で足元を照らしながら荷物を持ち、ついていくアスラがゲルドの呟きに答える。

「だがあの本によればこの階段の先にアレ（・・・）がある。」

「しかしあの話はただの神話では無いのですか？国を作った者がその栄光を後世に伝える為に作った作り話。よくある話です。」

アスラは半信半疑の顔でゲルドに聞く。するとゲルドは軽い笑みを浮かべアスラの方を振り向いた。

「確かに私も最初は作り話だと思った。だがあれは真実だ。私の父がそう言っていたのだからな。ついたぞ。」

アスラはまだ何か聞いたそうにしていたが階段が終わったのを見て口をつぐんだ。いや口をつぐまずしかなかった。階段の最深部には巨大な檻があったのだ。それは決して人をいれるものでもましてや門でもない。これは、

「まさか……」

「クククッ……」

アスラは振り向く。そこには手に顔を当てて笑っているゲルドの姿

があった。そして次の瞬間に彼は大声で笑い始めた。

「ハハハッ！ついに、ついに見つけたぞ。アエルの遺産、力を！父上は正しかった。私はついに見つけたのだ！！」

ハハハハッ！と手を広げて笑い続けるゲルド。その異様な姿にアスラは思わず恐怖した。その時頭上から声が聞こえた。

「誰だ？」

それは脳に直接響くような…語りかけているようなそんな声だった。

「私の名はゲルド。この地を変革し、導く者！」

「この地を導く？それはまた大層な夢を掲げたものだ。」

「大層ではない。お前がいればその夢は現実となる。さあ、私の夢の為に力を貸せ！」

「……なるほどな。クククッ…」

声の主はゲルドの声に沈黙で返す。しかし少しすると声の主から笑いのような声が漏れてきた。そして次の声にアスラは耳をふさぐ。

「ハハハハッ！おもしろい。おもしろいぞ人間。その狂喜の目。暗く、全てのモノを信じずただひたすら自分のみを信じるその目おもしろし。だが我はこの忌々しい檻で出られん。この檻を壊せば我はお前に力を貸してやろう。」

「その言葉に偽りはないな？」

「我を誰だと思っておる。二言は無い。」

「よし…アスラ。あれを持ってこい。」

「は、はい。」



声の主が大きく翼を広げる。そしてその雪の様に白い皮膚と獣の様な鋭い目、そして鋭く生える牙。ゲルドは高らかに叫んだ。

「ゆけ、生きる伝説よ！その力をもって反乱軍を捻り潰すのだ！！」

その日、近くに住んでいた村人達の間で地面から白き龍が飛び立ったのを見たという人が何人も出たという。心達が戦いをしている中、時代は変わろうとしていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9075f/>

---

ミュールニアー戦記

2011年1月22日23時37分発行